

は、眼前にわだかまる強大な氷河だ。ドラス驛は恐ろしい荒涼索莫の地で、浮世離れのした休憩所が一軒と、小さな郵便局が一つあるだけである。スル溪谷の上に行けばカルギイルといふ小さな町があり、これがレエへ行くまでの全行程中唯一の都會で、見るからに貧弱な市場と質素な病院とがある。此の山間の小都會から、通路は峡谷と小さな溪流との幾つかを経て、斜めに山上に走つてゐる。山上へは峠の隘路が二つあつた。ナミカラとフォチュラとがそれで、何れを行くにしても四千米以上の坂道である。さして難路ではないが馬は稀薄な空気のためか激しく喘ぎつゞけてゐる。十歩行つては停止つて一息入れる始末だから、全員が峠のつぺんに辿り着くまでに豫想外の時間がかゝつた。フォチュラ峠からは、岬々たる岩壁と雪田と氷河とが一瞬に集まる。北東にまたゝいてゐる凍つた鋸の齒がカラコルム連峯の一環だ。この頂上は七千米乃至八千米に達する。ナミカラ峠の隘路を標高する尖塔のすぐ横に、一頭の馬の骸骨が行儀よく膝を折つてゐた。彼が斃死する際に取つたそのまゝの姿勢であらう。齒は砂をかみ、頸は前のめりにのび、たゞ後脚だけが猛禽に持つて行かれたと見えて缺けてゐる。フォチュラ峠では、隊商の一隊に追ひ着いた。その一番後に哀れな疲れきつた痛々しいまでに瘦せ衰へた馬が、積荷なしで二人の男に左右を支へられながらヨロヨロと跟いてゐる。脇腹は凹み落ち、眼光は無表情に光澤を失ひ、鼻孔や口から血を噴いてゐた。峠の上で後から登つて来る此の隊商をやり過したときは、すでにもうさつきの衰弱した馬は見えず一人の男が荷だけを擔いでゐた。

この隊商路は一般にさしたる難路ではないが、時々ひどい、半分路が落ち込んだり、石塊や瓦礫で塞がつてゐる箇所もあつた。川を渡り溪流を越え、狭い穴だらけの橋を渡る際など、ことに侏馬ちびうまの脅え方は著しい。狭い吊橋なぞだと、馬の一步ごとにグラグラと揺れるものだから、馬はすつかり怖氣おそづいてしまふのである。

普通の二階家位の高さの懸崖に行くこともあり、時にはまた教會や寺院の塔の五六倍もあるやうな高い絶壁の上を辿ることもある。馬の蹄は、そんな場合ほんの一指尺位、いやその高い絶壁の端まで、時にはたゞの一時位イチヂの隙しかない地點を、深い谷底へ石塊などを蹴落しながら小刻みに進む。

私は一日此の奇妙な馬の習性に就いていろいろ考へて見た。いつたい、此の臆病な馬をして、やゝもすれば懸崖絶壁のあぶない綱渡りに自らかり立てやうとする誘惑は何處から来るのか。眼も眩くらむやうな深い底を覗くことが、馬の神経にどんな幻覺を及ぼすのか。それとも或ひは、馬の眼には深い浅いの區別がつかないのか。二百米の深さも二米の深さも同じやうに見えるのか。――などと考へてみた。だが、かういふ推理の當つてゐないことが直きに分つたのである。その説明は、非常に簡単だつた。つまり、積荷が多くの場合ひどくかさ張るため、積荷が岩壁にふれることを避けてなるべく崖がけぶちに接近した所を歩くのである。峠の隘路なぞが、崖がけぶちの方に限つて岩の破片や石塊の多い理由も同じだつた。馬も駱駝も驢馬も、いま云つたやうな心遣ひからいつも岩壁から少しでも離れて崖がけつづけばかり歩かうとし、それがしかも何百何千といふ數字で絶えず繰返すため、そ



の無数の蹄の力で自然と崖つぶちに近い方の岩が、脆く砕け易くなつて來るのである。

インドス河の源をなすインドス溪谷へ通じてゐる物凄い峡谷では、通路の數ヶ所にわたつて、斷層の崩れ落ちた個所があつた。假道路はほんの一指尺ばかりの幅で、崩落した斷層の上に通じてゐたが、眼下には、轉落した岩塊の累々たる間を縫つて溪流が渦まき返すといふ物凄い風景である。重荷を負うた馬たちが此の假道路を渡るときは、文字どほり輕業の綱渡りの曲藝だつた。馬がまつたく怖毛をふるつて足を進め得ないやうな難所となると、止むを得ず人力を加へてこれを曳いたり押ししたりしてやらねばならない。そんな場合、馬曳きの活動は悲壯を極める。ともすれば崩れ落ちる斷層に兩足を踏張つて、手綱を強引に曳きながら馬に鞭を加へる。馬は、その必死の氣魄に押されて最後の勇氣を奮ひ起すことが出来るのだ。峡谷に崩落した斷層の跡は、此の假道路からはほんの僅かしか見えないが、辛うじて此の難關を無事に突破したとき、私は思はずほつとしてふり返らざるを得なかつた。――

そんな難路もどうやら克服して、狭い溪流の谷に天幕を張つた時である。ぼろと毛皮を身につけた牧人風の男がやつて來て、羊と山羊とを買つてくれと申しでた。まるで千年も前の時代からひよつくり現はれたやうな男である。私は、從僕や馬曳き人たちの勞をねぎらふ意味で、彼等には一頭の山羊を買ひ與へた。重いやつで、価格は七ルピイだつた。山羊はその夜の中に屠殺され、定法どほりの處置をしたが、馬曳きの四人が、その屍體をかこんで眠ることに手配を決めた。山犬の盜賊

が忍び寄るのを防ぐ手段である。ところが、翌朝になると大騒ぎになつた。ゴラワラといふ馬曳きの如きは、口惜しさうに涙さへ浮べて私に訴へるのだつた。昨夜の山羊の肉が、骨一本残さず消えてしまつたといふのである。四人の見張りの隙を覗つて、狼か山犬の一群が浚つて行つたものであらう。

平均毎日二度か三度づつ、息苦しく喘ぎながら、封印された行囊を肩に走つてゐる苦力に出會ふ。行囊の内容は郵便物である。夜も晝も走りつゞけて、スリナガルレエ間を九日で連絡する。郵便物輸送の苦力は、一日平均十哩位づつ走るさうだが、その報酬は一ヶ月に十二ルピイである。中には随分老年の苦力を見かける。かういふのは恐らく、地球の周圍を二廻り位はすでに歩いてゐる勘定であらう。行囊の中には時として數千ルピイの價格が納められてゐることもあらうが、殆んど盗みや不慮の災害に襲はれた例がないといふ。落莫としたまるで人跡の杜絶してゐる深山幽谷の隘路に何等の警衛策も講じてないのだ。今度の旅行中、全行程を通じて一人の憲兵にも監視兵にも出會はなかつた。そればかりか、時には郵便行囊が通路に投捨てられたまゝ、それを見張る者が誰一人ゐない現状を目撃したこともある。恐らく、そんなとき苦力は何處かで、疲勞を休めてゐたのかも知れない。それとも或ひは、中繼交替の時間が嚴守されなかつたのかも知れない。

隊商にはよく出會ふ。昨日も今日も、明日もまた明後日も、數百年の昔から辿つたと同じ峠路を彼等は黙々として歩きつゞけてゐるのだ。今度の旅行でも、一日平均六回乃至八回位は出會つてゐる



る。或る場合は僅か二十頭位の驢馬、或る時は五十頭位の驢馬、稀には百頭も二百頭も蜿蜒長蛇の列を作つて狭い路を上下してゐる隊商も見かける。彼等が輸送する貨物は、主に羊毛、毛皮、フェルト毛布。それに東トルキスタンの毛氈もうせんに麻酔薬の原料等もあらう。麻酔薬などは毛皮などの間に縫ひつけてあるのが普通だ。一括りの荷の重さは彼等が辛うじて持上げ得る位あり、その容積は小さなビール樽位ある。かういふ樽いづばいの麻酔薬原料の價額はレエでは五十ルピイだが、一旦インドに渡ると二千ルピイに暴騰する。關税の高率なこと驚くべしである。

隊商が、遙か向うに急がずあせらず、ゆつくりと同じ歩調で進行してゐる光景は、何か玩具でも見てゐるやうだ。ときとすると彼等の實體は見えずに砂塵ばかりが濛々と動いてゐることもある。隊商は、好みの場所に、例へば岩の間に草が生えてゐるとか、泉が湧いてゐるとか、驢馬や駱駝を休ませるに条件のよい場所を選んで、隨時野營し、休息する。手頃な石塊いしころを三つ拾ふと、忽ち即席の籠かまどとなつて灌木や枯枝がパチ／＼と爆ぜ燃える。もしその時に日が暮れれば、彼等はそのまゝゴロリと横になつて眠るのだ。

前云つたフォチュラ峠をくだつた時の話だが、私の乗つてゐる侏馬ちびうまをひどく吃驚びっくりさせた事件がある。岩壁の曲り角からだしぬけに、ペンキを塗つたやうな黒牛が一头、にうつと首をつきだしたのだ。フェルト毛布の大きな荷を二つ背中につけてゐた。はつとして侏馬が立ちすくむと、續いて第二第三の黒牛が、同じやうな恰好で出て來た。總勢六十頭の黒牛の一隊である。いづれもペンキを

ぬつたやうに黒く艶々とした毛並で、房々とした尻尾をうち振りながら、途方もなく大きな角をつき出してやつて來たのだから、私の乗つてゐる侏馬ちびうまが吃驚びっくり仰天して兩耳をつきたてたのも無理はなかつた。黒牛は、不似合な短脚を悠々と動かし、鼻頭には太い木環がはめてある。隊商たちは、各自の持牛の傍にフェルトの木履をひきずり、長い煙管をくはへてゐる。時々、絹をさくやうな笛が鳴るのは、牛の脚を早める警告だ。何れも矢筒やづつに似たものを肩にかけ、その中には匙さしなどが首を出してゐる。腰帯には更に小刀と鐵製のほくち箱がぶらさがつてゐた。もう、どう見ても蒙古人らしく、肌も石炭のやうに黒々と日やけしてゐる。

巡禮者の一隊にも毎日のやうに出會つた。東トルキスタンの回教徒で、故郷へ歸る途中なのである。年々數千の人がメッカへの巡禮に出かけるが、途中で引返すものはほんの一小部分に過ぎないさうだ。話によると、今年もメッカ巡禮者の約一萬が、悪疫のために斃れたといふ。巡禮者はよほど苦勞が多いらしく、コップ一杯の水の價が、メッカではたうとう一ルピイまでに暴騰してゐるさうだ。

かういふ巡禮者の一行と二三日道づれになつた。男三人に女一人の小さな團體である。男は長い綿入れの長上衣カフンを羽織り、まるく平べつたい、毛皮の縁飾りのある帽子をかぶり、鞣皮なめしがはの長靴を穿いてゐた。婦人の方はすつかり顔を隠蔽してゐるので眼ばかり見えた。服装は白い衣裳に、明るい紺青の腰衣こしぎぬである。寝具、毛布、雜囊等、家財道具が數頭の馬に分擔され、男女は、厚い褥を敷い



た鞍の上に、半身を揺られて行くのである。そして、もう十一ヶ月も家をあけてゐるが、あと十週日の後には復び東トルキスタンのシヨオタン村に歸れると云つてゐた。

彼等巡禮者のとる行路は、今日では東トルキスタンのジャルカントからレエを通りスリナガルに出てカラチに行き、其處で汽船に乗る、といふのが普通らしい。巡禮者たちは、故郷から騎乗してきたジャルカント産の馬をスリナガルで賣拂ひ、歸路にはそこでまた別の騎乗馬を購入して歸るのである。

此の四人組の巡禮者たちと別れた翌日だつたか、我々は悼ましい一團に追ひついたのである。騎乗馬の背に、毛布でくるんだ巡禮者の死骸をかたく結へつけてあつた。これは再度北の故郷へ、高地の隘路を越えて歸ることを許されない哀れな巡禮の犠牲者だつた。同行の友人たちがいま、彼を一番手近な回教の墓地へ送り届けようとするのである。

我々と出會ふ人々は、隊商も巡禮者も、一樣に『ヂウレ!』と叫ぶ。從來、『サラム』と呼び合つた地方を通つてきた我々にはちよつと耳新しく、今更の如く旅愁を思はせるものがある。ヂウレは、西藏語で、『神の僕』の意味だつた。

黒褐色の蒙古流の頭をした男が、私に出會ひ頭に、舌をベロリとだして『ヂウレ』といふ。これも西藏から來たのであらう。

### OM MĀNI PĀDMĒ HŪM

平べつたい小屋の粘土屋根に、それぞれ灌木や枯枝が突さしてあり、それに白い布切が翻へつてゐる。黒い牛の尻尾が風に靡びく。マニ壁と呼ばれる西藏特有の防壁が通路に並行してゐる。時には五米位のもあるが、時には五十米から百米位も長いものがある。岩の角板で組立てたもので、高さはざつと二米内外、上部には扁平な石板が載せてある。此の岩壁に、どうかするとひどく藝術的な書體で、『オム マニ パドメ フム』といふ佛陀の聖句だの、その他いろいろな祈禱句などが刻まれてゐる。その一々の岩の角板の數は何千何萬といふ多きにのぼるが、みな信徒の寄進によるものだ。

(\*オム マニ パドメ フムの意味は、お前、蓮のいみじき花よ、といふ位のところらしい。此の句の出所や因縁を並べると長くなるが、シヤカムニ ガウタマの本名を持つ佛陀が残した宗教歌の一句で、西藏の僧侶たちは朝の勤行にあつて必ず此の句を吟唱するのである。)

最初の道標が見えてきた。マウルバ・チャムバ村である。此處には、八米も高い佛陀の像が、岩の塔に彫つてある。勝ち誇つた明るい微笑を唇いつばいに綻ばせて慈悲神佛陀が立つてゐる。豫言どほり佛教教會の革新のために五千年後に再來した彼の姿である。兩手に薔薇の花と清新な花束



とを持つてゐる。佛陀を刻んだ岩の圓錐塔は、高さ約三十米もあらうか。てつぺんに、大きな、ま  
つ白な人形がはためいてゐる。間斷なしに下界へ合圖し、國內へ呼びかけてゐるその姿はちよつと  
亡靈のやうな感があつた。が、よく見ると實はこれが人形ではなくて、支那式の高貴な人にさしか  
ける日傘の形だつた。隊商も旅行者も、遠く濠洲までに及ぶ赤色ラマの廣大な領域の門口を見張つ  
てゐる此の大きな、微笑を湛へた佛陀の足下を嫌でも通らずにはゐられないのである。ラマの神さ  
へもやはり、いつか佛陀の天國を去つて西藏の首府ラッサへ巡禮する場合には、同じく此の大いな  
る岩の圓錐塔の下を通行せねばならないであらう。此の塔と前に云つたマニ壁と、その二つが彼に  
ラダックへ、西藏への道を教へるのである。その時、嵐の咆え猛禽の叫ぶあのフォチュラの峠あた  
りから、彼の神の眼ははやくも遙かにラマニル修道院を眺め、ラマ教の次第に西方化しつゝある儀  
禮様式を悟ることであらう。

かやうなマニ壁と圓錐塔が幾百となく道標の役目をつとめて導びき入れる最後の目標、それがラ  
マニルの修道院である。高い岩の上にするで兇惡な強盜團の巢窟のやうに頑張つてゐる建物だ。低  
い入口の、門の壁龕の中に三個の酒樽位の太鼓があり、信徒はみな、此の門を出入するたびにこれ  
敬虔に打鳴らし、祈念することを怠らない。院内の庭は、支那風の五彩美しい畫廊の觀がある。こ  
んな僻遠の國にまで黃龍の息吹がかゝつてゐるのか、と思はず嗟嘆せざるを得ない。白布、旗、黒  
牛の尻尾等が無數に、そちこちの會堂や宿舍の屋根にははためいてゐる。ちよつと、洗濯物でも乾し

てあるやうな錯覺が起る。

暗赤色の法衣に同じ色の圓筒帽を頂いたラマ僧たちが、親しみのある好奇心の眼で私の方を觀察  
してゐる。赤い法衣の尼たちの方はまた、宿舍の屋上まで出て見物してゐる。彼等の宿舍を訪問す  
ることは滅多に許されならしい。僧侶の法衣や草履はみなどこか破れ、そちこちに繕はぎがして  
ある。清潔といふことに關しても、所謂人間的虚榮を完全に克服してゐるのであらう。尼たちは、  
たつた一人美しい若い尼以外は、みんな老婆でおまけに異常に醜かつた。

ラマニルの殿堂は、古く、低く且つ薄暗くて、最初の一瞥では何か壓迫的な息苦しさを受ける。  
そちこちに小さな石油ランプが點り、その灯影に黄金色の顔が光つてゐる。白い二つの眼が、暗が  
りの中から物凄く凝視してゐる。堂内の空氣は濕々とかび臭く、のしかゝつて来る重い靜寂と相俟  
つて地下の窟か墓穴にゐるやうな感じだ。さもなければ、最初は物置にでもはひつたやうな氣がす  
るに違ひない。暗澹たる蠟細工の陳列場のやうに、跣まつた像がいつばい並んでゐる。どれもこれ  
も引裂けた錦襪子の衣囊に羊毛のぼるを纏ひ、弱々しい光りを發する金色の幅廣な顔の頭にラマ  
僧の高帽をかぶつてゐる。これ等はみな、佛陀の高弟であり西藏の傳道者であり、また逝去した修  
道院長たちである。顔と手とは總て紙の張子細工だ。醜怪な舞踏用假面も並んでゐる。動物の頭、  
惡靈の假面、頭蓋骨、等々が、怒氣を含んで脅迫するやうな面相で天井からぶら下つてゐる。だが  
次第にこのうす暗い空氣に視覺がなれて來ると、壁に在る支那畫の影響をうけた特徴のある繪畫や



繪卷物の中の顔の寫生、祝福された美しく優しい手のスケッチなどを仔細に眺めることが出来た。

別の堂の中には、ラマ教の英靈中の一人人チュンライチグの巨大な像が安置されてゐる。これは佛陀の高弟中でも最も尊敬された一人に數へられる傑僧だつた。佛陀の像は、漆と黄金とで華麗な光彩を放つてゐる。華やかな衣裳をつけ、女人とも見紛ふ魅惑的な微笑を湛へた佛陀の姿は、やゝもすれば、白粉をつけ眉を描いた舞姫と間違ひやすい。像の足もとには花があり、無数のキラキラ光る青銅ブロンズの鉢や皿と、石油ラムプの灯がある。

(※チュンライチグは、日本では千手觀音といふてゐる。)

チュンライチグには頭が千あるとか二千あるとか云ふが、私は別に數へもしなかつた。たゞ、それ等の小さな頭が、本來の頭の上にピラミッド型に突立つてゐるのを見たゞけである。また手も千本あると云ふが、いかにも、此の像では無数の手がまるで車輪の如く混亂してゐた。一番外側に出てゐる手からして、すでに微妙な蜘蛛の絲かのやうに見える。石油ラムプの灯影に、凝然と、やゝ氣味の悪い微笑を浮べて、黄金の法輪を女人のやうな纖手に支へてゐる。然も、彼の千本の手の悉くが、その金の法輪を支へてゐるので、結局、だんだん小さくなつた果ては小さな金色の點となつてゐるのがある。だが、手のやさしさに引替へ、その足は強く大きく、不信心者と悪業者との蠢動を踏みしだいてゐる。

さて、チュンライチグの堂を見物し終つて外に出ると、此の僧院の院長が心からの親しみを見せ

て私の方へ近づいてきた。榮養満點らしい院長には、福々しい五體の隅々から生の歡びが息づいてゐる。院長もよく笑ふが、その笑顔のどこにも、固い、やゝ残忍性を忍ばせた堂内の神々の如き笑ひはなかつた。それはむしろ單純な好人物の微笑だつた。さう云へば、此のフアルスタフ型の顔の頭に載つてゐるラマ帽は、ちつとばかり妙まがに曲つてゐるやうだ。

(※フアルスタフは沙翁の戯曲によく出て来る人物の名。肥え太つた軍人で、根は小心者の癖に太ッ腹を装ひ、へうきんな言動をして笑はせる臆面のない性格である。)

私がカメラを向けると、すつかり上機嫌になつて、無邪氣に肩を張つて踏ぞり返へるのだつた。ともあれ、どの方面から觀察しても、此のラマムルのラマ僧や尼たちはあまり不幸ではないらしい。村へ散歩にも行ければ、一時間も宿舍の高い屋根に昇つて、風に翻へる黒牛の尻尾や旗の下で日光浴を楽しむことも出来るのだから。

之に反して、峡谷の下では農民夫婦がかういふ僧や尼や、第一に脂肪ぶとりの修道院の院長さんのために、汗水たらして労働してゐる。農民が修道院の所有地の田畑を耕作することは、云はゞ古くからの傳統だつた。さういふ賤しい仕事をするには、ラマ僧や比丘尼ジヨメの品位にもとるものとして、昔から農民の手に委されてゐるのである。そればかりではない、バターや麥粉や、その他なんによらず丘の上の人達の要求を満たすのが、やはり此の下の農民たちの責務つとめだつた。

一般に、ラダックでは労働は非常な廣範圍にわたつて婦人の負擔になつてゐる。婦人たちはみな



野に鎌を振り、家畜の飼糧をつめた大きな籠を背負つて歸る。女としての魅力は殆んど無く、たいていは吃驚するほど邪険で、特に老年になるほど此の傾向が著しい。體格はすんぐりと猪首で顔がまるく、宵黒くて皺くちやなところはちやうど黑人の老婆にそっくりである。村民は一般に、侵略を蒙つた當時山中へ遁亡した原始人種族の遺傳を明瞭に残してゐるが、その半面にはまた、侵略者の血の混じてゐる痕も十分に窺はれる。

婦人たちの衣裳はすこぶる獨得なものである。外出には暗色のぼろの上から、羊皮を肩にかけてゐる。足は羊毛の、時々美しい刺繡のある脚絆ですつぽりと包み、すり減つたフェルトの木靴をつっかける。一番奇妙なのが髪飾りだ。まつ黒に縮れた髪を編んだ暗色の毛糸でつぎ足し、兩側のこめかみの邊から、まつ黒な羊皮製の象の耳のやうなものを突き出してゐる。さうして此の羊皮の耳を左右に、約一指尺ほどの幅の、暗赤色の皮で作つた帶狀のものが、眉間から頭を越して後襟まで届いてゐる。まるで兜のやうである。おまけに眉間から頭、頭から後襟と渡してゐるこの獸皮の帯には、明るい紺碧の俗にトルコ玉といふ寶石が大小となくはめこんであるのだ。試みにその數を讀んでみたら、或る婦人では六十個、或る婦人ではなんと三百個も數へられたのである。トルコ玉にまぜて、時には銀臺の大きな水晶や琥珀を光らせてゐる婦人も見受けた。野良仕事をするときでも、ラダックの婦人は自分の全財寶を頭に乘せてゐるといふわけだつた。

一日私は、汗を流して働いてゐるラダック女の中に、赤いものづくめの僧院の尼が一人まじつて

ゐるのを發見した。筋骨の逞しい若い娘である。尼でも労働をやるのか？ と、思はず眼を瞠つたが、その通り尼でも労働をさせられるのがあるのだ。つまり、彼女は一瞬の心の迷ひからにせよ修道院の規定する道德の範を踏み外した比丘尼なのである。その罰則が労働だつた、その後野や畑を通るたびに注意して見ると、さういふ罰を蒙つてゐる尼が尠くない。農村の女たちは、容赦なくかやうな墮落した若い尼たちに苦役を強いるのである。

修道院の小さな煤けた園亭に休んでゐたら、若いヒンヅウ教徒が私を訪ねてきた。ほつそりした優しさうな青年である。何んの刺戟もない山村の生活に飽々して、私のところへお喋りに來たといふわけだ。スリナガルの生れで、教員として此の村へ轉任して來たのだといふ。

若いインド教員はひどく不仕合せだと見え、二言目にはため息をつきながら、苦悶を訴へる。私と此の青年教員とが對座してゐる今も、頭上には幻想的な僧院が聳えてをり、眼を楽しませるものには、息をひそませるほどに壓倒的な雄大な高山地帯特有の風景がある。太陽は眩ゆいほどに輝き、一步街道に立てば興味ふかい道標の圓錐塔や、マニ壁や墓地が數へきれぬ程ある。だが、此のインド青年に云はせれば、雄大な風景も、珍奇な建物も遺跡も、此の僻村のあじきない生活を慰めるには足りないのだつた。

『雄大な風光と云つたつて——石です。見てゐれば反つて悒鬱になるばかりです。修道院だつて不潔なことばかりです、道標の塔だのマニ壁だのだつて、昔のがらくたです。此處では太陽だつて



凍つてます。いゝえ、たしかに此處は、あの賑やかなスリナガルの都會に育つた青年に取つて何ひとつ感じのない貧村なんです。

まだ一度だつて僕は、此處へ來てから故郷だの我が家だのといふ慕しい感情を抱いた覚えがないんです。此處の人たちを御覽なさい。第一、入浴一つしないです。水は毒だと決めてるのです。文化や教養なぞ薬にしたくもありません、まるで動物のやうにその日その日を送つてゐます。いゝ例が此の園亭<sup>ベンガト</sup>の主人のチョコキダルでさ。小さな家を一軒、牝牛が二頭に娘五人の暮しですが、娘二人は此の僧院へ尼に入れてしまひ、その後へカルギル村から養子を迎へて、残り三人の娘の婿にします。先生はどう思ひますか、此の話を？」

『だつて君、此處ら邊は一妻多夫ぢやなかつたかね？』と、私はびつくりして反問した。

『勿論です、然しその反對の場合もあるんです、先生。此處へ來る、ほら此の園亭へ薪を擔いで來る、まつ黒な、魔女のやうな小柄の女を御存じでせう？ あの女は七人兄弟と結婚してますよ。』

『七、人、兄、弟、だつて??？』

『さうです、七人です。先生此の事實を何うお考へです？ 七人の兄弟は貧しくて、七人の力を合せて辛くも一人の嫁を迎へることが出來たのです。だが萬一、此の兄弟がさう貧しくなかつたとしても、結局はやつぱり七人で一人の女を共有する結果になつてゐたこととせう。つまり、此の國の習慣なんです。』

私は首を傾げた、ひどくこみ入つた事情でちよつと合點が行かない。で、遠廻しに探りを入れてみた。

『ではその七人兄弟の家では、始終喧嘩が絶えないだらうね。一人の女を七人で妻にしてたんではね。』

『喧嘩？ いゝえそんな、長男は一家の主長ですから、その女は誰よりも先づ長男の妻に決つてます。』

『といふと君、つまり残りの六人の弟たちには妻がないつてことになるぢやないか。』

『とんでもない、先生いゝですか、長男が旅に出たとします、さうするとその間、女は二男の妻になります。更に二男も旅に出た場合は……』

『おつと、待ちたまへ、では一番下の、七番目の弟はどうなるね。その男になつた氣で考へて見給へ。それに、そんなことをしてゐる中に赤ん坊が出來たらどうする？ 誰が父親になるね。』

『長男ですよ。そして萬一長男が死ねば、二男が長男の位置に昇進します。』

『さうすると今度は、チョコキダル君の娘三人の場合は、女房三人の亭主一人といふ間柄は、やつぱり長女が先取特權をもつのかね。』

『そんなことはないです。亭主は一家の主人ですから、なんでも自分の好むやうにしています。が、妻は亭主のために働かねばなりません。つまり、亭主は朝から晩まで家の中に坐りこんで、煙管を



くはへたり茶をのんだりしてゐればよいのです。ねえ先生、そんな傳統と習慣のある土地に我々青年の生活を営む餘地がありませんか。』

私は、不倅な青年を慰さめようと試みた。

『だが待ちたまへ、君にはとにかく天職があるぢやないか。』

インド青年は弱々しいため息をついた。

『とにかく、何んと云つたつて君には學校があるんだからね。』

『はい、學校はあります。然し私には生徒がないんです。もう當地へ来て半年になりますが、赴任匆々は三人生徒がありました。然しいつの間にか出席しなくなつたです。ラマ僧たちが僕に反感を持つてます。』

『此處の任期は何年ですね。』

『三ヶ年です。』——青年教員はさう云ひながら、寒さうに肩掛の前を合せた。——『しかも、相變らず一人ぼつちです。或る詩人の言葉に常に孤獨なるものはやがて病はん、といふのがあります。』

私は、此の絶望青年に米を少々願けてやつてよいことにした。別れぎはに彼は、郵便局の前で手紙を出して貰ひたいと、封筒をさし出した。一番近い郵便局でも、此の修道院村からは一日の行程は確實なのである。

出發——馬の蹄が岩にふれて憂々と鳴る。いつたん寒い溪谷の方へ降り、やがて、灼熱の山腹の斜面を登る。朝、鞍に跨がつて、夕方はまるで死んだやうに鞍を降りるといふ難行である。

インダス溪谷では二日ばかりの間、ラマの身分のある老人と同伴した。品のいゝ立派な高僧である。惜しいことに長い黄色い齒が二本ばかり缺けてゐた。給養のいゝ、よく馴れた馬に跨がり、お供には例の赤い僧衣を纏うた弟子と、十二歳位の農民の少年が跟いてゐる。高僧の褥が鞍の上でキユツキユツと鳴る、背中に尨大な書物を二冊背負つてゐる。いや書物ではなくて書類か何かを厚板で挟み、その上から風呂敷で包んだものである。もう一つ腰帯に小さな銀の厨子をさげてゐた。  
\*ラツサから持つて來た小型の佛陀像が納めてあるのだ。

(\*ラツサは西藏の首府。ヒマラヤの北の山腹にあり、海拔三六〇〇米といふ物凄い峡谷を控へてゐるので有名だ。人口およそ二萬、ダライラマの統治下に在り、佛教徒の巡禮地の主要なる一つ。大きな寺院や、托鉢僧の集る修道院がたくさんある。)

外見はこれだけだが、實際は、僧衣の下からいろ／＼な物が百貨店のやうに出て來るのである。林檎、米、茶、砂糖、それと小さな鐘。祈禱の時間になると、少し身を退つて坐り直し、小さな携帯用の佛壇を地上に据ゑ、神祕的な書物をあちこち披いてムニヤムニヤと唱へる。その合間に例の小鐘がチインと鳴るのである。

此の高僧は學者であり醫師である。いやもつといろいろ知つてゐる。占星學も知つてゐれば、豫



言者でもあり観相家でもあつた。

私の運命を見て下されば謝禮を出しませうといふと、此のラマ僧は大急ぎで支度にかゝつた。ひどく貧乏してゐるらしい。

私の手を一瞥するとすぐ、あなたはお偉い御仁ぢや、よほど遠國のお方ぢやの、と云ひ始めた。それからこれも僧衣の下から繪巻物を取り出して地上へくり展げ、仔細らしく考へ始める。繪巻物の上の方には動物の立ち姿が一行にならんでゐる。どれも青い僧衣をつけてゐる。牡牛、熊、鳥類、狼、羊。その下方にいろ／＼な彩色をした四角形があり、右の端には謎のやうな題辭がある。此の四角形と右端の題辭とを、ラマ僧の長い爪が行つたり來たりしてゐる。やゝ暫らくさうやつてゐたが、やがて、昂奮を抑へきれぬ容子で聲を弾ませた。が、急に落膽した風で頭をふる。西藏語やラダック語の話せる人に來て貰はないと困る。インドスタン語では思ふやうに話せないと云ふのである。非常に重大な事なのぢやが、どうも遺憾千萬ぢや……。

好奇心にかられて、私の従者や馬曳きの者まで助勢を申出でた。だが老僧は、出て來た人間の手足を一瞥するなり、頭からいきなり、お前は嘘言者ぢや、貴様は詐欺師ぢや、後の二人は盜人に無賴漢ぢや、ときめつけたのである。

坊主めなかなかやり手だぞ、と私は肚の中で苦笑した。

それから三日目、親しみのある此の老ラマ僧が急にどこかへ逐電した。白狀するが私はそれを知

つてひどく淋しい氣がした。いつまでもいつまでも、彼の小さな鐘の音が耳に残つてゐた。――

さて、日射しの炎熱はいよいよ猛烈になる。山肌はやけたゞれ、岩は燃えるやうだ。鞍からちよいと降りたとたんに、靴底が焦げさうである。道も山も、酷熱の中にふるへてゐる。煙草の火までが、三千四百米の高地の稀薄な空氣の中では、探照燈を真正面に浴びたやうに眩しい。足下では遙かに遙かにインダス河の粘土色の水が渦巻いてゐる。この河はチベットの山に源を發してゐるのだが、すでに此の邊から聖河の名を擅まゝにしてゐるのである。

道は、山の頂上に在るスピック僧院の古い建物のあたりから、河を離れてまつすぐ石塊ばかりの荒野に通じてゐる。遠い山に、城が一つ、ぽつんと燕の巢の如くへばりついてゐるのが見えた。あれが、以前のラダック王の御殿、つまり現在のレエの町である。

### お伽の都レエ

古都レエの城が、近づくにつれて少しづつ岩壁の中からせり出して來る。更に一時間ほど馬を進めると、もうはつきりと六階建ての城が識別され、此の尖塔型の斷頭建築が、上へ行くにつれて若返つてゐる容子まで見えてきた。涼しげな開廊や露臺も見える。いや、扁平な屋上に人間が一人立つてゐるのも見えた、いんや、人間ではない。棒を左右につき出した殿様の使ふお日傘だつた。例



の吹流しや黒牛の尻尾が翻へつてゐる。此の古城は現在、僧侶を養成するための修道院として利用されてゐるに過ぎないのだ。ラダック即ち小西藏は、今日ではカシュミヤのマハラダ大公國に從屬してゐるのだが、事實は、その從屬も政治的の意味だけで、宗教的には相變らず、ラッサのドライラマに直屬臣從してゐる。ラダック國時代の王は、いまヘミの僧院にラマとして永らへてゐる。その王子には二、三の村が譲り渡され、その上、カシュミヤのマハラダ大公から月々百ルビイの終身年金を貰つてゐるのである。

石の道が突然曲つたと思ふと、都門の中に忽然として此の都の市場街の廣い通りが浮び上つた。白楊の高い並木、人や動物の色とりどりの雑沓、包装した貨物の大きな山。十六日間ぶつ通しの、人跡絶えたヒマラヤの秘境を騎乗して來た者に取つて、この市場街を見ることは何か不思議な幻想のやうでもあつた。

インドとチベットとさうして東トルキスタン、此の三つの世界が、此の都で交流してゐるのである。隊商たちが、カシュガルからヤルケントから、ラッサからカシュミヤから、遙々と輸送してきた貨物、商品が、今此の市場街と百貨店に溢れてゐる。山のやうに盛上つた茶が、計量されて袋につめられる。肉カレイの山、米と岩鹽の山、羊毛の大きな束や羊と山羊の毛皮、フェルトの毛布、毛糸、毛氈、白豹の毛皮の大束と、黃鼬、鼯鼠その他の野獸の毛皮の束。歐羅巴や印度わたりの舶來品もある、石油に燐寸、蠟燭に風よけラムプ、それから獨逸製の染料繪具、これは東トルキスタ

ンに行くものである。市場街を覗けば、西藏産の土器や東トルキスタンの土瓶がある。ラダックの銀裝飾品も並んでゐる。前に云つたトルコ玉と云つて珍重される明るい藍色の寶石を、大きな袋にいつぱい入れて賣つてゐる商人もあつた。その中には拳大の珍らしい寶石もまじつてゐる。

包装や木箱を見ると、發送地や發送人の名が、ウルヅウの原始語からヒンヅウ語、トルキスタン風から支那風のまでいろいろある。これと同様に市場街へ押しだす群衆もまた、一打位の異つた國語を話し、郷土郷土の訛音をむきだしに喋べつてゐる。だから、時としては商人と顧客との間に通譯がないと用の辨じない場合もあつた。此處は、ラダック語、ヤルケント語、西藏語、バルト語、プアブ語、クルル語、カシュミヤ語、パタン語等々の言語展覽會である。

派手な色の高い頭巾、インド人の暗赤色の房つき氈帽、それに回教々徒民族特有の帽子などが、押したり押しされたりしながら商品の束の山の間に蠢めいてゐる、先端の尖つたフェルト帽がバルト族、毛皮帽がヤルケント族、フェルトの僧帽がラダック族。こちらにはまた前云つたラダック族の婦人連が、何れも黒い羊皮の耳を左右に突出し、トルコ玉をちりばめた革帯を額から後襟へかけ渡した扮装で、羊皮を肩に羽織つて大勢坐りこんでゐる。彼女たちの買物は隊商のための馬の飼糧になる乾草が第一、それから球葱に麥粉に果實にうすいビールのやうな飲料。買物をしながらも、ペラペラと喋る傍ら、手先では一心に糸紡ぎをやつてゐるのである。どの女を見ても、廣い銀の腕環をはめ、肩にも銀の鎖を覗かせてゐる。これに、彼女たちのお化粧道具が全部ぶら下つてゐる



のだ。齒ぶらし、耳搔き、ピンセット(これは毛抜きの代用であるらしい)まだ何がぶら下つてゐるか神ぞ知るである。彼女たちは不潔で不精だが、これといふ對稱を見せてゐるのが、ひどくお洒落な金持階級の婦人達だ。尤も此の方の組はめつたに外出なぞしない風習だが、垣間見たところによれば、甚だ魅惑的なラダック式のスリッパを召され、絹の歐羅巴風の靴下を穿いてゐる。身體を動かすたびに餘韻々たる音響をひびかせるのは、銀の腕環に銀の耳輪、そこから中にかけてゐる銀鎖りなどのせゐである。就中、かういふ上流婦人の頭を飾るトルコ玉には逸品が多い。時には高價な象眼を施した贅澤きはまるものもあつた。かういふ階級にかぎつて、農婦の用ふる如き山羊の毛皮を肩掛けにしない。彼女たちの愛用するのはきはめて高價な支那郵船來の襟卷だつた。

切長の眼のトルコ紳士は、いつ見ても親しみと現世の喜悅に暗々としてゐる。その顔は十人の中人八人までが、黒きこと黒人の如く、光澤のあること豚脂をぬりたくつた如くである。これに較べて稍や鈍重だが、骨つぼくて實質的なのがヤルケントやカシユガアル生れの隊商たちだ。例のフェルトの長靴にフェルトのマント、それから毛皮で裏打したフェルトの圓帽と、頭から足先までフェルトづくめで佇立つてゐる彼等を見ると、まるで木彫の像か何かのやうである。その肌の色が素晴らしい。農民のやうな赤い頬ぺたで、唇を洩れる齒の光澤がまた、高山のあの灼きつく日射しに磨かれて雪の如く白い。麥稈色の頭髮とトルコ玉のごとき明るい翠碧の眼を見てゐると、ふとロシアの農民を思ひ出させる者もある。だがそれは例外で、大部分は蒙古族の血の遺傳が、明瞭に支那人系

の眼と支那人風のチョビ髭との中に確認されるのである。

ヤルケント生れの人が挨拶するところを見ると、先づ兩手を腹部にあてゝから恭々しく上半身を屈する。また知人を見ると、慇懃に席を起ち上る。インド人や回教徒だと、隻手を額にあてゝ例の『セラム!』といふところだ。

(\*セラム又はサレムとも發音する。本來はアラビヤ語で平和の意味。)

西藏人は反對に反りかへつて拇指をぬつとつき立て舌をペロリと出してから例の『ヂェウレ!』とやる。

(\*ヂェウレに就いては前に説明したが、もう一度書いて置く。神の僕よの意味である。)

こんな風に世界中の人が歓迎してくれる實景を一々克明に報告してゐては、一日まるつぶれになるだらう。とにかく、我々は至るところで、市場街でも隊商驛でも、心からの歓迎を受けたのである。私はその意外なのに驚いてゐるが、願はくは、常に此の驚きを味はひたいものである。

市民の間にまじつて赤い僧衣のラマ僧たちが、例の圓筒型のふちなし帽を少し斜めに頭へのせて散歩してゐる。折々、暗黄色のふちなし帽も見える。これは黄色僧團の僧院の人々で所謂『道德堅固』を標榜する一派だ。此の一派の創始者はラマ教の革新者ツォングカバである。

市民の雑沓を押分けて、信心深い農民たちが轉輪經をくりながら、例の聖句オム マニ パドメ フムを唱へて行く。大きな山峰でもうなつてゐるやうに聞える。



隊商が通る。侏馬<sup>ちびうま</sup>、驢馬、騾馬、石炭のやうに光る黒牛<sup>ヤク</sup>等が、背に重い荷をつけてゐる。これはラッサから来たのである。三ヶ月の難行を終つて目的地へ到着したのだ。あれはヤルケントから来たのに違ひない。行程は約一ヶ月だが、その間には五千米を超えるカラコルム峠の隘路があり、雪田と氷河の上をも越えねばならないのだ。しかも、人も馬も牛も、まるで遊山旅行にでも行つてきたやうな顔をしてゐる。此等の隊商たちは、此のレエの隊商宿で一ヶ月乃至二ヶ月を過すと、再び新らしい積荷をつけて同じ難路を引返すのだ。

レエから更にカシユミヤまで行く隊商は、西藏にはない。ごく稀に東トルキスタンの隊商が行く位のものである。

おや、彼處に農夫がゐる。蓬のやうな亂髮で、肌着に山羊の毛皮を引掛けてゐるだけだが、手に握りしめてゐるのは本物の投槍ではないか。何處かにまた匪賊の巢が出来てるのかも知れない。

都門の上には書記が一人ゐて、何が入り何が出たかを克明に書きつけてゐる。その下をいま珍らしい小隊商がぐゞつて来た。十頭の羊に荷を負はせ、一頭の驢馬に軽さうな雜囊と可愛らしい子供を乗せた牧人である。我々は『神の僕！』と呼んで彼を呼止めた。やつぱり豫想したとほりブラマプウトラのツァングポ溪谷から来たのだ。七十日もかゝつて子供づれで、『商賣のために』遙々レエまで出て来たのだといふ。

レエの市内にも附近の部落にも、例のマニ壁や佛陀像を刻んだ尖塔やリヂンゴムバといふ建物、ラマ僧の修道院、なぞがたくさんある。リヂンゴムバといふのは小型のお宮造りで、ちよつと芝居の舞臺を思はせるやうな壁龕<sup>へきがん</sup>があり、そこにあの佛陀像の尖塔の見本のやうなのが三基、白、赤、青と塗りわけて、まるで陶瓦の暖爐でも並べたやうに安置してある。三本の尖塔は、ラマ教の説く三大世界に捧げたもので、白が神々、赤が人間、青が下界、つまり天・地・人の三界を、白・青・赤の三色で表徴したのである。街頭を威壓して立つ尖塔やマニ壁は、云はゞ記念碑とか記念塔に比すべきもので、篤信家を始め諸代の王や僧院の人々の建立にかゝる。建立の目的は云ふまでもなく國民をして毎日の往來にも神々を忘れさせまいといふのである。レエには數百米を越えるまるで城壁のやうなマニ壁が多いが、一番長いので八百五十米にも及ぶのがある。佛陀の立像を刻んだ尖塔も、今まで見て来たのに較べて餘程大規模だ。ラダックにも西藏中にも二つとないと云はれる素晴らしく大規模なのが、此の都の郊外にあるが惜しいことに半分ばかり崩落してゐた。かういふ尖塔の大部分は、着色の浮彫で飾られてゐる。例へば、醜怪な形の龍犬<sup>りゆうけん</sup>のやうな牡獅子<sup>うしじし</sup>の鬣<sup>たてがみ</sup>を青、草色に或ひは朱色に塗るとか上半身が人間で下半身が孔雀になつてゐる紺色の翼とか云つた類だが、此の紺の翼を大きく擴げた神話の中の鳥のやうなものを、ミシャングシャングと呼んでゐる。尖塔の尖端をまつ、赤に塗つたものもあつたが、元來この尖塔を建立した根本思想を思ひ合せれば、尖端を赤く塗るのは合理的である。つまり塔の土臺を成す下方の正方形の部分は大地を、中央の球形の



部分は水を、一番上の尖つた部分は火を表徴してゐるのだ。

ところで、ラマ僧といふものはひどく單純な無學なものと見え、或るラマ僧がこれを説明して、これ等のマニ壁、尖塔、小祠チヨルテリチンヨムバなどを建立したのは、やがて佛陀再來の日にラッサへの道を間違ひたまはぬための道標であるなどと云つてゐる。

一般にもかういふ風習がまだ残つてゐるのか、例へば修道院の院長と云つたやうな高貴の身分の人を迎へるときに、分りきつてゐる道でもその道に石を積み重ねて目標めじろにしたりするやうだ。

道標の尖塔や、その見本を祀つた小祠まつなどの傍には、時々、經文を書き記した細長い旗や、紐で結んだ鈴、金屬の小鉢などをぶら下げた棒が何本も立つてゐることがある。風でも吹いてゐると、これが何んとも云へない微妙な音をひびかせるのだ。聖經を誦しながら信心深い人が尖塔の周圍を廻つてゐる。無論手には例の卷物の經本をくりひろげてゐるが、そのくり方はいつも左から右へだつた。

また聖蹟や聖地にはよく、佛陀の浮彫りなどを施した岩を見かけることが多い。大抵は、巨大な半分枯れかけた、雨風に枝など摧けてゐる古木の樹蔭を選んでゐる。これは一般から聖樹とか神木とか崇められるもので、何人も斧を加へることは許されない云はゞ下界の諸靈に獻げられた神の木だつた。

狭い大通りの中程に、がらんとしたお堂がある。かつては美しかつたらうと思はれる壁畫が光澤を失ひ塵にまみれてゐる。此のお堂の中にチャムバ——愛の神の見上げるやうな立像が安置されてゐるのだ。金色の足はびつくりする程大きく、蹠くるまは、瑪瑙めのうだか珊瑚さんごだかをさし貫いた紐で飾つてゐる。下から見上げたのでは、僅かに金色の手のあたりまでしか分らない。そんなに高い大きな像である。巨大な金色の頭が、ちやうど三階目位のところまでのびてゐるらしい容子は、その足下に身をよせてふり仰ぐとわづかに眺められる。どこかに光線窓ちかりがあるらしく、チャムバの金色の顔が何か此世ならぬ光明ひかりを受けてゐるものゝやうに、神祕な光を湛へてゐる。頭には冠をいたゞき、それを掩うて天蓋が搖曳してゐる。いかにも狭い歩廊が一本、此の巨像の周圍をめぐつて通じてゐる。敬虔な巡禮者たちは此の歩廊を、約三十キロ瓦ほどの石を脊負つて祈禱句を誦しながら歩き廻る。二十回でも三十回でも、廻る度数が多いほどよいとされてゐる。

この金光燦爛たる巨像の前に、赤い絹布でくるまれた同じやうに金色に光る顔の、小さい、儂ない従者として坐つてゐるのが、ロベン・パドメ・ユネ菩薩である。彼はなんとかして佛陀の品位を模倣しようとおせつたが、つひに不可能だつた。民衆は彼を異端邪宗として火中に投じ焼殺さうとした。だが、ユネ菩薩は笑つて此の煉獄に耐へた。そこで今度は民衆は彼を水中に投げこんだ。だが火に焼いた者を水に入れたとて何んの甲斐があつたらうか。

こんな傳説があるとは、彼は今日も尙ほ、黒い愛嬌のあるチヨビ髭を生やして大チャムバの足



下に、此の世の人の愚かさを微苦笑してゐるのだ。

階段をきしませ、うす暗い通路を登つて行くと、古い莊嚴なセング・ナムギャルの王城に出る。腐つた臭氣のする部屋が続いてゐる。崩落した天井と車寄せ。かつては美しい壁畫で飾られてゐた部屋も、今では驢馬の厩舎に利用されてゐる。暗く、かび臭く、そして光彩と漆と閃々たる黄金色に満ち満ちたお宮がある。その中には、凡ゆる智慧と安息と慈悲とを具備した佛陀が、紺色の捲髪と細長い耳をつけて燦然と輝いてゐる。二千の頭と、二千の手足を持つた女神がある。悪事を働いた者を踏みつける本當の足の下からまるで蟻の群がるやうに二千の足がゴチャゴチャと出てゐる。封蠟色に赤く光つてゐる地獄の神ヤマ（日本でいふ娑摩大王）の怒りの顔もあれば、おのれの膝の上で恍惚として青塗りの妻を抱きしめてゐる歡喜神もある。金泥を塗つた張子細工の神が絹布の衣裳に納まつてゐるかと思ふと、白い大理石で彫つた神、木や青銅の神々が、或ひは原始的に或ひは大きな藝術的の美しさを見せて、おらりと並んでゐる。書棚の上には布に捲かれた書物がいつぱい、塵に埋れてゐる。ほかにまだまだ支那風の彫つて着色した柱や額縁、ピカピカする眞鍮の小鉢、皿、塵埃にまみれた太鼓、彩色畫のある長旗、喫煙具、等々が古道具屋の店頭のやうに並べてあつた。夜半になると、此の古城の中の大喇叭や角笛が鳴りだして町中にひびくさうである。

とにかく、レエ及びその近郊に立つてゐる神々やお堂の中に鎮座する大小の佛の數は、およそ千體を降らないに違ひない。たしかに聖都の名のある所以であらう。

レエの近くにサンカアル修道院がある。これは前に云つた黄色派、即ち道德堅固を標榜して赤色の僧衣の代りに黄色の僧衣を着用するラマの一分派だが、此の僧院に非常な傑作と見られる動物繪卷があるのを發見して驚嘆した。これはラマの教會堂や寺院などの前房には例の悪靈よけの猙猛な守護神と共に必ずあるものである。

別に驚盤といふ名のついてゐる此の動物繪卷は、佛陀の説いた六界を諷刺した一種の漫畫と見てよいであらう。六界の第一は神々の世界、第二はこれに叛旗を翻へした巨人族の世界、第三は掟によつて生活する人間の世界、第四は動物の世界、第五が地獄、第六がギリシヤ神話のタンタルスと同巧異曲の餓鬼道の世界、以上六つ。——地獄界では憐れむべき亡靈たちが虐待酷使されてゐる光景は他の宗教で説くところと殆んど變らず、所謂劍の山に追ひ落されてズタズタに斬りさいなまれるところなぞがある。虚偽を云つた者は舌を抜かれ、その舌の上で二頭の牡牛が耕作してゐる圖もある。變つてゐるのは氷地獄の繪だ。其處では亡靈たちは寒氣で五體がはちきれぬまで凍えながらいつ終るとも知れぬ寒さの中に悩みぬいてゐる。一番奇妙なのが餓鬼道の世界で、これには見窄らしい蚊のやうな脛と蛙の如き腹をした亡者たちが、永遠の飢と渴きに苦しんでゐる光景を描いて、貪婪なものゝ永遠なる不幸の真相を暴露してゐる。そして其處にはなほ、さういふ人間の靈を挽き碎き、搗き碎くための木と石で出來た臼の圖が、さも恐ろしげに描かれてゐる。



然も、かういふ地獄繪の中にも、常に佛陀の教訓と啓蒙の思想が表現されてゐる。佛陀はかやうな地獄のあらゆる世界を歴遊し、禽獸地獄の世界までも知つてゐた。禽獸地獄とは、追はれ、驅使され、皮を剥がれ肉を刻まれた禽獸の悲劇を説いたもので、これも佛陀のいふ地獄Ⅱ下界の一部だつた。これは我々歐羅巴人の眼には眞に驚ろくべき思想と云はねばなるまい。

一般に西藏の佛教徒Ⅱラマには、現實の世界と幻想の世界とのはつきりした區別がないらしい。彼等の思想の中では、此の二つの世界が交流し合つてゐる。彼等に取つて水神たちは實在なのだ、日毎の日常茶飯事の中にも、見えざる悪靈に悩まされてゐる禽獸世界を看取する。そしてそれ等の苦惱は、やがて前世の生存中に犯した過失に對する刑罰以外の何物でもない、と考へてゐる。そしてその刑罰は、どんな山奥の僻村でも目撃されるので、例へば、石や木立の崩落した下敷になつて斃れる人や獸には、みなさうなるべき前世の必然の因縁があるのだと信じてゐる。

サンカル僧院の動物繪卷は、私が今日までに見た中では一番完全なものだつた。光明の世界がなんと美しく、そして地獄の世界がなんと恐ろしく、描かれてゐることであらう。よほど優れた藝術家の手によつて、始めて成し遂げ得る素晴らしい傑作だと思ふ。

私が、心からの此の讚嘆を抑へきれなかつたとき、案内役に立つたサンカル僧院の院長が進み寄つて、頭をさげてお禮を云つた。

『實は此の繪卷は、愚僧がまだ若かつた頃に描いたものぢやつた……』

院長はもう可成りの老僧だが、眼光だけはまだ炯々としてゐる。

### 神々と人間

レエの町から馬をとばすと直きに行きつく高い山の中に、小さな僧庵が一軒ある。ラマの聖僧ツウバ・パドメ・カンツェの隱栖所だ。彼がまだ十二歳の少年僧の頃、此の山の岩窟に十八年間も隱棲の生活を續けてゐた今は故人となつた或る仙人によつて、後繼者の白羽の箭を立てられたのである。これは、少年僧にとつても彼一家の家族一門にとつても、天來の恩寵とも云ふべき無上の光榮だつた。

此の事があつてから四年間、少年僧パドメ・カンツェの地下の窖に於ける獨居生活が始まつた。食事だけは毎日、小窓からさし入れられるが、その配達人と口をきいて世間の話などを知ることがあるか、その顔を見ることも禁物だつた。足音だけは聞えるが、それもほんの僅かな一時で、來る日も來る日も文字どほりの晝なほ暗い地下の獨房生活である。四年間の春秋は無限に長いやうに思はれた。然し、此の試煉に少年僧はよく堪へぬいたのであつた。――

さて私が彼の僧庵を訪れたとき、聖僧はうす暗い獨房の中に默念と端坐してゐた。部屋の廣さは僅かに四平方米位、しかもその入口たるや頭をさげ膝をついて這ひこまねばならぬ程低い。



此のラマの聖者の粘土色の顔は、神経質で思索に疲れた痕が見える。辮髪にした長い髪が形のよい頭を美しく縁取り、特徴のある瞬間的な微笑が、時に、彼の若干農民じみた相貌に貴族的の魅力を興へてゐる。そしてその暗いアジア人的な眸はぢつと、穿さくするやうにまた反省するやうに、不意の闖入者の上に注がれた。

引ちぎれた書物の山、小さな金属製の鉢、僧院長の使ふ小型な青銅の笏、鐘鈴、小鼓、これには両面に頭蓋骨が描かれてある——それから、人骨の大腿部で拵へた角笛、やはり人骨らしい念珠。以上が、いかにも隠栖の道士らしい備品として彼の座右に散在してゐた。不斷の燈明が片隅にほのぼのと燃え、白と赤毛の小猫が一匹、現實とはあまりにかけ離れた空氣の中を這ひ廻つてゐる。ラマはこれを『坊や』と呼んでやさしく愛撫する。ささやかな小窓が一つ、其處を覗くと遙かに低いレエの町が眺められ、遠くカラコルム連峰の尖つた頭や突出した岩鼻が見える。まつたく獨得な比類のない展望だつた。

獨房の下は、やはり狭い暗鬱なお堂で、奇怪な形象の神々の像が、およそ考へ得る限りの恐怖を湛へて骨董屋の店の如くつまつてゐる。

此處が、まだ十二歳の少年時代に、此の聖僧の四年間も起伏した窘だつた。今日、彼は二十三歳だといふから、十年乃至十一年位は、既にかうやつて、完全な獨居隱栖の生活を續けてゐるのだ。どの位の月日がたつてゐるか彼自身にもはつきりしないと云ふ。

さて、かうして面と向つて觀察してゐると、私にはどうも二十三歳の若さとは思へない、どう見ても四十代か五十代のやうだつた。顔の色なぞまるで乾からびきつた粘土のやうなのである。

『四年も窘住ひをなさつて、さぞ退屈なさつたことでせうな……』と、私はそろそろ質問の矢を放つた。通譯は前に紹介すみの生徒のゐない學校の校長である。

ラマは辮髪を左右に振つた。『四年位すぐたちます。夜も晝も祈りを續けるし、聖書に読みふけてますから、時なぞといふものは早く經過します、大變早いですよ。』——さういふ彼の顔には、當時の記憶さへ既に忘却の中に置き捨てた人の表情が見える。

『たまにはあなただつて、淋しくて堪らなくなる時もありませうな。』

『淋しい、いゝえ愚僧は決して淋しくありません。』

『では冬になつて野獸なぞ出て來ても、恐しいとは思はんですか。』

若い聖僧の辮髪によち登つてゐた小猫が、燈明臺の方へ跳び降りたはずみに、永遠不斷の燈がぼつと消えてしまつた。叱りもせず再び灯をともしたラマは、やさしく小猫の脊を撫でてゐる。

『此邊には猿や熊や豹なぞが、ずゑ分をります。どうかすると此の庵室の門口まで現はれますが愚僧には何んの危害も加へませぬ。それに常住不斷に神を念じて居ります故、恐ろしいなぞと思ふ隙はありませんな。』

『では惡魔妖靈の類は？ 始終さういふ類のものが訪づれば致しませぬか……』



ラマは急いで頷いた。『そりやもういかにその通りですよ。』と、急に活々とした顔をあげる。『四年間此の地下室でお過しの時分にも、いろいろな精霊や悪魔どもがお邪魔したことで御座いませうな。』

『澤山來ました……』と、今度はラマの容子が少し不安になり、眼を伏せた。その拍子に彼の眼底がまつ赤に燃えてゐるのを、私は見遁さなかつた。少年僧として嘗生活をしてゐた時分に彼が見た悪魔の顔は、どのやうに恐ろしいものであつたらうか。

『で、その悪魔はどんな風でした？ お話し下さるわけには参りませんかしら。』

ラマはゆつくりと頭を振つた。『お話し申したいとは思ふが、左様なことは一切禁ぜられて居りますでな。』

『ではせめて、悪魔や精霊は單獨ひとりでで参りましたかそれとも多勢一緒に現れましたか、その點だけでも。』

ラマは相變らず緩つくりと答へる。『その位なら云へませう。少數の場合もあれば多勢で現はれたことでもありますな。愚僧が祈つてをりますると、悪魔どもは何ひとつ手出しなぞ致しませぬ。悪魔どもの中にも善良なのがあります。たとへば愚僧が、病人や死者を見舞ひに村へ出かけます折など、其處の扉とちを開放あひらけしに致して置きますが、そんな場合、悪魔や妖精どもが此の庵室を見張つてくれましたな、何人も此處に近づけぬやうしてくれますので。』

さて私が辭去しようとする、此の若い隠栖者は自分の寫眞を撮影して欲しいと云ひだした。一年ばかりラッサへ出かけるつもりであるから、その他行中自分の肖像を代りにかけて置きたい、といふのである。さうすれば庵室を訪ねて來る農民たちも、自分を禮拜するやうにその寫眞を拜むことが出来るだらう、といふのだつた。

ラマは鹿爪らしく丹念に、一番上等の法衣と着替へ、高い身分を表徴するいろ／＼の飾りをつけて座に直つた。左手には小さな鐘鈴を持ち、右手は胸の上で、例の青銅の笏を構へてゐる。その容子がいかにも、幼小兒の無邪氣な虚榮心にそつくりだつた。

多分、彼がラッサへ旅立つ時も、庵室や地下の小さいお堂は開放あひらしであらうが、彼のいふとほり悪魔の中の善良なもの共が、一切を安全に見張つてゐることであらう。

その後もレエの町で時々此の聖僧とは顔を會はした。多くの場合驢馬に騎乗し、弟子のラマ達も馬や徒歩でお供してゐた。彼の騎乗術はなかく活潑であるが、徒歩の場合でもやはり足が早い。一見非常に多忙らしい感じをうける。此のパドメ・カンツェの如き大きな試煉を経たラマには、もう永久に肉體上の疲れや支障が消え去つてゐるのであらう。聖者の姿を見かけると、隨所に農民も市民も馳けより走せ集つて、平身低頭してその手を押戴いてゐる。若い聖者は、端正な敬虔な態度でそれ等の信者たちの額に軽く指頭をふれるのである。その時間は文字どほり間一髪の早さで、あつと見る間に彼の姿はもう離れ去つてゐるのだつた。



ラマの聖都レエにはいろいろ變つた人物がある。

レエが持つてゐる唯一の貧相なインド人禮拜堂の庭内で、前のラマとは全然別種な型の聖者が私へ話しかけた。神話に出て来る牧羊神のやうな男で、顔も頭も黒い粗剛な毛を延び放題に生やし、身體にはロオマの長衣トウガに似た形のポロを一枚纏うてゐるだけだつた。然しその眼光まなざしは大膽で歩きつきも著しく自信と誇りにみちてゐた。

その見窄すぼらしい恰好の聖者が、ひどく達者な英語で、此の禮拜堂の前房に掲げられた原始的な繪畫のことを話しかけたのであるから、私は話の内容よりも先づ、一體どこでこんな流暢な英語を覺えたのかと、相手の顔をしげしげと見直さざるを得なかつた。

『いや訥ねは以前政府の官吏でしたぞ。』

『ほう、どんな方面でした？』

『インドの軍隊ですよ。』

『で、失禮ながら官等は？』

裸足はだしの聖者は輕蔑けいべつしきつたやうに唇を歪ゆがめて、『訥ねは將校でした。』

『ほう、イギリス軍の將校で？』

『さうです、あんた……』と領づき、彼がフランスで戦つたことや、メソボタミヤやマラバール事變じへんなどにも參加したことを説明した。フランス語も少々はいける容子で、ヌウヴ禮拜堂や北佛ルバ

シイの塹壕えんごうのことなどを話すとき、牧羊神のやうな面貌に輕侮けいごの嘲笑が浮ぶのだつた。  
『で現在は何？』

乞食こじきの如き聖者は自嘲じちやく的な容子で、不愉快な記憶を押しつけるやうな表情をした。

『訥ねは一日豁然こつぜん大悟したのですよ！』と、私を蔑あすむやうに眺め、財産も家庭も地位も一切を放棄したことを、政府からの年金さへも辭退しじたいしたことを、などを説明した。

『で、あなたは、今それで満足ですか？』

彼の双眸そうまうが晴々と遠方へ走つた。『勿論もちろんでさ、此の頃訥ねは放浪はうろうの旅です。いろんな事を考へてます。自分でも見當みあたがつかぬ迷路めいろでさ。たつたいま西藏せいざんから來ました。あのマナサロヴァルの聖湖せいこからね——此の世界の奇蹟きせきといふものは無際限むさいげんだな、あのヌウヴの禮拜堂らいはいだうやルバシイの激戦げきせんはどうです……？』

『では失禮しつれいだが、生計せいけいはどうやつておるのです？』

『貰もらふものを食べてます。訥ねにはなんにも欲しいものは無いのだから……』

私は思ひだした、モラヴィヤン教會の司教しきやうでピイタアといふ素晴らしく博愛はくあいな、私の出會つた限りではごく少數の眞まことのクリヌチャンだつたが、その人のところにはやはり、これに似たやうな聖者が一人、一年半以上も厄介やくがいに成つてゐたことである。此の遍歴へんれき僧そうの恬淡てんたんにして謙讓けんじやうなことは、市場街いちばがしにうろつく野犬のいぬたちと一緒に、めんつうの中の食物じきじつを食べてゐた一例いちれいでもよく分るのだつた。



まったく、此の童話の世界のやうなレエには、浮世ばなれのした人物があるものだとつくづく感じ入つたのである。

レエ滞在中、朝早くから夜の更けるまで、涙の滾れるほど深切に世話をしてくれたグラム・サルタン、校長と連立つて、市場街をぶらついた時の話だ。老人の農民が一人、麥粉を袋へ入れて賣りに出てゐたと思ひたまへ。校長は農夫の顔を見るとつか／＼と歩みよつて聲をかけたのである。

『今日は、クツウスさん！』と云つてから今度は私の方へ向いてかう説明した。『サラム(サレム又はセラムとも云ふ。アラビヤ語で平和の意味だが、會話の冒頭に町重な親しみの意味で用ふる場合がある)此の老人は或る歐羅巴人のお供をして西藏中を旅行したんですよ。』と、校長は再び農夫の方を見やつてつゞける。『お前がお供してラッサへ参つた旦那は何んで云つたつけない、クツウス。もうずる分久しいことだつたな？』

『ヘ Dein 旦那がじたよ。』

此の老いたる農夫は、スヴェン・ヘ Dein の従僕の一人として、千九百八年の西藏廻遊にお供した男である。それが今日、レエの市場街に胡坐をかいて、僅かばかりの麥粉の賣上げを楽しんでゐるのだつた。いや、ヘ Dein のお供をしたときのやうな長途の旅はもう二度と出来ないかも知れない、寒氣のために兩眼が凍結してしまつたといふし、それ以來レウマチを患らつて未だに歩行が、らくでないともいつた。

『そちらの旦那さんに伺つて貰へまいかの校長先生、足の痛みを癒す薬をお持ち合せだかどうですか。』

その翌日の朝、宿舍の園亭に私を訪ねてきたもうよぼよぼの、まつ白な疎毛と腫れぼつたい眼の撞木杖にすがつた回教徒が一人あつた。これがシャイヒ・アブズル・カリムと云つて、スヴェン・ヘ Dein の隊商指揮者として外ヒマラヤの峠越えに参加した男だつた。彼は私に、當時瑞典國王から贈られた銀の勳章を見せてくれた。此の男がいま、年老い、乞食の如く零落し果てて、見えぬ眼をしばだたきながら撞木杖に足をひきずつてゐるのである。燃えるやうな日光を浴びながら寒さうな風態で腰を下した此の老人にも、私は、眼炎の手當てに必要な薬を拵へて與へてやつた。地理學協會では學術會議を開催して豪華な晩餐會を祝ひ、出席者一同に金メダルを頒つてゐる。だがむしろその前に、此の偉大な探險家の計畫に参加した共働者の一人の、野良犬の如き飢餓を救つてやる手段を考へてやつたらどんなものであらうか。

『一年ばかり前に、誰かゞ手紙で知らせてもらつたさうだ。』と、シャイヒ・アブズル・カリムは炎傷に曇る眼を輝やかせて話した。『ヘ Dein 旦那が兩三年中にもう一遍ラダックへいらつしやるちうんだが、もし來年にでも來なさんなら、わしももう一遍お目にかゝる楽しみが持てるが、再來年にのびたんぢやあ、俺はもう死んでるだらうよ。』



カシュミヤ太公マラヤの誕生日祝ひがあつた。ラダックもその管轄区域内の一縣である以上、聖都レエもまた是非の餘地なく此の誕生日をお祝ひせねばならない。

祝ひの式場は公園内と決り、あらゆる階級の富める者も貧しき者も参列した。雪白のまたエゾイチゴ色の頭巾タベンを戴いた高官貴顯たちの感激的な熱辯があつたが、どういふ理由があるのか、第一番に演壇に立つた市長の話は、おかしくもないのに聴衆の大笑を買つたやうである。挨拶や演説が終ると、やはり頭巾を捲いた二三人が登場して、氣取つた節廻しの歌を合唱した。太公殿下の榮譽をたたへるために新作された新曲である。効果は素晴らしく、満場の聴衆の心を奪つたやうである。

引續き學校兒童の徒手體操。私の親切な友人グラム・サルタン先生は、手が三倍も欲しい忙しさだ。三人の生徒が鋭い最高音で何か誓忠報國の聖歌らしいのを唱ひだした。どうも我々の祖國の歌と似てゐる。最後に、一僧院のラマや尼たちの、假面マスクと扮装によつてする豪華な悪靈踊り。伴奏の樂團の中には、例の優れた畫家、サンカル僧院の院長の顔も並んで、莊重に然も注意ぶかく皿形の打樂器を打ち鳴らしてゐた。

此の祝典を通じて一番目立つたのは、何と云つても献金集めの儀禮だつたらう。之れに参加する者も先づ第一番に太公配下の役人たちだが、その容子はどう見ても貢の賦課取立ての觀が深い。

先づ献金者の姓名が呼ばれ、呼ばれた者は順次、花で飾られた太公殿下の肖像を安置した机の前に進み出る。さうしてイギリス金貨を規定額だけ置いてから、合掌して肖像の前に頭をたれるので

ある。第一に進み出たのが、ラダック縣下の三大修道院へミス、スピッツウク、サンカルの代表者たち、續いて左遷を蒙つた舊王の代理使節、最後が貴顯紳士の市民と云つた順序だつた。

さういふ市民の中の一人、或る金持の商人の如きは、さう簡単に舊王を左遷したカシュミヤの太公に貢みつぎを課せられる理由を肯んじなかつたと見え、ルビイ銀貨を二三枚、ぽんと卓に抛りだしただけだつた。ところが、さつそく監視の書記に呼止められ、規定の金貨を要求されたのである。入れ替つて進み出た肥つた商人は、着衣は大變豪華だが足は素足で、肖像前の敬禮もあまり町重とは云へなかつた。ほんのちよいと頭をさげただけで、それも肖像の正面へではなくそつぽ向いてお辭儀したやうである。さつそく傍から例の監視の書記の横槍がとびだす。だが此の肥満した商人は負けず、愛嬌たつぷりの辯明を長々と喋り立てた。要約すると、自分は確かに敬禮した、眼のあつた人間なら見てゐた筈だ。自分は回教寺院へ行つても之以上の敬禮はしないといふのである。それに此の商人が近視眼だつたことは一般に知れてゐたし、實際、卓上の肖像をはつきり見られなかつたものらしい。とにかく彼の辯解は涯しもなく展開した揚句の果てが、到頭、満場の爆笑を惹起して終つたのである。

意識的に此の祝典を爆笑に導いた商人の態度から見て、明瞭に察知されることは、聖都レエの市民の人氣がいまだに現在へミスのラマ達によつて擔がれてゐる舊王の上に在るらしい形勢だつた。

祝典が終ると此國獨得の打毬ゴ競技が行はれる。元來レエといふ郵會は打毬の盛んなところで、貧



富の階級を問はず騎乗に達者な者なら誰でも歓迎されるのである。頭巾クラッパにトルコ帽、短衣ジヤケットに長袖とあらゆる各層からの選手が入り亂れて追ひつ追はれつする有様は、まことに壯觀だつた。一度なぞ打つた毬がラマの集團の中に飛びこんだため、見物してゐたラマ達が驚ろいて塙かきから眞逆様に轉落するなぞの餘興もあつた。

前にも云つた通り、その日のレエには、平素の嚴肅な聖都の面影が全くなかつた。夕方になるとそちこちから一齊に太鼓が鳴りひびき、家ごとに電飾イルミネーションがまたゝき、市場街の雑沓のまん中では荒つぽいバルト踊りが始まつた。踊り子は、ひよろ／＼になつて、大地にへたばるまで踊りぬくのである。

この踊り子が、實はレエの郵便配達夫——私とも顔馴染の男だつたとは、まつたく意外な心持だつた。

すつかり友達になつた例の學校の先生が、その晩私を自宅に招待して、飛切上等のラダック料理を御馳走してくれた。興味の深かつたことは、彼の大變清潔な美しい住宅内に兒童部屋を見たことだつた。一軒の家に三人兄弟が家族と一緒に住み、その兒童部屋には二歳から七歳位までの幼兒が十五人もウヨウヨしてゐたのである。

レエの幼兒が穿いてゐるパンツは、男女を問はず同型だつた。臀部が完全に剝出したのである。これを通して街頭なぞに遊び戯れてゐる幼兒たちを見ると、何となく非常に新鮮な潑刺とした感じ

があるし、第一、排泄の場合なぞに實用的だらうと思つた次第である。

### 犠牲さげものの儀禮 (曼陀羅)

長大な大喇叭が耳も聳するばかりに鳴り響いてゐる。最高音になるとクラリネットがはひり、打樂器の金屬音が加はり、はては遠雷のやうな太鼓の音までも轟るき始めた。

ふと、太鼓とクラリネット打樂器との音がやんで、大喇叭だけが巨人の駟のやうな聲音を喚よきつづけてゐる。同時に鈍重な低音バスの、ちやうど大喇叭の喚きに似た合唱團指揮者の首吟が始まつた。彼は祭壇の直前に腰かけて合唱團を指揮してゐるのである。ラマ達が此の首吟に應じて順次に歌ひだす。平板單調な蛇のうなりのやうでもあり、嘘うそ歎のため息のやうでもある。時々、その平板な調子がやゝ高められ、明るくなつて、禮拜堂の幽暗な空氣を搖すぶつてゐる。ラマ達は歌ふとき殆んど唇を開かない。口腔と鼻孔とで發聲するのである。

ラマ達は赤い僧衣を着けて二列に、毛氈を敷いた低い幅の廣いベンチに跏まり、祭壇に通ずる細い中央の通路へ眼を注いでゐる。此のベンチの背後の一方に、扁平な赤ラック塗りの太鼓を垂直に立て、僧侶が一人跏まつてゐる。反對の側にも、やはりベンチの背後に二三人ラマ僧が腰を下しその中の一人が青銅の打樂器を鳴らす役だ。オーケストラは更に後方のうす暗い隅の方に跏まつて



ある。クラリネットが二つと金属製の大喇叭が二つ。これは二米以上も長い喇叭で、特別な臺架に支へられてゐる。野外で之を吹奏する際には、若いラマが一人、此の臺架の代りをつとめて支へるのである。

合唱の間、ラマ達の上半身は、軽く左右に揺れ、時には前方へ傾むく場合もある。各自の前に小さな机があり、其上に細長い紙を綴じたのが置かれ、それを読みながら例の冗長な連禱の詩句を歌ふのである。一枚分だけ歌ひ終ると、頁をかへして横へ片寄せる。此の臺本は書かれたものでなく版木で刷つたものだ。

だしぬけに合唱がバラバラになり、二三人の不揃ひな歌ひ方が續いてから、すつかり終つてひつそりする。

小休止があつて復び大喇叭の耳を聳する低音が鳴りわたる。クラリネットと打楽器。太鼓の慌ただしい轟音。此の音楽はひどく刺戟的な不整音の動亂であり、悪魔の叫喚の喧囂である。一段一段とその動亂喧囂が高められ、もうやりきれなくなつたとたんに、急にびたりと歇んでしまふ。後は暫らく、例の大喇叭の獨奏だ。

ラマ達が一齊に、聖書の上に小型の鐘鈴をうち振る。禮拜堂はたちまちにして莊嚴と敬虔の空氣に満ち充つる。

オム——オム——クウム！

終りのクウムが深い激しい駢のやうにひびくのに較べると、始めのオムの方は遙かに強く情熱的に聞える。

石油ランプがまたまき、銀製の厨子が一基きらりと輝やく。一米ばかりもありさうな尖塔型である。此の中に先代の僧院長の靈が休んでゐるのだ。

祭壇の中央にやさしく燦めいてゐる佛陀座像の黄金の頭、紺色の小さい渦を捲いてゐる髪と尋常外れて大きな耳朵。その右手に跣んで、緞子の法衣に高い僧正帽をかぶつてゐるのがツオンダカバと云つて、ラマ教の革新者であり所謂黄色派の創設者である。レエに在る此のスピツク僧院も、その黄色派革新派ラマに屬してゐるのだ。之とは反對の左手にチャムバの像が安置されてゐる。更に、オーケストラの頭上にもいぶし金の細面の顔が一つ覗いてゐる。逝去した僧院長の像だが、その靈は、前に云つた祭壇の一隅の銀の厨子の中に休んでゐるのである。

オム——オム……

香爐の上によい匂ひのする煙の細條が、三本五本、ゆるやかに立ちのぼつてゐる。

ラマ達は一齊にラマ帽を脱ぎ、各自の前の包みを披く。小さく疊んだ肩掛のやうなマントを取出してひらりと羽織る。絹布で赤褐色の地に黄色の縁取が暗碧に見える。あちこち、つぎはぎがあり大抵は古色蒼然たるものだ。それから奇妙な形の丸帽を青々と刺つた頭にのせる。黒くピンと張つて光つた帽子で、上へ行くほど小さくなる黒鉛色の球が三つ、赤い紐帯で飾つてゐる。動きたびに



此の球がユラユラするところは、ボンチ畫に出て来る一寸法師の尖帽せんぼうに似てゐる。

再びオーケストラの轟音。

呼鈴よるんが鳴ると、長老のラマが嚴やかな儀禮をもつて供物皿の上へ米をサラサラとあける。皿は一番大きいのを下に、順次何枚かを積み重ねてあり、その縁にはみなトルコ玉の美しいのが象徴してあるから、結局、米とトルコ玉の小さなピラミッドが出来あがるのである。

合唱が最高調になつた。

ラマ達は今度は、彩色した冠かんむりを例の黒鉛色の尖帽せんぼうの前に結びつけてゐる。かうなると何處かの王様たちの寄り合ひのやうに見える。

再三、大喇叭が轟ろき、オーケストラが喚き狂ふ。その中で、莊重な儀禮と共に一人のラマが、

長老僧の手から米の供物皿のピラミッドを受取り、これを祭壇の黄金の佛陀の前に捧げる。

合唱が叫ぶ。『オム！ ヴァイラ ブムミ アア フウム！』

『原理根本は純粹の黄金なり、中頃は鐵なり、それ等の中に在るものはすべて山々の主しゅ。東に展ひらくリュスパスポ、南に西にまた北に、此の彼の國に展け行く。寶玉の山、願望の樹、貴重なる馬、貴重なる象、大將軍と花瓶の珍寶。

いま御前おんまへに天地の寶財たからを捧ぐ、その悉くを捧げまつる、おゝ崇高く優しき聖なるラマよ！

おゝ神祕なる世男の諸神よ、佛陀とボヂスアトヴァの諸靈よ！

かくあれよ

かくあれよ！』

以上が大體、宇宙の犠牲さしげと云はれる曼陀羅の祭儀の内容だ。ラマの禮拜堂ではこれが毎日の勤行になつてゐるのである。

十歳から十二歳位の學童たちが、不潔な青衣と垢だらけの手足で、大きな銅製の湯罐を提げてラマの列の間を歩き廻り、お茶を汲んでゐる。その間にも儀式はまだ続けられるのである。ラマははたで何をして一向苦にしない。茶汲みの少年ラマ達がお饒舌しやべりをやらうが、私が早取寫眞のマグネシウムを燃やさうが、一向に無頓著である。尤も後になつてから、あの電光のやうな光がパッと揚つた容子は生れて初めて見たと、いかにもびつくりしたやうに話してゐたが、その現場ではたしかに眉ひとつ動かさなかつたのである。

入口の横手に置かれた木箱の上に、屠殺したばかりの羊の生首が載つてゐる。玉葱たまねぎの山、パンの山もある。此のパンは素手で捏ね上げた見え、不揃ひで形が悪い。指の痕などがはつきり残つてゐる。これは昨日のお供物で、參詣人や乞食達に與へるのである。おまけにその箱の上にはとつともなく巨大な骸骨の假面が物凄ものぞろい容子でぶら下つてゐた。

少年たちは頻りに赤い僧衣をはためかして、堂内をあちこち茶を注つぎまはつてゐる。湯罐の中の



飲料は、茶と云つても鹽、羊乳、バター等をまぜたもので、我々には口當りの悪いものだが、ラマ僧たちは朝から晩まで、大量にこれを用ひてゐるのである。

禮拜堂の入口に、白髪の老婦が一人跣まつてゐた。顔はすつかり縮みあがつてまるで乾燥した梨のやうである。頭を低くたれては拇指をつき立て舌をペロリと出す。まつ赤な、ばらの花瓣のやうなのが白い口髭のかぶさつた唇から飛びだす光景は一奇觀だつた。

此の老婦は信心ぶかい巡禮女で、一生涯の間かうして西藏とラダック中の寺や僧院詣りをやつてゐるのである。年齢はもう八十を越えてゐるといふ話だ。

スピッツウク僧院は今から約五百年前に、上述した革新派の頭目ツォングカパの建立にかゝるものである。いや、此のラマの傑僧がたつた一夜のうちに作り上げたものだと言へられる。峻しい絶壁の岩上に、インダス溪谷を俯瞰する位置に立つてゐる。周囲は悉く目眩しい雪嶺の環だ。

ラマ僧が一人、迷宮のやうに暗鬱な歩廊と狭い急な階段を、その一番上まで案内してくれた。急にラマは傍の扉の前で靴をよく磨き、『院主様にお會ひなさるか、あなたをお待ち申しておいでですか?』と云ふ。

支那犬らしい小犬が一匹吠えつきながら飛び出して來た。狭い、天井の低い部屋である、僧院の新任の院主が一人でぼつねんと腰を下してゐた。

いかにも高僧知識らしい舉措で、院主は毛氈を敷いた踏板の前に半身を跣めた。その前方には小型のラック塗りの机があり、眞鍮の小鉢、支那風の陶器の皿、小さな青銅の笏、鐘鈴、花を活けた小さな花瓶、なぞが頗る清潔にもつたいぶつて並べてある。横手には小型のラック塗りの用筆筒があり、その上には佛陀を描いた旗がかゝつてゐた。右にも左にも小窓があり、雪の峰や、青々と輝くインダス溪谷の流れが覗かれる。

クシヨック院主は、親しげにそれでもやゝ照れくささうに私を迎へ愛嬌たつぷりの挨拶をした。なか／＼優男である。眼瞼は支那人風に弓形で、手は小さくよく手入れが届いてゐた。

此の院主は十歳か十一歳位のほんの少年であるから、何んと云つてもひどく子供っぽいところが多い。躰られた品位をくづすまいとしてか、何か訊ねられるたびに頬を赫らめ、小さな手をこすり合はせてゐる。少年が此の高名な僧院の院主となつたのは三年前だつた。それ以來、此の獨房から滅多に出たことがないといふ。少年院主に較べると、此處のラマ生徒たちは粗野で健康で、まるで農家の子供のやうである。だが、少年院主は、此の僧院が好きで満足してゐると云つた。また、やがてラッサへ修學に行くつもりだとも云つてゐた。

少年院主は、そゝくさとやゝ狼狽氣味で、寫眞を二三枚取り出して見せた。ラマ僧が數人はひつて來る。その後から生徒が一人二人頭をつ。こんで笑つたり喋つたりし始めた。老僧が一人叱りつけて追拂つたので、どつといふ歡聲と入亂れた足音が揚る。少年院主は笑ひをかみしめてゐるやう



な顔になつた。

彼の容貌は、此の階下に安置されてゐる銀の厨子の主、即ち先代の院主にそっくりである。少年が後継者と決定されたのは、先代が永眠する少し前だつたさうだ。先代の院主は、死の床にあつて今年のうちにあの谷、此の村へ必らず甦へつて来ることを布告したとも云ふ。その甦へりがつまり、新しい此の少年院主だといふ専らの巷説である。

普通ならば、僧院の後嗣はラッサの本山で決めるか、又は僧院と兄弟関係にある他の僧院の中から選定されるのである。だが、巷説によると、先代の老院主が殊更、かういふ非常手段を取つたのは、まだ存生中から自分とよく似た少年を探し求め、もつて近隣トリグセの僧院の院主のかねての野望を防止するためだつたと傳へてゐる。トリグセの僧院の院主は一種の精神病者だつたから、さういふ不健康な者に由緒あるスピツウクの僧院は渡せぬ、といふのが先代の肚だつたのである。

私が階上を辭して、境内に繋いでおいた馬に再び跨つたとき、少年院主の顔が珍らしさうに例の小窓から覗いてゐた。此方に氣づかれたと思ふと急いで首を引込めるが、ぢきにまたおつおつと顔を出す容子である。さつき私に吠えついた支那産の小犬ばかりは、続けさまに私の方へ吠えつゞけてゐた。

氣の毒な少年院主。少年の前途にはいろいろな障碍が横はつてゐることであらう。三年間は修學のためラッサに滞留するとしても、それから先き更に十二年間は、完全な獨房、幽閉の生活を續けて祈禱と冥想に身心を委ね、もつて彼に課せられた高遠な職責完遂への、心力を集中せねばならぬのだ。

さうしてやがて彼が此の世を去るとき、その靈は銀の厨子に祀られて地階に安置され、容姿は黄金像に刻まれて錦爛にくるまれ、あの賑やかなクラリネットと大喇叭の騒音のさ中で、先代の院主の像と共に並べられることであらう。

### 修道院そちこち

佛の町レエの周圍には大小の修道院<sup>ほらけ</sup>Ⅱラマ僧院が無數に散在する。狭い谷間や、扇子を擴げたやうな野や畑のまん中に建てたものもあるが、大部分は高い山の上、岩壁の間などである。例のマニ壁や道標の尖塔の並んでゐるつき、當りにはきまつてこれがあるのだ。

設計様式もさまざまで、隠れた美を備へたもの、野蠻未開の恐ろしさ思はしさを持つたものなど區々である。その多くは、土地土地の神々を祀つてゐるが、それ等の主神の名を知つてゐる者は少く、ラマ達にさへもどういふ意味か分らないのがある。それでゐて殆んど例外なしに信徒誘引を目的とする催し物をやつたり、宣傳をやつたりしてゐる。

中でも今も忘れられないほど美しく神祕的なのは、シェイの修道院で見た巨大な佛陀の穩やかな



笑顔である。本山の旗が幾旒となく天井からたれ、その間に黄金のゴオタマの顔が、あらゆる質素な布のきれはしの中から悠揚と、一つの光輝となり、完成としてまた和やかな光彩として、ほのぼのと輝やいてゐるのだ。

(\*ゴオタマは佛陀の家系名である。佛陀のそもその意味は尊稱だつた。従つて本名は悉多太子のあて字をされてゐるシツダルタである。)

云はゞ、天上の樂園の平和は、此の黄金像の顔貌の中にそのまま反映されてゐると云つてよいであらう。

『虚榮を捨つる者は賢人なり、彼が眼の微笑を湛へて、もがき喘ぐ群衆を眺むる様は、溪谷を俯瞰する山の峯にぞ似たる。』

佛陀の顔は、高いので分らないが約二米位の長さであらう。肩から頭部が殆んど天井を壓してゐる。胸から下腹は審の如き堅穴を成してゐる。

シエイの僧院と對立して、山腹にはりついた如く建てられてゐるのが、マルトオの修道院だ。此處には常に二人のラマが泊つてをり、一ヶ月餘の祈禱と禁欲を終ると、豫言者または降神の占術師として信徒の前に出る。シエイの村立の僧院にもやはり、かういふ型のラマが一人あるときいて、私はそのラマに會ひに馬を走らせた。

村立の僧院はラガンド・ゴムパといふが、ひどく小さく低い建物で、一人前の成人が四人並んだ

ら満員になりさうである。室内の空氣はかび臭く、驚いたことに、白い幽霊のやうな馬が一頭、うす暗がりの中からトコトコ出て來た。馬は頸に貝殻を一枚つけ、びつくりするやうな聲で笑ひながら赤い鼻さきをぐいと伸ばして、狭い祭壇の石油ラムプの灯に近づける。鞍には、暢氣な支那人型の黄色い顔が、頭に冠を載せて納まつてゐた。これが、尠くともラマたちの教師と呼び、傳道師と敬まつてゐるドルイエ・チャインモといふ男だつた。

同じやうな白馬に跨がり、同じやうな冠を戴き、同じやうな衣裳をつけて、年に一度、僧院の精靈派のラマが、芝居を見に集まつて來る信徒たちの前に出現するといふ。その準備のためには、ラマはまる一ヶ月といふもの、眠らず食はずで此の狭い僧院に、笑ふ幽霊馬と一緒に閉ぢこもらねばならない。それがつまり、私の前でいま出て來たのだつた。禁欲の苦行に疲れはて、幽霊馬を指揮する幽霊に取憑かれて、豫言をやり悪魔を驅使して病人を癒したり、信徒が發するいろ／＼の質問に應答したりするのである。

『然しその精靈といふのは一體何處にゐるね？ 我々にも見えるのかね？』と、私は訊ねざるを得なかつた。

『此處にゐますよ！』と、案内役の若い校長が、無邪氣さうな一人の青年を指さした。物珍らしげな顔つきで集まつて來た農民たちや、ラマの中にまじつてゐる青年である。別段、ほかの人達と變つた容子もないが、強いてそれを求めれば、いくらか粗野な感じが尠い點であらう。容貌もほかの



人達と較べるといくらか優しいし、繪の明暗度で云へば、たしかに一刷毛位は明るいやうだつた。だが生憎とその時は、精靈は彼に憑いてゐなかつた。收穫の仕事の方へ手傳ひに行つてゐたのである。

そこで私は、校長先生を介してかう訊ねて見た。もしその精靈が君を離れた場合に、君は自分が何をしてゐたか、何を喋つたか、後で思ひだすことが出来ますかね、と。『いえ、何事も記憶してをりません。』と答へる。狹隘なかび臭い聖堂の中で、あの白馬と一緒に一ヶ月間の斷食と祈禱をやりぬくと、まったく生死の境も覚えぬまでに疲弊しきつてしまふであらう。だからその後二三日は、眠り病のやうに昏々と眠りつゞけるといふ事だ。

レエから二時間ばかりの騎乗行程のところトリグロ僧院といふのがある。非常に古いもので、國內中でも一番古い僧院の一つだが高い山の上に在り、荒廢に委せてゐる。かつては數百名のラマ僧を收容したといふが、現在では辛うじて二十人そこそこであらう。頽廢して役に立たぬ部屋が多いのである。

神々も先代の僧院長の靈も、何十年何百年の塵に埋れたまゝ、ほのかな石油ラムプの灯と、赤く染めた拇指大のパンのピラミッドや米を盛つた皿などのお供物を前にして、再び醒めることのない眠りの中に在る。

僅かに残骸を止めてゐる境内のお堂の二三も、文字どほり恐怖の密室だつた。冷蔵地下室からふきあがる寒氣に襲はれた時のやうな、ぞつとした肌寒い感じがはつきりと感ぜられる。醜怪な凡ゆる種類の獸、それに跨がつてゐる人面獸身の怪物——たしかにこれは、暗黒の妖靈に満ち満ちた恐怖の密室に相違ない。逞しい骨格や、物凄じい表情が、部分的に掩うてある布片をすかして見えるのである。さうして、其様な地獄の妖靈の或るものは普通の家の二階家位も高く大きいのだつた。

壁には壁畫があつた。天才的な手法だが、これもやはり妖靈に取憑かれた天才の描いたものに違ひあるまい。確かにこの構圖は、妖靈の恐怖感を過大にし誇張したものでなく、むしろ作者自身の驚異の幻想を具現化したものだ。單純な農民たちは、これを一見して驚愕、恐怖のあまり五體の萎縮するのを感じるであらう。虚殺された人と獸が、頭を下に吊され、心臓も肺臓も抉り出されてゐる光景を描いたのがある。どれを見ても血の逆流するのを感じるやうな、あまりにも腥ぐさい佛敎地獄の繪卷だ。——ラマが汝等の靈を救つてやらなければ汝等のみなかういふ運命になるのだぞ！——しかも、無智な農民をかく威嚇する當のラマ達は、私が悪寒を覚えて此の壁畫から眼をそむけるのを見ると、嬉しさうに笑つてゐた。

だが恐らくは、かやうな壁畫の残されてゐることはやがて、かつて行はれた人身御供、人間犠牲の事實を裏書するのかも知れない。従つてまた此の壁畫は往時の犠牲の祭儀、曼陀羅の實況を再現したものと云ふことも出来るのであらう。此の壁畫の制作年代は疑ひもなく數百年の昔である。同



じ天才的な手法によつて、多くの動物、例へば虎、獅子、黒牛、羚羊などを主體とする曼陀羅も描かれたに相違ない。――

さて、此の暗黒の地獄の妖靈の住む世界を這々のていで遁げだした時、後方から私を止める一人のラマがあつた。振り返つて見ると、そのラマは、甚だ怪しげな身振りで、地獄の主でも穿くやうな偉大な犢鼻褌を高く棒立ててゐる。男性の精力の巨大な象徴がはつきりと眼に映つた。人間の頭も五頭も、すべてあの黒い股間から湧き出たのである。不妊の女性たちが助力を求めたのも、實にかやうな神性に對してであつたに違ひない。

前に云つたゴムパス修道院の院長が發狂してゐるといふ事實も、或ひは偶然ではないだらうと考られる。云はゞ彼は悪靈たちに取憑かれたのだ。毛氈をひき裂き、貴重な寶物をうち碎き、佛陀や先代の院長などの像を庭内に並べて、狙撃的にしたりするのみなそのせゐに違ひない。院内の寶庫から青銅や木彫の佛體を取出して賣却したり、はてはヤソ教に宗旨換へするなぞと宗門を脅迫するもの、やはり原因はそれだと思ふ。ドライラマには此のかくれた原因が分らなかつた。手に負へなかつた。そこで或る機略を用ひて此の發狂院長をラッサへ護送させたのである。恐らく此の院長は死ぬまで幽閉檻禁されることであらう。

ゴムパス修道院の院長の後釜には、プリオルといふ七十五歳の老ラマが据ゑられた。私が彼の美しい廣々とした居間に通されたとき、此の新院長は一心に祈禱をしてゐるところだつた。私が先づ

御健康は如何かと訊ねると、直ぐに二人のラマが右左から此の老ラマの膝下に跪まづいて、大きな聲で私の言葉をくり返すといふ騒ぎである。

老ラマは、童顔に微笑を湛へてそれに答へたと思ふと、またぞろ祈禱の詩句を口の中で唱へつゝ、聖書に読み入つてゐる。

こんな風で、私との一問一答は實に手數のかゝるものだつたが、また、その間に見る老ラマの表情がなかなか味のあるものだつた。彼の童顔は、やさしい子供らしい笑顔と、嚴肅な説教師の表情との間を絶えず往復する。それは、己れの祈念の時を一秒たりとも邪魔されたくないといふ、はつきりした求道士の信念の嚴かさであつた。

私は辭去を云つた、さうして老ラマも亦たそれに應答したが、低くさげられた彼の頭は元にかへらずにそのまゝ聖書に向けられ、挨拶の言葉尻もそのまゝ祈禱句の獨語と變つてゐたのである。

此の老ラマの居間からは窓越しに見える。遙か彼方の山の蔭に、スタクナ・ゴムパ僧院があるのだ。私は昨日は彼處を訪れた、私にとつて二度と忘れ得ない僧院である。

スタクナ・ゴムパは古い、規模の大きな僧院だつたが、ラマがたつた一人で、顎に支那風の黒い疎らな髯をたらしめた三人の男を使つてゐる。いやもう一人、近頃逝去した院長の化身と云はれる七歳の少年と、都合五人暮しで此の廣大な僧院を守つてゐるのだつた。少年は三歳の時から自分の獨房に籠り、積重ねた褥の上に坐つて僧院長の飾章のついた小机の前に、嚴肅な師の教へに耳を傾む



けてきたのである。

『どうかするとこんな山の中にあるのがひどく淋しくなるだらうね……君。』と、私は此の少年院長に訊いてみた。

小つぼけな瘦せた、農家の子供らしいこの少年院長は、黙つて頭を横にふつてゐる。私が何を訊ねてもかぶりをおふるばかりで、ほんの一言も云はなかつた。

一度少年が何か思ひついたらしく起ちかゝらうとした。我々が古い修道院の旗などを眺めてゐる際だつたが、すぐ例のラマの手が少年の肩にのびて穩やかに元の座へ押戻してしまつたのを見た。

少年院長は悲しさうな眼をしてゐた。今私これを書いてゐる瞬間も、明日も明後日も、來月も來年も、あの積重ねた褥の上にかしこまつて、嚴しい教師の教へと訓しとをぢつと傾聽してゐることであらう。

少年の座席からはインドス溪谷が見える、遙かな山麓の狭い通路の上を行く隊商の姿が、點々として小さく見える。隊商はみな西藏から來るのだ。

## 精靈の踊り

レエの町から一日行程も離れたところにヘミスといふ小西藏中でも一番高名な修道院がある。此

處の院長はラダック縣内のラマ僧院を全部管理してゐる云はゞ全僧院々長の首席だつた。

巨大なマニ壁と道標の尖塔の巨人群が、迷ふ隙もなく僧院への巡禮路を教へてゐる。地形は、インドス溪流の彼岸、道は峻嶮な氷のやうに冷たい石塊道を登るのだ。ヘミス僧院は、殆んど四千米の高地に在る。神聖な紋章や象徴を描いた布の旗が幾條となく山風に靡き、更に前庭には高い旗竿が聳えて、約一打ほどの黒牛の尻毛や旒旗がへんぼんと翻へつてゐる。僧院の屋根屋根にも、黒と白の幟と旗が、幾旒となく掲揚されてゐる。それ等がみな、晝となく夜となく、感激と昂奮と熱情とを、天空にさしのべる哀願の手のやうに掻き立てゝゐるのだ。僧院から湧き上る唯一つの終止符をもたぬ祈禱の聲が、外からでもよく聴えてゐる。

ヘミス修道院の起原は古い。六つの殿堂がそれぞれの建築様式を誇り顔に並列してゐる。敷地は山腹に沿つて長くのび、白塗りに黒色の横線をもつた四階建て五階建てばかりである。家根は扁平だ。性急な黒毛の西藏犬が鎖で繋がれてゐる前庭、廻廊、露臺、正面階段、内苑——いづれを見ても品位と趣味を湛へ、西藏風の重厚味を支那風の雅致によつて和らげた感が深い。これはみなラッサの本山の設計によつて建てられたものだといふ話である。

建物の内部はどれも迷宮のやうだ。うす暗くて濕々とかび臭く、古道具やはく製の羚羊などが天井からぶら下つてゐる。正面に祭壇が一つ、油燈の貧しい灯影で窺つた容子では、暗い隅の方に在るボヂスアットヴァ像は青銅か眞鍮らしい。恐るべき面貌をした死神ヤマが、牡牛の頭を傾けて



自分の妻を膝の上に抱擁してゐる。小型の西藏産の青銅像がある。危険、疾病、ペスト、飢餓等の不吉を呼び出すといふクリデヴィ神が、胸をつきだして敏捷な蒙古馬に騎乗してゐる。まるで全ラマの萬神が、此の一堂に繪となり彫像となつて集つてゐるやうだ。天地兩界に於ける佛陀、諸神、半神半人、今云つたボデスアットヴァ神、各地の郷土神、天使、善惡兩様の精靈から説教師にいたるまで夥しい種類である。ラマの説く佛教は、疑ひもなく原始宗教の形をとつてゐる。がしかし其處に説かれる如き天國の世界といふものは、他の如何なる宗教にも存在しない獨得のものだつた。ラマは、天國も地上も地獄も、同じやうなものとして見、この三界に同じやうな人間の存在を幻想する結果、神と精靈と人間との神祕な限界がまるでなくなつてしまつたのである。

中央の殿堂には巨大な尖塔チョルテとよく光る銀の圓塔スツツが二三基立つてゐた。何れも六米から八米ほどの高いもので、鍍金した浮彫やトルコ玉、美しい象牙などで飾つた大した傑作である。此の内部には何れも、聖骨、聖僧の遺物、聖書經文などが納めてあるのだ。

巨大な佛陀を始めいろ／＼な佛が、嘆賞さるべき繪畫として、また青銅、古陶、象牙等の高價な材料を惜氣もなく使つた佛像として、陳列してある。そして此處にもまた、それ等の傑作にまじつて、廢物同然の古道具や、意味のないぼろが並べてあるのだつた。何百といふ小型の油燈ラムツが、夜も晝も祭壇の前で燃えつゞけてゐる。傍に置かれた大きな罐カマにつめられた脂肪おぼら、これはみな、これ等の油燈が必要とする一年間の食料なのである。

ヘミスの伽藍ガランに奉仕する者は休む間がない。幽暗な空氣のどこかに、いつでも銀鈴の鳴る音がしてゐる。太鼓が鳴り銅羅がひびく。然もまた夜は夜ごとに、曉かけて屋上の長い大喇叭が、猛然たる大音響でゴオタマ佛陀が示現した一切の生ける物の解脱釋放の道を、人に、禽獸に、山に、空に告げ渡るのだ。

民衆が屋根といふ屋根を埋め、廻廊と露臺を悉く占領してゐる。八方の僧院を後にしたラマたちが何百人ともなく、ヘミスにヘミスへと押し寄せる。縣内最古の由緒を誇る古刹の、高名な神祕劇と精靈の踊りを見物するためだ。

大喇叭が精一杯の長い息をはりあげて咆える。太鼓が唸り、クラリネットが裂帛の聲を立て、その合間に金屬性のソプラノを交へるのが打楽器だ。一瞬、はつと静まり返る。本堂の正門から現れ出た一人のラマが、まつ赤な圓柱や立像の間を縫つて、嚴そかに階段を神苑へと降りて来る。扮装はレモン黄の絹の寬袍カフマを羽織り、その前面には青黒い飛龍が一頭刺繡してある。金褐色の假面をつけ、輪狀の、黒い毛皮で縁取つた帽子を戴いてゐる。縁取りの黒い毛皮の一端には孔雀の羽毛の美しい房が揺れてゐた。

太鼓と大喇叭が鈍重な韻律で、これを迎へる挨拶を始める。

此のラマが、ラマ界の重鎮と云はれるヘミス修道院の院長であり、使徒であり、占星術の大家で



あるオンポパ司教だつた。(オンポパではなく、ツオンカバといふのかも知れない。レエの若い校長さんに、此の疑問の責任があります。)

續いて、三十人の、やはり醜怪な假面と絹布の寛袍かちぎに扮装した一隊が長袖を翻へして現れる。此の一團は、先頭のオンポパ司教が晴れの座に直る間に、はやくも踊りを舞ひ始めた。

恐怖感を與へる不氣味な三十の假面の、大きく歪んだ顔、顔、顔。青、赤、硫黄色からペンキのやうに黒光りのするやつが、長大な齒を大きな口から露出むきだして、圓陣を作つて鈍重な動作で踊つてゐる。そろ／＼と片脚を一方の上に擡もたげ、兩腕を振つて緩漫な獨樂ごんがの如く廻轉するのだが、流れるが如き寛袍と翻へる長袖のお蔭で、此の運動がくる／＼と早い、夢幻的な輪舞の如き印象を與へるのである。踊り子たちは相互に顔を向け合ひ、相對して踊つたかと思ふと再び醉漢がよるめくやうな形で廻轉する。夢遊病者か、別の世界からか持つてきた奇妙な形式のやうである。不意に伴奏の音楽が沈黙する。とたんに踊り子たちは今までの姿勢のまゝで石像のやうに凝立してしまふ。片脚を擡もたげ、片腕を突出したまゝの姿勢だ。同時に、あれほど躍動してゐた假面の表情が死んで固くなる。やがてクラリネットが一聲劉亮と鳴り、續いて太鼓の低音がドロドロと響くにつれて、不思議な話だがその假面は再び驚ろくべき活氣を帯びて、踊り子の手足と共に躍動する。輪舞がすむと、踊り子たちは徐々に踊りを續けつゝ圓陣を解く。その間にも双の長袖は絶えず手首を軸として上下

に翻へるのである。

大使徒グル・ツアングレットが八人の少年を引具して登場する。少年と云つて悪ければ大使徒の生れ替りであり大使徒の化身けしんである。大使徒の頭はチョコレット色だが、尋常外れた巨頭おほあたまが彼の叡知の具體化でもあらうか。續いて頭蓋骨しんがいこつを戴いた骸骨踊りの一團が登場する。腰には何れも虎と豹の毛皮をまき垂れ、化身の少年たちを左右に侍はべらせて毛氈の上に腰を下してゐるグル大使徒の面前で、踊り舞ふのである。

更に女性の假面をつけた一團が登場する。面の色は赤・白・黄・黒といろいろあるが、後に續いた七曜星の一團と一緒に舞ひ狂ふ。その次ぎに登場するのは、長い齒をむき三眼みつめをギョロつかせた妖怪の假面團である。化粧も色とりどりのやうだ、引續き素晴らしい化粧をした八頭の馬、三頭の犬四頭の羊が登場する——何れも今日の祭典の犠牲けいせいである。

殿しんがりを承はつて登場するのが一人のラマ、赤い布に包んだ小さな肖像畫を携へてゐる。この肖像をリンガと呼んでゐるが、或ひはリンガムかも知れない。それならばヒンヅウ教の奉ずる生殖器崇拜に違ひない。だとするとこれは信仰の敵だ。果して、長たらしい儀禮の終了後、ラマの奉持する男根の繪はズタズタに破り棄てられた。此の演技の意味は、取りも直さず『敵の抹殺』であり、往昔行はれた人間犠牲の明白なる證據である。西藏の國境に近い北ビルマ地方の山に住む原住民の間では、今日も尙ほ捕へた敵を犠牲けいせいにすると云ふ話を聞いたが、その方法も棍棒を以つて撲殺するとい



ふ驚くべき残忍なものださうだ。

最後の此の獸群の犠牲の一齣が、云はゞ此の宗教劇の骨子らしい。然し、その究極の意義が何であるかは、司祭者の僧院長自身にも説明がつかないやうである。ヘミス僧院の教養あるラマに訊いても、此の宗教劇と奇怪な舞踊とに何等特別の意義を置いてゐない。彼は、彼等の信奉する宗教を以つてしては、本来何一つやる事が無い筈だとまで力説してゐた。或ひはさうかも知れん。之等の演戲や舞踊が梵教の精靈説から移植されたことは疑ひの餘地がないのである。梵教は云ふまでもなく西藏の佛教に先行するものだつた。現代のラマはこれに對して他愛ない無邪氣な註釋を與へようと試みてゐる。『來世に於ける汝等の生命は、汝等によく似た恐ろしい精靈と出會ふであらう。然らば、現世に在る時に一度これと出會うて置かんには、來世にて再會するとももはや恐るゝこと無からん。』と。

治療術士と托鉢僧と乞食とが、醜怪な扮装に醜惡な假面をつけて登場する。黒ペンキを塗つたやうな假面に白い眼とあくどく赤い唇をもつた女形も登場する。續いて十六人の高名な司教が、また骸骨になつた四人の墓穴の王チュルタクが、それぞれ登場する。殿を成す者は、高名の司教、賢人ハシャングとその五人の門弟だ。

つまり端的に云へば、此の人間犠牲の大いなる祭典に登場するものは、天と地と下界であり、科學と使待と學徒と信徒なのである。云はゞこれは、豪奢と幻想と、醜怪な假面を混沌たる騒音と、か

ら成る一つの阿片の魔酔だつた。

もう一度、太鼓とその他の樂器が咆り狂ふ。場内整理の見張番たちが踊り始めることによつて、此の祭典は幕となる。

さて、此處へ來る途中で、ヘミス僧院のラマ達の非社交的性格を指摘して警告を典へた人々があつたが、私は僧院滞在二、三時間だつたけれども、尙且つ其處の無邪氣な善良なラマ達と親密な友情を取交し得たのである。

ラマ達は嫌な顔ひとつ見せず、堂内の寶物を懇切丁寧に參觀させてくれた。番人はまた重い大きな鍵を、疲勞の容子もなく幾度かたてつけの悪い鍵穴にぬきさししてくれた。或るラマはまた扉を開放し、帷幕を掲げて、私の撮影の便宜を計つてくれた。或ひは先に立つて屋上に登り、あちこちと適當の場所へ導びいて演戲の一々の場面や、精靈舞踊の假面を綿密に觀察させてもくれた。

最後に、ラマ達と一緒にお茶の饗應を受けた。お茶は、純正な西藏式の混成飲料で、鹽とバターを混じた肉汁の一種である。それを、ラマ達は自分の所有の唯一枚の碗に盛つて勧めてくれる。そして自分は大匙を使つて啜つたのである。凡ゆる意味での贅澤や安樂へは一顧だにしない人々だつた。一見舊知の如く親んだ一ラマの如きは、灰色の麥粉を茶碗に移して今云つた肉汁のやうな茶を注ぎ、小さな團子にまるめてジャムパを拵へて云つた。——『さあ、これを召上れ、且那！』



本堂の方で太鼓が唸りだし、銅羅がガラ／＼鳴り始めた。扉の隙間から覗くと、狭い禮拜堂の中で、先刻お茶の時に親しくなつた例の耳の飛び出したラマが、旒旗や舞踊假面や大小の神像の間に踞まつて、太鼓を叩いたり銅羅を打つたりしてゐる。片手で此の二つの樂器を叩きながら、片手では經本をめくつて祈禱の聖句を誦してゐるのだ。先刻とはうつて變つた嚴肅な、眞摯な顔つきである。それでもやはり、太鼓を叩きながら私の方をふり返つて笑ひかけることを忘れなかつた。

祈禱の太鼓が鳴り響くかぎり、ラマは誰一人として素通りする者はない。長い廻廊の壁のいたる所にラマたちは整列する。教師のラマ僧は、その前を通りすがりに、隻手をあげてラマ達の頭上を撫でて行く。僧院内には一齊に太鼓が殷々と鳴り響いてゐるのである。

禮拜堂の正面玄關にも太鼓が据ゑつけてある。これは酒樽よりも大きい太鼓である。が、その脇には更にもう一つ、六米位の高さの大太鼓がある。これには、動かせるやうな装置があり、動かす際には、一人のラマがその周圍を歩きつゝ渾身の力を奮つて體當りをやる。さうすると大太鼓はそる／＼と廻轉しつゝ、上部に取つけられた鐘鈴を鳴らすのだ。此の古い、極彩色の巨人太鼓の腹中には、聖なる祈禱の定則が幾百萬となく藏されてゐる。

世間にはよく、ラマの祈禱水車や祈禱旒旗に就いてあれこれ愚にもつかぬ臆説を捏上げる人があつたが、彼等の太鼓や旒旗が、祈禱の唯一の方法では斷じてないのだ。云はゞかやうな特殊の方式が

生れたのも、西藏の佛教徒たちの敬虔な努力と誠實の所産以外の何物でもない。

ヘミス修道院の驚嘆すべき祈禱水車は、廻廊の一隅に置かれてある。

ささやかな、人工的に取りつけられた瀧の落水を利用して、水車は夜となく晝となく廻轉する。

そして、いつも、不斷に、その廻轉に伴なつて小さな銀の鐘鈴がリンリンと鳴りひびく。それと相和して太鼓も亦た、ラマたちが寢靜まつた後も、あの『オム マニ パドメ フム』の聖句を唱へつゞけて止まないものである。



第三部

イ

ン

ド



## 樂園への門

ヒマラヤの最後の難所ツオイラ峠を横ぎつた頃から、暴風雪の包围を受けた。見る見る中に、山は暗澹たる不気味な威嚇的の野性に變貌し、生命あるものゝ一切を敵視し受けつけまいとする。一面の吹雪に掩はれ遮ぎられて、殆んどもう石塊道の隘路さへ見失ひがちになつた。つひ先刻まで見えてゐた淋しげな墓場も、今はもうあとかたもなく消えてゐる。

峠の絶頂から二三哩降つた頃から、屏風のやうな岩壁へきり込んだ道が急曲線を描いてゐる。我は暗中を摸索するやうな恰好で、此の岩鼻に近づいて行つた。ところが、その屏風を立てたやうな岩鼻を廻るが早いか、カッと、強烈な日光が、我々を嘲笑する如く、眞向からさして來たのである。足下には、大きな露の霑のやうに青々とした谷が覗いてゐる。對岸の斜面は見事な縦の林だつた。カシユミヤだな！ と沁々思ふ。數百年の昔、彼等の侏馬に鞭うつて此の峠を降つた蒙古の遊牧民たちもやはり、此の青一色に浮ぶ溪谷を俯瞰して『樂園に至る門』といふ感慨に打たれざるを得なかつたらう。

馬も慕しい故郷の匂ひを感じたか、今までの疲勞を忘れたやうに、易々として重い蹄を進め始めた。數日來、積荷を外してから身で曳いて來た白馬までが、再び元氣を取戻したやうである。白馬

よ、本當にお前の故郷の牧場へ來たのだ、山越えの過勞もぢきに一遍に回復しちまふぞ。——だが此の白馬に取つては、これが峠の難所をのり越えた最後の經驗となつたのだつた。

カシユミヤの首都スリナガルは、河水も水道もそして湖水の水も、ヒマラヤの氷河のお蔭でよく冷えてゐる。インドの炎暑に僻易したイギリス人の避暑地にはもつて來いの樂園である。彼等は此處に、數百の快適な家船ハウスボートを拵へて、水上の涼味を満喫してゐる。スリナガルは亦た、此の大陸きつての、狡猾鐵面皮な商人たちの故郷でもあつた。之等の商人の存在は、神が此の樂園に下し給うた文字通りのベストだつたと云へよう。

スリナガルでヒマラヤ降りの疲勞を休めた我々は、到着後二日目には既に、物凄い山路を走つてゐた。カシユミヤと北部インドを連絡する壯絶な自動車路の一つ、これはちよつと想像に餘るものだが、ラワルピンデへ、またベシヤワルへ通じてゐる大規模な國道なのである。

(\*ラワルピンデ、ベシヤワル、共に北部インドの都會名。ベシヤワルはアフガニスタンとの國境に近く、ラワルピンデは、それより東寄り、ほとと北部インドの中央に當り、スリナガルからは南西に當る。)

さあ、またしても今度は平原の熔鑪だ。

古都ベシヤワルの高い門をくゞつて、大きな荷を積んだ駱駝が陸續と現はれて來る。從來、インドでは見かけなかつた駱駝だ。ひどく大型で逞しく、毛も房々して、見なれない暗い色である。之



を指揮してゐる隊商たちも異國種らしく、まつ黒で妙にとげとげした固い顔つきだ。かういふ顔は北部ベルシヤで見た覚えがある。駱駝はざつと二百頭もあらうか、サマルカンドやブッハラから来たと云ふから、随分の長旅である。アフガニスタンの中央を貫走するヒンヅウクシ山脈を越えて、千年の歴史をもつ通商路を辿つて来たものだ。駱駝も、長身の主人たちと同じやうな好奇心に眼玉をギョロつかせて、賑やかな市場街を眺め廻してゐる。幾週間となく草も木もない岩山ばかり眺めて来たのであらう。小山のやうな積荷が、市場街の雑沓を擡んで、ゆらゆらと揺れて行く。丸太のやうにふとい駱駝のてうど太腿の邊が、街頭の一膳飯屋やどら、焼屋の屋臺をかすめてゐる。

隊商が行き過ぎると、今度は反対におそろしく倭小なインドの花婿姿が人目を惹く。どれもこれも十歳から十二歳で、それぞれにおめかしを凝らして群衆の中をまるでお伽噺の王子様のやうに威張つて歩いてゐる。これがカシユミヤの方だと、お婿さん達は樂隊つきの満艦飾のゴンドラか何かで川や湖水を練り廻すところであらう。今は結婚の季節なのである。占星師たちはさぞ幸運の星をつかんだことであらう。

ベシャワルの市場街はちと混雑が過ぎる。日光と色彩の氾濫だ花盛りの庭を映した流水のやうに目がちらちらする。腰まはりのほつそりとしたインド女がつましましやかに歩いてゐる。明るい緑やばら色の赤、さてはまつ白な紗の衣裳が彼女たちの華奢な曲線を描いて翻へつて行く。耳にも頸にも、手にも足首までも、飾りにつけた銀の金具がリンリンと鳴る。半裸の幼児が、母親たちの腰

に跨つて通る。どの手を見てもどの顔を見ても、花と形容し花と較べたいものばかりと云へよう。

キラリと紺碧の反射を投げる暗い大きな眸の奥には、數千年の古い民族の智慧と憂愁とが潜んでゐるのだ。柳腰もしなやかに身を廻すインドの乙女は、脚の長い歐羅巴の乙女によく似てゐる。頭に捲いた頭巾、紅唇を洩れて光る雪白の齒。黒衣をつけ覆面をして、重さうな裳裾を引いて行く回教徒の女の姿は暑さうだ。服装だけでもこんな多種多彩である。灼きつけるやうな日光の反映のせゐかも知れないが、まつたく夢のやうな風景だ。これが千年の昔から酷熱の日光の下に苦しみ續けて来た同じ人間であらうか。彼女たちの歩きつき、その眼、その笑ひ方、成人した者でさへ實に無邪氣なその笑顔——これはいづれも悠久永遠のものかも知れない。今、私の前を行き過ぎる半裸の幼児も、やはり千年の昔、同じ母の腰に跨がつて街頭を歩いたのではなからうか。千年の昔と變るところなく、彼女達は灼きつくやうな日射の下を歩いてゐる。此處では一切が不易なのだ。過去だの未來だの、今日だの明日だのといふ時の區別が無いのだ。

回教徒、一神教徒、印度教徒、百の階級と百の宗派が、雜然と入りまじつてゐる。眉間に彩色の記標を描いてゐる者が實に多い。サフラン赤で鼻根に點を描く者、こめかみに硫黄色の火焰を描く者、額の皺に褐色の蛇線を這はせる者——これ等はすべて、ヴィシユヌ、シヴァ、ラアマ、クリシユナ、デュルガ、ラクシユミ等の各宗派の主神の表徴である。だが、例へばラアマ神はヴィシユヌ神の變體化身したものであり、クリシユナは此の二つの主神の一面の現れに過ぎない。すべては梵



天の祖神に歸一されるのである。従つて、之等の額に描かれた象徴の裏に何があつたかを穿さくすることは愚かな話である。其處には、我々（歐羅巴人）には絶対に分りつこのない神々と思ふと生きてゐるのだ。

千年の前のものが現在に傳承され、それが將來へもそのまま傳承されるのだ。一つの時代は、古井戸の暗黒の底から吊瓶のやうに浮び上がるが、やがてまた同じ水底へ沈んでしまふ。ちやうど水を汲む吊瓶のやうに、いつも同じことを繰返してゐるのだ。さうして太陽が一切を平等に照らしつけてゐる如く、佛陀の光耀もまた、乞食と賤民の上にも等しく及んでゐるのである。

かつてのガンダラ王國の首府だつたペシャワルは、屋上まで人が溢れてゐる。隅から隅まで、糞と悪臭と汚物で埋まつてゐる。高い墻壁を前にして素晴らしく宏大な公園があり、その中央に幅の廣い公園町の並木道や大通り、涼しげな芝地、明るい別荘、農家の軒などが續いてゐる。此の地方の百萬長者の別荘地であることに疑ひないが、此の涼しげな芝地とかくはしい花垣とかこまれて住む者は、單に土地の百萬長者ばかりではなかつた。イギリスの總督や司令官、將校幹部、士官及び兵士が、多數此の勝地を占領してゐるのである。

一方には、完全に西部アメリカの大都會化した市街もある。けばけばしいブラック建てるやうな建物が軒を並べ、あらゆる贅澤品を賣る店、國際的な自動車工場、車庫、給油所、修理工場なども

完備してゐる。夜も晝も此處では、他のイギリス植民地と同様にベンジンの爆音がやかましい。夕方になれば、パリのブルヴァールの如く夢のやうに輝やき浮ぶのも此の市街である。

ペシャワルの博物館は、小型だが立派だつた。まるで御殿かお宮のやうである。此處には、シリ・パアロル、タクチ・バハイ、タキシラその他の古都のガンダラ古代の彫刻美術が、測り知れぬ價值と共に收められてゐるのだ。むろん、イギリスが千年の廢都の中から奪ひとつた世界的國寶である。一口に云へば、あの冷たい希臘古典の藝術が、インドの魂の愛惜と情熱とに抱かれ温められて、此處に花咲き甦へつたもの、と云つても過言ではあるまい。

思へば、北方インドのマハヤナと云はれる佛教は、此の千年のガンダラ王國の首府を基地として輝かしい勝利の進軍を、全インドへ、西藏へ、蒙古へ、支那へ——太平洋の沿岸へ、續けたのであつた。

## 大幹線路

イギリスが自慢の大幹線路は、此のペシャワルを發足地として、全北部インドを横斷しカルカッタまで通ずる、所謂一大通商路を形成してゐる。五大陸中で一番長い、最も古い大通商路に相違ない。歐羅巴で云つたらストックホルムからジブラルタルに至るまでの距離にもあたる。かつてキ



アップリングがこれを小説（キム）の中で歌つたが、今も相變らず、同じ不思議と、炎熱と色彩とをもつて、例の牛車で旅をするお姫様こそ勿論ぬないが、溢れる生活力を見せてゐる。牛車の代りに豪華な箱自動車に織るやうに疾走し、栗色の肌をした運轉手の頭布が目まぐるしく風にはためいてゐる。

我々も今、積めるだけ積んだ荷物に鐵の錆の如き砂塵を浴び、此の長い長い幹線路に自動車を飛ばさうといふのだ。操縦席にはシャルルがある。イスファハン以來私のお供をしてゐるあのアラビヤ青年である。用のない時は騾馬や驢馬の鞍に乗つて來た。ヒマラヤを越える時も私の従僕として一緒だつた。どこまででも、たとへ世界の果てまで、無給金で私のお供をする氣なのである。彼は今在る所が何處だか知つてゐない。たゞ父親に對する幼兒の盲目的な信頼をかけて、私の行先々に跟いて來るのだ。私の持つてゐる地圖、旅行の想定は、彼には解し得ざる一種の魔法だつたらう。現に、イスファハンを出て以來、どこをどう通つて來たか、彼には全然説明がつかないのである。だから、彼の話をきいた者は誰も彼も、此の正直なアラビヤ青年を嘘つきだと思ひこんでしまふ。

『出發だシャルル——カルカッタだぞ！』

『オオライ！』

シャルルはガスの支度を始める。カルカッタまで一千キロ米あらうが二千キロ米あらうが、そん

なことは、明日か明後日かと首を長くして來た彼には問題でなかつた。だから、放任して置かうものなら、インド北部を横斷する此の長い長い行程も砂塵に捲かれて何一つ見えやしないのである。

私が小さな竹の杖を用意してあるのもそれを防衛するためにはほかならない。これで此のアラビヤの手前勝手な石頭を、時折りコツリとやるのである。すると、彼は不承不承ながら、また二三哩位は普通のスピードに戻る。かういふ警告が、まづ一時間に四回位づつは與へられるのである。

此の道路はほんとに素晴らしい。自動車の運轉手はみんな大喜びである。寄木細工の床のやうに坦々たる道路が、二重三重に並んでゐる街路樹の間を縫つて、大抵は直線的に走つてゐる。

イギリスの軍用車が二臺、約八十キロ米位の時速で我々を追ひぬいた。と見るとシャルルが反射的にスピードをあげて追跡にかゝつた。私の、竹の杖がまた警告を發する。

遙かに數列の砂塵が捲いて來る。汚れきつた肌着一枚の男や子供によつて驅り立てられてゐる水牛の群れだ。ひよいひよいと、退ましい黒褐色の胴體や巨大な角などが窓を掠めて去る。此の水牛はどれもこれもひどく瘦せてゐる。骨の骨なぞまるでステッキのやうに、砂をかぶつた皮膚にとび出てゐた。こんなに瘦せてゐるから、ベシヤワルの屠殺場へ驅り出されるのであらう。この肉を食べる者は誰かといふと、そのほんの一部分だけが、乾肉としてビルマへ送られ、土着民たちの需要に應じてゐるのだ。

のんびりとした歩調で、インドの駱駝騎兵の一中隊が、新鮮な朝日を浴びて驚歩行進をやつてゐる。



る。駱駝は移動する塔の如く、高く、明るい黄色の皮膚が天鵝絨びろふとのやうによく手入れしてある。よく揃つてゐるので、みんな同じやうに見える。こんな美しい清潔な駱駝を見るのは初めてだつた。インド騎兵はカーキ服にレモン黄の頭布ケツバンを捲いてゐる。脛には脚絆を捲いてゐるが、足は裸足はだしである。手綱も武装も贅澤な位新しい品だ。御用商人達のお誂へ向きのよき鴨であらう。

此邊で再びインドス河に出會つた。我々は舊知を迎へる思ひで流れに見入つた。

思へば、あのラダックの山地で、来る日も来る日も此の河の下流の懸崖絶壁に沿うて馬を進めたのはもう二週日以上も前の事である。あれから此處まで、此の河はどんなに長い道を歩いて來た事であらうか、彼が迂回し、くゞりぬけてきた幾多の溪谷と幾多の山々とは、未かつて、歐羅巴人の足跡を印した例のないものばかりなのだ。こんな平地で見ると、河床がまるで砂地の三角洲デルタのやうだ。岩を噛み千仞の絶壁に渦まき返して奔騰したあの凄じさは既になく、幅數哩にも及ぶ滿々たる水を湛へて、或は硫黄色に或はサフラン紅色に悠々と地平の彼方へ消えて行く。カプウル河の暗緑の急湍もこれに合流してゐるのだが、今日はその影響の痕があまり目立たない。但し、雨季になると水深が俄然三十米メートルにも達するのだ。

アタックの古風な繪のやうな要塞の附近で、——此邊はよく英兵イギリス兵たちが犬掻泳ぎをやるどころだが、塔の如くに高い鐵道用の橋梁が水面に屹立してゐる。

(\*獨逸人はイギリス兵をトンミーと綽名してゐる。親昵の意味よりもつと軽い輕蔑の意味が含まれてゐるやうだ。)

我々の車が橋板をゴロゴロと鳴らして渡り始めたとき、頭上から猛烈な轟音が降つて來た。ラホルルベシヤワル間の急行列車である。鐵橋の兩端には番兵が立つてゐる。監視塔は鋼鐵の門を以つて固めて小型の要塞の如き觀がある。アタック要塞の直ぐ横、要塞の壘壁の足下の邊に、昔の石と木材で作つた橋梁の名残りが、水面からつき出てゐる。これがかつて、侵略の兵がインドへ突進した進撃路の跡である。河床の砂に果してどんなものが埋もれてゐるかは、たゞ神のみぞ知る、であらう。

貧弱な食堂で晝餐を攝る。亭主は回教徒の瘦せた小男だつたが、料理は素晴らしい。米飯に小羊の肉を入れたシチウの一種で、ピラオといふ此國獨得の料理だ。一人前僅かに十五ペンニヒ。(約七錢)

悒鬱な黒い眼と大きなエダヤ型の鼻のアフガニスタン商人が一人、我々と並んで藁の敷物の上に坐つてゐた。頭上には二羽の丸々とした鶯を入れた金網が吊してあり、それを交互に一羽づつ取出してはやさしく愛撫してゐた。

アタック村は小さな住宅が數戸とバラックに小型の禮拜堂らしいベルシヤ風の廢屋が一つと、たつたそれだけである。村中が總出で我々を見物してゐる。此の食堂に自動車クルマを停め、然かも此の亭主の調理する飯を食つた歐羅巴人は、我々をもつて嚙矢とするに違ひない。雪白の麻布を纏うた肥



つたインド人の一人の如きは、我々の傍へわざ／＼腰を下して、連れてゐる幼児に白人の珍客を見物させた。それが喜色を満面に湛へて、流暢な英語で喋るのである。自分が河川工事に勤務してゐること。政府は最近、『五河川の國』（ブニャブ州）に歴大な圍堤の建設を完成して、宏大な土地を生産地としたこと。その面積がイギリス本土に匹敵するほどもあること。そして、その圍堤に自分も協働してゐること、今日は休暇を貰つて遊んでゐること。等々を實に達者な英語で喋べるのだつた。

私は、うすつべらな匙で皿の中の肉片を拾ひながらそれに應答してゐた。『ではなんだね、君もその、百萬のインド同胞を新天地に移住させる事業に参畫してゐるわけだね……』

インド人の顔が明るくなつた。『いえいえ、さう直ぐといふわけには……』

『だつて君、今云つたぢやないか、イギリスの本土に匹敵する位も廣大だつて……』

『それやその位は大丈夫ありませんがね、さう簡單には参らぬ事情が御座いますんで……つまり新天地は大部分或る大きな會社に賣りますのでしてね。残りのまた大部分が、イギリスのために働いたイギリス人とインド人でも特に軍人と官吏に頒たれます。競賣に出るのは全體の十分の一位なもんで、然し貧しい農民には金がありませんからな。結局それも高利貸しの手に落ちて、一人一人の農民たちに貸貸するつてことに成りませうな。』

『だが、それにしてもだ、とにかくインド民衆の食糧増産にはなるぢやないかね？』

こゝで再び、肥つたインド人が笑つた。『なるほど増産にはなりますがね、インド人は貧乏でしてそれが買へないんで御座いますよ。新天地の穀物は主に輸出の目的で栽培されるのでさあ。第一耕地の灌漑用水料だつてちつとも安かないんでしてね。今度の工事におろした資本にしてからが七分の利子で御座いますからな。勿論イギリスの金でさあ。だから、水がべら棒に高價になるんですよ。この分だとブニャブの穀物は、さう易々と世界市場での太刀討ちは出來ないかと思ひますね。そのいゝ例が今もつてカラチに藏しまひぐされになつてゐる穀類でさ。ありや且那去年の收穫なんで御座いますよ。まあ、ミシシッピ流域に大洪水でも起るまでは、當分あれを損なしで賣る工夫は御座いますまいよ。インド人には、とてもそんな高いものは買へませんので、ねえ且那……』インド人の話はこれでお終ひだつたが、その笑顔は一層愛嬌を増してゐたのである。

彼の言葉の中には一言の批判もなかつた。非難の口吻が露ほどもなければ、その話し方の中にも烈しい氣魄のやうなものさへこれつばかしも感ぜられなかつた。——私は、今日までにこれと同様な態度を多くのインド人の中に見てきてゐる。恐らく彼の肚にも、『此の獨逸人はひよつとするとイギリスの廻し者かも知れんぞ。危ない危ない、迂濶なことを喋つたら立所に水路工事の働き口はおじやんになる……』といふ警戒心が潜んでゐたのではあるまいか。——

我々が、美しい非常に清潔なハサンアブダルのダック山莊バンガロオに自動車を停めたのは、その日の夕方にも大分暗くなつてからだつた。



此の山莊は嘆賞さるべき設備をもつてゐる。以前これは郵便物の中繼驛として不可缺の存在だつた。だが歐羅巴の旅行者を何處へ宿めるかがその時分から問題にされてゐたのである。ヒンヅウ教徒には、白人を宿泊させてはならぬといふ宗教上の掟があり、回教徒の家ではあまりにも貧しかつた。その後、鐵道が建設されて以來此の山莊はすっかり無視されてゐたが、近頃になつて遊覽の旅客を乗せた自動車、頻繁に此の山莊を訪れるやうになつたのである。土臺は崩れ、軒は傾いて、塵埃と風雨に荒されきつた此の古風な建物も、そんなわけで今は修理が行き届き、旅行者に何かと便利なやうに改善されてゐる。ことに、白日の灼熱下を旅する者に取つては、山莊の樹蔭に一時の休憩を取り得ることは此上ない恩恵でなければなるまい。

ダック山莊には寢具だけは無い。だから旅行者は、敷布、毛布、蚊帳の類を持参する必要がある。卓子と、時には甚だ便利な寢椅子位はある。特に脚の長いイギリス人のためには、繼足をつけたやつもある。だが、一番感心したのは大きな冷却樽でよく冷やされた貯水槽のある浴場だつた。私は永久に此の浴場を忘れないであらう。樽は赤い肌をした見たところ取柄もない素焼の粘土樽だが、弓形の床の周圍を、どつちへでも向くやうに設計してある。まことに、無名の一天才者の發明と云はなければなるまい。容赦ない灼熱の日光下にふるへ上つて來る者に取つて、——熱さでもふるへ上るものである。——油汗と砂とで瞼まで粘りついてしまつた旅行者に取つて、此の厚意は何んとも申しやうのない有難さだつた。

山莊の管理者は多く退役の兵士である。臙ろげながら、白人の好みは何處にあるかといふことを記憶してゐる老兵たちである。料理番も數人居て、どうやら口に合ふものを食べさせてくれる。だが、山莊を借りる料金は決して安いとは云へなかつた。大都會の中級ホテルの宿泊料に、ほど匹敵する。一棟の部屋數は三つ乃至四つ位で、時には六つから八つ位まであるものもあるが、原則として旅客の滞在時間は二十四時間を限度とする。新しい客があればその部屋をあげ渡さねばならない。だが、折善く此日は來客がごく少かつたので、我々はそのうのと、誰に妨げられる心配もなく手足を伸ばすことが出來た。

ダック山莊は公開のものだから、今日ではインド人も利用してゐる。醫師、各方面の技師、辯護士等、多方面にわたつての旅客があるやうだ。

これとは様式の異つた山莊が、此の地方には到る處に散在してゐる。所謂P・W・Dと呼ばれる大分官僚的な山莊だ。ほん譯すれば國立勤勞デパートメントとでも云はうか。非常にきちんとしたそれこそ塵一つ止めてゐないやうな設備である。此處の管理人は嚴選の上、相當の訓練が課せられる。かういふ山莊の利用者は、高位高官の政府員だけに限られてゐるので、我々一般の大衆はその分を辨へることが肝要であらう。

もつとも、一遍か二度位は我々も、イギリス人だけを客とする之等高級山莊の厄介になつた覚えはある。



道はさつきからも何時間となく、鋸の齒のやうな、荒廢しきつた沙漠地帯である。此邊一帶は何か劇しい酸類でもばら撒かれたやうな風景だ。立木はおるか草一本生えてゐない。鐵道線路でもなかつたら、どこに人間のゐる世界があるかと疑ふばかりだ。見渡すかぎりの荒地の上にあるものはたゞ、重く身動きもしない灼熱した鉛の融液のやうな熱氣ばかりだ。さすがにこんな風景には慣れきつてゐるシャルルも、まるで鬼婆にでも追はれたやうに、滅茶苦茶にテムボを上げてゐる。私も此の時ばかりは例の竹杖を持出さなかつた。

漸く、荒地に自然林がポツポツ見え始めて来る。貧しさうな部落がある。煙が小屋の屋根から昇つてゐる。いや昇つてゐるのではなくて、嫌々ながら追ひ立てられてゐるやうである。つまり、それほど、軒が傾き、屋根が崩れかゝつてゐるのだ。今度のインド旅行では、至る所にかやうな危険な、今にも崩落してしまひさうな小屋を見てきたが、その癖、實際に崩落するところを見た例は一遍もなかつた。インドの女たちが米を搗いてゐる。見るからに重さうな杵を、あゝして何時間となく石臼の中へ打ち落すのであらう。私も二米メートルもある杵を振つて見た覚えがあるが、實に骨の折れる労働だつた。ヒンヅウ教徒でも回教徒でも、昔からかういふ労働は女の役目なのである。何處へ行つても、朝から夕方まで日がな一日、杵を振つてゐる氣の毒な女が見られるのだ。米を搗くインド女性——それこそ此の國の旗章はたじろしでなければなるまい。

遊牧民の部落へ出る。ぼろぼろな天幕。半裸の、荒みきつた男女。大きな腹をした食べたい病の子供が我々の車を見るとバラ／＼と飛びだし、投げ與へた銅錢をかこんで砂埃を立てゝゐる。徐々に、此の民族の恐るべき貧困の正體に就いて私は考へ始めてゐた。永遠に青い大空と、神の光耀にも似た日光の下で、何が彼等を飢えさせてゐるのか……

タキシラを通る。紀元前二千年の昔に、すでに榮えてゐた都である。たゞ見る二十五平方メートルの廢都の跡は、あらゆる殘骸の置物だ。墓がある、寺がある。兩側に残つてゐる見窄まはらしい通商路も、かつては數千キロ米を走つて今は廢趾と化したカルカタへの移住民を運んだのである。タキシラの殘骸はいま密林ジャングルの中に頭を擡げてゐる。荒廢しきつた椰子林の間に在るのが、かつては美しいかつた庭園だ。一民族の衰亡、一國家の崩壞、そのことの起りは、野心だつたのである。

前進——綠色に掩はれた公園町、此處は同時にイギリス軍の駐屯地でもあつた。町の名はラワルピンデ、北インドに於ける最大の軍事據點である。暗色のま、新しい輸送車が何百と並んでゐる。飛行機で埋まつてゐる公園もある。インドがどれだけ莫大な販路を、イギリス工業界のために提供してゐるか、その正體が漸く分つて來たやうな氣がする。

燃ゆる鐵の熱氣に恐れを成して、イヘルムベシゴナの山莊で暫時の間、正午の休憩。——夜に入つて燈火と共に機關車の咆哮が轟いて來る。ラホオルだ！



自動車は宏大な公園を走つてゐる。何哩ともなく續いてゐる幅の廣い、美しい並木道だ。ペシャワルやラワルピンデに較べるとラホオルは大都會である。磨かれきつた舗装道路の上を何か知れぬ蟲が唸つて飛ぶ。栗色の肌の巡査が白い手套を振つてゐる。自動車を賣る店があると見え、雷鳴のやうな音を立て、自動車の一群が走り去つた。此の都會では、歐羅巴人なら自家用車位誰でも持つてゐる。貧乏少尉でも小商人でも銀行の書記でもみな持つてゐる。自動車工場も英・米・佛・伊の經營になるものが、ペシャワル、ラワルピンデを始めインドの凡ゆる大都會に進出して、實に素晴らしい發展を見せてゐるのだ。インドは歐米の自動車に征服されたといふ見方も出来るまでに、どんな片田舎にも今日は自動車が走つてゐる。五十キロ米行くと必ず給油所があり、比較的大きな都會には必ず、あらゆる工業を網羅した一環がある。

來る日も來る日も、ラホオルの市街は黄塵の絶える間がない。僅かに眞夜中から黎明近くまでの數時間だけ、塵埃が靜まる。これはラホオルの南方に在るタアル沙漠から、熱風が運んで來る砂である。カラチ驛を出た汽車は、どんなに密閉して見ても此の沙漠を通ると、車内に指の厚さ位の砂が溜つてしまふ。夕方から漸く此の熱風は靜まるが、歐羅巴人の自動車はその頭を待つて、まるで蜘蛛の子の散るやうに、郊外へ涼を入れに飛出す。

残念ながら此處には、ダックの山莊に類する場所がないのである。ネッダスホテルへ行つて見たら、フロックを着た紳士とけばけばしいおめかしをした淑女とが踊つてゐた。インド樂師のジャズ

バンドが、最近のアメリカの當り曲を演奏するので顔中汗だらけになつてゐる。外の廊下では、旦那衆のお供の栗色の肌をした召使たちが、恐る恐る御用の聲がかかるのを待つてゐる。貴婦人室の扉の前に跣まつてゐる頭布の男は、勤勉な仕立屋であらうか。箆縁賣り、刺繡賣り、肩掛賣り、なぞが扉から扉を叩き廻つてはその都度追放を喰つてゐる。それでも彼等は、新しい客を見つけたまゝでは執拗に網を張つて撓まないのだ。

キャンントン區と歐羅巴人區、もつと正しく云へばイギリス人區だが、此の地區の發展ぶりは實に目覺ましいものがある。數哩に及ぶ宏大な並木通りに自動車を走らせて見ると、イギリスの都市建設技師が來て大きな製圖臺をかこんでゐる。インドは土地が安い、といふ意味は無代同様だといふことである。此處にはイギリスの總督と軍司令官と官吏と將校とが住んでゐる。到る處の大都會で見るやうに、まるで御殿のやうな別荘に住み、夢のやうな庭園を擁してゐる。勿論、これ位のことには、英帝國の植民地政策に參畫してゐる官吏に取つて當然だと云ひ得るかも知れない。だがその別荘も御殿も、實はインド民衆の懐中から賄はれるのである。舗装道路も庭園も、芝生も噴水も、何から何までみんなさうである。

之に反して土着民の住む地區はどうかといふと、狭い不潔な街頭にはコレラその他の恐るべき疾病がウヨウヨと巢を作つてゐる。

かつてのラホオルは世界で最も古い都會の一つだつた。榮華を誇つたその世界の都が、沈淪の一



路を辿つて古い城壁の中に我から退却してしまつたのである。周囲の野原には、半ば頽廢に歸した回教寺院や先王累代の靈廟を始め、モグウル王國華かだつた頃の御苑の跡が、過ぎ去つた夢の如き富の餘映をほのぼのと偲ばせてゐる。雜草の茂るに委せた往昔の展望臺、潰へ去つた墓や崩壞した禮拜堂の建物。その壁には、色褪せた經典の箴言がペルシヤやアラビヤの能書家たちの筆蹟を不滅の美として僅かに止めてゐる。

ラホオルから幾哩も離れてないシャアダラといふ部落に、大モグウル王ヤアンギイルの菩提寺があるが、これはまだ可成りよく保存されてゐるやうだ。花樹の叢林、芝生の庭、それにマンゴや椰子の木などの茂つた宏壯な境内は、歩けば靴音が飴しさうに閑寂して、糸杉の並木道が一條走つてゐる。（\*糸杉は哀悼や死を象徴する）モグウル皇帝の靈廟は、かやうな馥郁たる花の香と憂愁につままれた境内のたゞ中に、寂然と立つてゐるのだ。（\*モグウル皇帝の建國は一五二六年で、建國の鼻祖バベル王はジンギス汗の家系テムウルの嫡流であると傳へられる）

おそらくこれが、私の見て來た限りではペルシヤ藝術の遺産中の最も美しい莊麗な傑作であらうと思ふ。あの有名な、アグラ市のタヂ・マハルの靈廟よりも、私は高く評價するものだ。大理石の壁の間から古い時代の匂ひが流れてゐるやうな氣がする。此の回教様式の美しい靈廟そのものが、青史に不滅の名を記録した英雄の大業を燦として反映してゐるかのやうに思へるのだ。

大いなる支配者であると共に濫費家でもあつたヤアンギイルの眠る大理石の棺には、高雅な若い

回教徒の扮装をした鳶が一羽、錫箔で描かれてゐるが、これはインドでは到る處で見受けられる構圖だ。案内の坊さんは勿論例のつかみ所のない回教僧だが、なか／＼の好男子である。それが石の棺の前でわけの分らない呪文のやうな文句を唱へ、經典の一節を獨語のやうに誦し、最後に神の十九の名を、勿論みんなではあるまいが並べ立てた。かういふものはすべて、アラビヤ文字で石の棺に刻みつけてあるのである。また、棺に眠るヤアンギイルの生涯の記録、例へば、諧謔の分らない男だつたとか、一日に七百人の謀叛人を突き殺させたとか、そんなことまで書いてある。そして一番終りにこんな文章があつた。『靈廟を建つる者はヤアンギイルの子ヤアンシヤア也。建設費用一百萬ルピイ、工事十年にして完成す』——案内僧の説明もこれで終り、今度は小さな盆を捧げて恭々しく頭をさげる。盆の上には十ルピイ紙幣も二三枚あつたが、私は昨日や今日の東洋旅行者ではないから、大理石に刻まれた鳶のやうに抜け目のない此の好男子に、微笑を投げつゝ一ルピイ銀貨を一枚さし出したのである。

舊ラホオルにはまだ此の外にも、見るべき遺跡がちよいちよいある。大モグウル帝國華かなりし頃を偲ぶに足る、云はゞ鍍金のはげた痕のやうなものだ。例へば、モグウル王の浴場といふのがあつた。彼は此處で、噴水から發散する香料入りの飛沫に疲勞を休め、寶石をちりばめた大理石のベンチに憩ひながら大臣たちと國政を議したといふ。『黄金作りの寺』といふ珍寶が、ゴミゴミした市場街の小高い段丘の上に残つてゐる。貧乏なナワブシャッド・ビカリ汗が、こんな素晴らしい玩具



のやうなお堂を建てたとき、國民はみな彼の立場に同情した。が、王妃の怒りを買つた時に既に王の運命は盡きてゐたのである。一夜、王妃は侍女たちを呼んで、王を此の上履ネウツスでうち殺せと命じ、穿くいてゐた上履を渡した。實際その夜の中に王は無残な變死をとげたといふ。現在残つてゐる此の『黄金寺』の一尺四方ばかりの敷地の中に、ピカリ汗かの歴史は埋まつてゐるのである。だが此の話にはまだ餘談がある。名醫フアギル・フルウツデンといふ者が萬能の靈藥を創製したのも此の黄金寺と因縁があつた。彼は黄金寺の敷地の土砂に、貴重な寶石の粉末を混まぜてこれに萬能の靈藥といふ名をつけ、盛んに賣り出した。まだある。今度は當時の有名な詩人クウスルといふのが登場して右の事件を材料に長詩を作り不朽の名を止めてゐる。これは『黄金の舌をもつ鸚鵡』といふ綽名をつけられた一流の詩人だつたと傳へられてゐる。

尙ほ前に云つたヤアンギル王が一般に謁見を仰せつける際に使用した廣間といふのも、昔の儘に残つてゐる。だが今日では例の英兵諸君トイソウの笑聲が弔こたし、正面の大階段には大砲が据ゑてある。また雪白の大理石で出來た皇帝用の露臺といふのも現存してゐる。大モグウル王は毎朝此處から謁見を賜はつたのださうだ。

割れ穴だらけの墻壁をめぐらした見窄らしい、何か哀愁に閉ざされたやうな建物がある。千八百三十九年に死んだランジット・シング王の墓だ。王の愛を一身にあつめた王妃マハラニは、王の屍體と共に、積上げられた薪の山にのぼり、その頭を我が膝の上に抱いて、共に荼毘に附された、と

傳へる。尙ほ此のほかにも十名ばかりの殉死者が傳へられてゐる。これが恰も、歐羅巴では既に最初の鐵道列車が走り始めてゐた頃の話なのだ。だが、そのやうな貞節無比の妃のために、どうして記念碑の一つも建てなかつたのであらうか。

世界最古の都ラホオルの華やかな面影はもう疾あに消え去つてしまつたが、その黄金時代に流行した俚言にこんなのがあつた。『イスファハンとシラスを合せてもラホオルの半分にも及ばない』——たしかに、ちよつと想像のつかない宏大なものであつたに相違ない。その宏大な世界最古の大都會も、その華やかさも、今は永遠に滅び去つた。イギリス皇帝の王冠を飾るあの燦たるコヒヌウルも實に此の國の國寶の一つだつたのである。

(\*コヒヌウルは『光の山』の意味でダイヤモンドである。元來は六百七十ニカラットもあつたと傳へられるが、現在、イギリスの帝冠を飾つてゐるのは百〇六カラットだ。)

舊都の市場街は大變な混雑である。此處では誰あつて、ヤアンギル王だのランジット・シング王の故事などを考へる者はない。それはもうとうに忘れさられた夢なのである。人生は流れ行く急湍の如く目まぐるしく、幸福も悲運も昨日のことはもう忘却の過去だ。市場街は、前に云つた皇后の侍女のために上履ネウツスで撲殺された氣の毒な王の、小さな菩提寺のすぐそばであるが、私が非常に美人の、お化粧も見事な娘を見つけたのも此市場街だつた。少女の店は小さく、商品も丈の低い安樂



椅子が一つあるきりだつた。

これが美しい娘の店のたゞ一つの商品なのである。娘は、隣の店で汗水たらして菓子を焼いてゐる主人と同じやうに、自分の手で編み上げたつた一個の商品によつて自活の資を稼がうとするのであらう。

その店から十歩と行かぬうちに、露地の奥で人だかりのしてゐるのを見た。行つて見ると、掘立小屋のやうな家の小さな廣縁の上に、奇妙な形のもが坐つてゐる。よく見ると人間だつた。おそろしく暗い色をした黒人のやうな顔で、それへまた象の皮のやうな皺がいつぱい刻まれてゐる男である。兩眼を閉じ、兩脚を組んで跏坐したところはちよつと瞑想する佛陀と云つた觀がある。着衣は、うすつぺらな安木綿をサフラン黄に染めたマント一枚。黒い髪の上には黄色い圓筒型の帽子。但し、頸には黄色の花で編んだ花の太い鎖がだらりとかけてある。膝の上にも花がある。取捲いてゐる人々は、固唾をのんで、ひどく畏こまつてゐる容子だ。

『此の人は聖者なんですよ』と、赤ん坊を抱へてゐるまだ若いインド人が教へてくれた。彼の説明によると、此處に花をもつて飾られてゐる男は數年前はラホオル屈指の商人で、此の市場街に立派な店を持つてゐた。ところが一日、何を思ひ立つたか急に店をたゞんでしまひ、完全に世俗の事一切から手をひいて、今後は乞食僧の生涯を送る肚を決めた。それ以來、彼の行くところにはいつも説教僧としての、時には應急の醫師としての、數々の善行が重ねられてゐる。彼の娘は此の間に女

醫となつてロンドンにゐる。——ざつとこんな話を聽かせた末、その若い父親は最後に下のやうに云つた。『昨日なんです、昨日、此の聖者が病氣になつて、久しぶりに此のラホオルへ戻つてきたのですよ。自分の故郷で死にたいと仰しやつてね。明日の午後には死ぬからといふお話でしたが、どうです、あの通り本當に死んでおいでですよ。』

私は信じられないので微笑した。『此の人が死んでると云ふんですかね、君は？』

『さうですとも、確かに死んでます、つひ二時間ばかり前に死んだのです。』

勿論私にも、あゝして頭を壁に凭せたまゝ動かないでゐるのは少し氣掛りだつた。が、もしかすると默想の三昧境に在るのぢやないか、とも考へられたのである。炭のやうに黒い顔のどこにも、死の影はなかつた。だが然し、やはり死んでゐた。宗法の掟が一人の聖者に求めた没我入神の三昧境にはひつて死んで行つたのである。私が安木綿のマントと見たのは生前の友人が羽織らせた屍衣だつた。花の頸飾と見たのは、婦人たちが手向けた追悼の花だつた。私はやうやく一切の事情がのみこめた。そこへ近隣の内儀さんらしい婦人たちが進み出て、指頭でもつたいなまゝに黄色の屍衣を撫で、携へた花を跏坐した足の前に捧げた。

最後に自動車が一臺、狭い露路にはひつて人波を押し分けた。炭のやうに黒い顔をした死者は、黄色の屍衣に掩はれて、頸にかゝつた花の鎖もそのまゝ、跏坐の姿勢で數名の友人に抱き上げられ車上に安置された。その際、彼の黒い顔ががっくりと垂れたのを見て、私はやうやく此の奇篤な老



人が死んでゐることをはつきり認めたとである。自動車は警笛を鳴らし、狭い露路を押分けて行つた。婦人が二三人、後を追つて車上に花を投げた。

此處を去つて再び市場街に戻ると、相變らず客の聲と賣聲で賑かである。聖者の死もなにも知らぬ顔である。例の美しい娘も先刻と同じやうに、店頭を歩きつ戻りつしてゐた。

### インドに於ける英國の政策

デリイ。此の都會は興奮してゐる。巢立ちをする蜜蜂の如くうるさい。政治的の會議が始つたのである。ヒンヅウ派が、回教派が、一神教派が、それぞれに會議を開いてゐる。何事が勃發したのか。昨日はマハトマ・ガンヂイが當地へ來てゐたのだが、不幸にして私はもう會へなかつた。友人の誰彼が、有無を云はせず私を引張つてさういふ集會場へ連れて行つた。ヤアミ・マスジット回教寺院の境内である。宏莊な境内、一段と高い段丘、その下では色とりどりの賣店が並んでゐる——私にとつて忘れることの出来ない光景だつた。大きな日よけの天幕が張られ、その下に、頭、頭、……ざつと五、六千もの人間が押合つてゐる。正面の寺院の表玄關前に一段高い演壇があるがひどく小さく見える。嚴そかな白髯と嚴そかな雪白の頭巾をつけた老人が一人、靜かなやゝ震へる聲で喋つてゐる。私たちも、ほんの一米四方ばかりの空席を見つけて、冷たい敷石の上に跣みこ

こんだ。今日は通譯が多勢ゐる。

老人は云ふ。『何もかもが詐欺であり瞞着である。インド民衆に取つての眼中の砂である。當日の觀測者が發表したことは全部眞實である。彼はかう書いてゐる、かゝる贈物は木馬以外の何物でもない、にも拘らずオオド・アーヴィング閣下は、これを目してインドのダアビイ賞を獲得し得べき名馬の如くに信じてゐるではないか！』

ははア、俗にシモン委員會と呼ぶあの法定委員會の問題だな、と私は頷いた。その委員達なら、ちやうど今頃はもう御用船でインドへ出發した筈である。目的は、現代のインド人に自治自主の行政權を許すに十分な能力があるか無いかを、視察調査するためであると傳へられる。此の委員會に出席する者は周知の如くイギリス人だけだつた。そして此の、所謂一黨一派に偏しない公平なイギリス流の編制方針が、俄然、全インド人を燃える興奮の中に驅り立てたのである。民衆の怒りは、壇上に立つてゐる白髯の老辯士の聲の中にも震へてゐた。インド人はたしかに優れた語り手だ、が恐らくはまだ立派な聞き手にまでは成つてゐないのであるまいか。五千人を超えた聽衆は、みな耳をそばだて、眼を壇上の白髯に集めて、一句一句の抑揚にまきこまれきつてゐる。

呟やき、不穩の空氣、個々に揚るやゝ低い叫び聲。興奮が、五千の聽衆を一つに繋ぎ合せた。彼等はいま、同じ肺によつて呼吸してゐる。同一の忿怒に輝く眼によつて眺め、同じ耳となつて次に來るべき音を、待ち構へてゐるのだ。天幕の中はむれ返つて暑い。今にも爆發しさうな空氣であ



る。壇上の辯士は次ぎ次ぎと交替する。そして、聴衆の興奮も刻一刻と昂まつて行く。

私たちは演壇に近い場所へ移つた、もつとはつきり聴きたかつたのである。と、唐突に一人の回教徒が起上つた、例の赤い房のついたトルコ帽を角張つた頭に載せて、握り拳を拵らへて私の方へ詰め寄つて来る。私を誘ひ出した友達がやつとの思ひで彼を取做した。此の回教徒は私をイギリス人と見たのである。そればかりか、私をイギリスの間諜だとつきり云つた。此の國民大會によくものめ、めと來たな、とまで罵しつた。勿論、此の中にはインド政府の間諜の一團がまじつてゐるには間違ひない。だがさういふ人達はほかの回教徒たちとまるで見分けがつかない筈だし、第一、一般の來會者と同じやうに興奮の眼を光らせてゐるのである。此の氣短かな亂暴者は、私の友人達の説明をきくとすつかり恐縮して粗忽を詫び、手の裏を返すやうにまるで古い知合ひのやうになつた。そして私を寺院内の辯士控へ所へ連れて行つて、最初に演壇に立つた白髯の老紳士に紹介してくれたりした。——やがて、私たちは會場を後にした。猛烈な暑さと會場内のあまりに緊張した空氣に居たゞまれなかつたのである。

此のデリイでは當時ヒンヅウ教徒派の方でも大會を開いてゐた。然し此の派は云はゞ正統派ともいふべきものだつたから、回教徒派との共同協力にあたまから受けつけないのである。集會も既に昨日の中に、一萬の青年ヒンヅウ教徒の『ヒンヅウ教徒の神聖なる權利は須く、回教徒派の煽動挑

發の前に防衛さるべきである』といふ決議を以つて終了してゐた。

『これはもう全然駄目です！』と、大會を機會に急に親しくなつた赤房のトルコ帽君がほき出すやうに云つた。彼はアフガニスタンの系統で、強い斷乎とした男で或る新聞の主筆をしてゐたが、三年程インドのイギリス監獄で暮した経験も持つてゐる。假にマアムット君と呼んで置かうと思ふ。

『ヒンヅウ派は此の煽動の黒幕が政府自身だといふことが考へられないんだ！』

我々の自動車はおそろしく廣いアスファルトの街道を驀らに走つてゐる。一體此處は何處なのだ。廣い此の舗装路には二哩も三哩も續いて、まだ移植したばかりの花樹が縁どつてゐる。どう考へてもこれは、途方もなく大きな出來たての都會に相違ない。肝腎の家並がないだけである。そのうち、向うの方に巨大な建物の集團が見えはじめた。

トルコ帽のマアムット君が、新設されたばかりの公園の中の、これも工事を終つたばかりらしい大きな建物を指さした。『あれがインドの諸侯たちの御殿でさ』と吐き捨てるやうに云ふ。『所謂獨立した王様の大公のと威張つてゐる癖に、實はイギリスの庇護を笠にきて領内の民衆を搾取してゐる奴等ですよ。その金で亂痴氣騒ぎをやつたりイギリスの總督や高位高官の連中を虎狩りに招待したりそんなことばかりやつてゐるんでさあ。まあ見てゐて下さい、政權がインド民衆の手に復歸した日には、こんな墮落しきつた濫費家の、賣國奴の一門一家は必ず消えちまひますから……』——私は吐の中で考へた。成程、これでは三年間も投獄される筈だ、と。



まつたくの話、新デリーの建設地域は途方もなく廣大なものだつた。大通りと並木道とを合算すると實に八十四哩といふ長さだ。既に完成した建物、半完成のもの、御殿風のもの、土臺工事、鐵材その他の建築資料の山。その間を業務用の自動車、鏡のやうに滑らかな舗装道の上を縦横に飛んでゐる。新しい英領インドの政治的中心が、今此處に成長しつゝあるのだ。イギリスは、こんな大規模な形式を興へることによつて、インド大陸に君臨せんとするイギリス主權の龐大な、誇大な妄想狂的な記念碑を打ち建てるつもりなのである。一、二の大官たちの官邸は既に建築に着手してゐる。我々は車を廻して、丁度落成に近づいてゐる御殿のやうな建物ばかりの一廓を通つて見た。『これが副王の宮殿ですよ』——續いて副王の高級補佐官の御殿、親衛軍司令官の御殿。そんなどれを見ても王侯の住むやうな建物ばかり續いた後には、今度は銀行、俱樂部、病院、美術館、記念碑などが建てられることだらう、インド人側からの協力者たちの住む地區も既に決定済みだつた。前の一廓に較べるとひどく見劣りがする。最後に大きな、圓柱の林立した廣間をからんでゐるまるい建物の前で、自動車が停つた。

マアムット君が車上で起上つた。『そしてこれが所謂インド國民の議會なのです！』と囁んでほき出すやうに云ふ。その顔はこみ上げる忿怒で青黒かつた。

マアムット君の忿激を理解し得ぬ者、さきの回教寺院での集會の興奮と、今日のインド民衆を燃え上らせてゐる未曾有の興奮とを理解し得ない者、それはインドの政治的國情をまるで知らない人である。

一億三千万ポンド・スタアリンクの軍費と百五十萬の兵、これが前の大戦の際に、インド民衆がイギリスへ提供した援助だつた。インドにとつて、實に容易ならぬ犠牲を承認した理由は二つあつた。一はインド民族性の誠實、二は勝利に誇つた獨逸軍の進出に對する不安——さうしてイギリスの宣傳は、萬一イギリスが敗戦に終つたらといふ不吉な前提をもつてインド民衆の此の不安、恐怖に拍車をかけた。然も他面にはまたイギリスの投げた好餌、『暴力と軍國主義に反抗せよ。民主主義を守れ。民族自主自決論』等の空手形に信頼をかけた。かういふ文字が、インド民衆の耳に恰も天來の笛の音の如く響いたのである。

インドは萬障を排して莫大な援助をイギリスのために提供した。インド兵は歐羅巴に、メソポタミヤにまたアフリカに戦ひ、傷き、斃れた。イギリスはインドからの戦費を以つてアメリカの砲彈を買つた。

かうしてイギリスが、インドの忠誠に必らず酬るであらうといふことはもう動かし得ない既定の事實になつた。千九百十七年、政府顧問モンタギウ氏はインドに、『大英帝國內に於ける自治政府』を公約した。これは聴きやうによつていろいろに解釋される言葉だが、翌十八年の正月には、ロイド・ジョージが重ねて、『自由と正義』とを愛する全インド民衆に呼びかけた。『獨逸の獨裁



者が目標とするところは實に、單なる歐羅巴の支配權だけではない。亞細亞に於てもそれを確保しようとしてゐるのだ。インドは須く亞細亞を救ふ鐵壁の要塞であらねばならない』と——いつたい此の獨逸の獨裁者つてのはどんな恐ろしい化物なんです。もしロイド・ジョージのいふ通りとすればデングス汗なぞ、鬼みたいなものぢやないですか。ところがです、此の聲明と前後して今度は大英帝國皇帝の名で我々インド民衆にかう呼びかけた。『英帝國の危急を救ふことはインド獨立の機會だ』と。『我々はそれを字義どほり信じてたんです……』と、マアムット君は大きな聲で云つてから、苦つぽく笑つた。『政治的なことにかけてはインドはほんたうに子供なんですよ！』

インドの政治情勢は相變らず不氣味な混沌を續けてゐる。——解決の鍵はなかなかつかめさうにもない。

對立反目してゐる黨派の妥協ぐらゐるではもはや救へさうにない形勢である。インド人は自主自治を要求してをり、此の要求は何處までも續けられる。イギリスはあくまでもそれを回避し、拒絶してゐるが、目下のところ、この方針も續くであらう。最近に起つた幾多の衝突も、やがて來るべき疾風怒濤を暗示するかすかな稲光りに過ぎまい。荒天を孕む暗雲は、漸く濃く低くインド平野の上を壓してゐるのだ。角力はこれから、東西の兩力士は今まさに睨み合つてゐるところである。片やイギリス關、營養のよいでつぷりした腹をつきだし、どこを風が吹くと云つた顔をしてゐるが、

その太鼓腹の中では抜目なく、打算や駈引をやりながら、寸分の隙もない構へだ。此方インド關、長い間の斷食ですつかり疲せ衰へてはゐるが、信念の手ひとつで押して行く體當り式の戦法はまさに神技に近い。彼が恃みとする武器はただ神の正義である。——

自動車は新デリイ街の舗裝道を走り戻つて再び舊デリイの古びた都門に出た。新デリイの建設こそ、イギリスが示した『斷じて讓歩せぬ』といふ決意の最も端的な意思表示である。何んとも云ひたいことを云へ、俺は俺の意思を貫徹する——といふ示威にほかならない。

マアムット君はいふ。『此の新デリイの建設には、二千萬乃至二千五百萬ポンドもつかつたんです。我々インド人は、自分等にはまつたく無要な此の新都のために、誰一人希望する者もない新都の建設のために、それだけの金を出させられた。近く峻工するイギリス教會だつて、やつぱり我々インド人の金で建てられたのですよ』

私達の會話はいつまでたつても、此の不幸な國の政治的情勢にこだはつてゐた。同行したこれはヒンヅウ教徒の一友人が思ひあまつたやうに呟く。『インド人は、前世でよほど悪い事をしたんだねきつと、今日の此の苦況は神罰なんだぜ……』

回教徒のマアムッド君が食つてかゝつた。『なんて狂人染みた云ひ方だ。だから君たちヒンヅウ派は、教へやうも改良しやうもない没分曉漢だつて云はれるんだ。そんなら、イギリスはどうなんだ？ どんな偉い徳があつて、こんな大儲けを授かつたのだ？ いつたい君は、英國史を讀んだか



ね？」

かう眞向まっこうから決めつけられても、ヒンヅウ派の友人は狼狽しなかつた。

「勿論イギリスにも、神罰を蒙むる時が必ずあると思ふね」

舊都デリイは、もと六個の町に分れてゐた。それが今は雜然と入り混つて、千年の塵芥が地層のやうに堆積してゐる。往昔かつて世界の富を集めた黄金時代の殘骸や破片は、此邊一帯の野や畑に埋まりインド盛衰の歴史も亦た、これ等殘壁頽礎の上に讀み取れるのである。

古びた、巨大なクツブ回教寺院の尖塔が二本、堂々と中空に聳え立つて、在りし日の寺院の構成の雄大だつた事を暗示してゐる。更にデリイの古い王城にいたつては、かつて人間の手が産んだ建築物中の最も完全な傑作と云つても過言でない。

此の世に樂園ありとせば、

それぞこれなれ、これぞそれなれ！

右は城門に刻まれたベルシヤ文字の銘だが、おそらくこれは誇張でも過言でもないだらう。

城門を一步はひれば、何人も完成された工藝美術の美しさに、呼吸も弾む思ひがする。冷徹、雄大、威力、莊麗にしてしかもこの愛らしさ。いつたい此のモグウル大王といふのはどんな偉い人だつたのだらうと、沁々考へさせられた。當時の建築家たちに、これほどの表現を成功せしめたモグウル王朝の時代といふものは、いつたいどれほどの権力と、知力とさうして美の鑑識力を持つてゐ

たのであらうか。之等の廣間、支柱、廻廊、柱頭、飾縁、等々のこんなにも美しい設計を描くことの出來た畫工は、どんな優れた眼の持主だつたのであらうか。モグウル王城の宮殿は、もとよりそちこちに破壊の痕はあるが今日も尙ほ、このやうに潑刺として三百年前の文化を傳へてゐる。壁も柱も廻廊もみな現實に生きてゐる。現代に通用せぬといふものは一つも無い。

公式の謁見のための廣間、個人用の應接室、その他いろいろの目的に應じた大小の部屋々々がはつきりと區別されてゐる。廻廊もそれぞれの私室も大理石の浴室も、悉く完備してゐる。

熱帯の氣候に向くやうに全體の設計が解放的だ。廣々とした圓天井、露臺、孔を穿つた壁、いづれも通風がきはめてよい。吹き入る風は大理石の壁や、圓柱の陰翳の多い廣間によつてほどよく冷やされ、しかも、庭園の花の匂ひをそのまま傳へるのである。

さらに約二米メートルの幅の水道が、泉水のやうに流れてゐる。底は大理石である。兩岸の壁には葉肋のやうな模様を刻んであるから、さしこむ光線がそこに分解屈折されて、本當は靜かに流れてゐる水が、いかにも深山幽谷の溪流に臨む如き感じを起させてゐる。

こんな設計だけ見ても、大モグウル王朝の偉さと善さが分るやうだ。モグウル帝國は亡び、その後をついだマアラツタ王朝も今は亡い。（\*マアラツタ、インドの民族名。マアラツテン人といふのが普通のやうである）今日此の古い王宮の城門にはイギリスの歩哨がある。いつかは知らぬが、イギリス兵が此の大モグウル王宮の哨戒を許されなくなる日が來るであらう。



デリイとムットラの中間に、有名な回教大學のあるアリガルウ町がある。私達は此處で自動車を停めた。ラダックへ行く途中で知合ひになつたジユスフといふ人を訪ねるためである。ちやうど彼が休暇を利用してレエの自宅へ歸る途中で出會つたのだが、その時の約束どほり、彼は此の大學町で私を待つてゐてくれた。敏捷な小柄の駱駝に跨がり、前の鞍にはまだほんの子供らしい妹を乗せてアリガルウから十六日間もかゝる故郷への旅を往復するのだといふ。

最初の豫定では、ほんの二、三時間も此の大學町を見物するつもりだつたが、たうとう一兩日滞留することゝなつた。朝は早くから晩おそくまで、明朗で健康で希望にみちた青年たちに取かこまれるのである。朝飯もまだ濟まぬうちから、三々伍々、我々の山莊パンガロオに集つて元氣なお喋りを始める若い學生たちだつた。

回教大學はオックスフォード大學を模倣して建てたものである。聽講室、學生の住宅、教授たちの別荘等々の建物だけで立派に一つの獨立した町が出来てゐる。これを建てたのはサイジャット・アマット汗で、資金募集に關するいろいろな苦心談や逸話が傳へられてゐる。現在、大講堂に掲揚されてゐる肖像は此のアマット汗である。學生の數は現在二千人以上で、その多くは各自に若い妻を連れて來てゐる。學生の出身地は、アフガニスタン、ブハラ、ペルシャ、メソポタミヤ、エジプト、アラビヤ等すこぶる廣汎で、それぞれに好む科學の知識を得るために、集つた青年たちである。此の大學で特に力を注いでゐるのは、アラビヤ語と文科サンスクリットと梵語だ。

大學總長は獨逸語を知つてゐる。ゲッチンゲン大學に留學したさうである。一朝ある朝、私の宿に見えた醫學部の眼科の教授なども、ベルリンで勉強した由で、非常に達者なベルリン辯だつた。回教人の社交好きには際限がない。毎日、二十名から三十名位の少壯教授や學生諸君と一緒に、學内の大きな食堂で食事を共にし、夜は夜で、教授連の誰かしらが私たちを招待してくれる。その如才のないこと、てきぱきとして頭のいゝこと、幾度會つても飽きることはない、新たな親しみを持たせる人達だつた。

かやうな生新潑刺とした教授や學生たちは、やがてそれぞれの故郷へ、アフガニスタンへペルシヤへアラビヤへ歸つたとき、それぞれの機能を活かして故國の民衆と協心努力することであらう。たしかに彼等の前途は明るい希望にみちてゐる。

だがインドはどうか？ インドの青年や學生達は何をなすべきであらうか。彼等の前途は、あまりにも希望がなさすぎた。インドが、現在の境遇に甘んじてゐられる所以のものは、あの東洋的な宿命論によること疑ひを容れないのである。

全人口の九十パーセントを占めるといふ無學文盲者が、ほんの些かでも國家と民族の將來を考へるやうになつたら、青年學徒や少壯教授たちはいくらでも、彼等のために書物を書き、パンフレットを書き得た筈だ。インドは一體何をしてゐるのか。——現在彼等はごく低い從屬的地位によつて辛くも餘命をつないでゐる。書記、下級官吏、電信技手の類だ。もつと上等な、収入も遙かに多



い地位は、とうの昔にイギリス人によつて獨占されてゐる。J・サンダランド博士といふ英人の調査によると、英人官吏總計八千人の得てゐる年收の總額が一千四百萬ポンドであるのに對し、インド人官吏總計三萬人の興へられる年收は總額三百萬ポンドであるといふ。だが、左様な俸給額の多寡は別としても、何よりいけないのは、企業的な創造的な才能を満足させ得る一切の位置、部面がインド人に對して封鎖されてゐる事實だ。稀にかうした垣を破つて、祖國インドのために働き得る能力をもつた勤勉力行の逸才が現れても、その才能は直ちにイギリスの政策に順應するやうに束縛され、彼が理想とするインド民族の福利増進とはおよそ逆の方向へ引張られてしまふのである。何んといふ暗澹たる前途であらう。

だが、今度の旅行で私の知合つたインド青年たちは、まだぬけきらぬ童顔に白い齒をほころばせて私の杞憂を笑つてゐる。彼等は、インドの將來に何等の希望のないことを見通し得ないのであらうか。いやさうではあるまい。恐らく彼等は、時の到るのを待たうと考へてゐるのだ。ではその時とは……？

私はいま、ゆくりなくも一人のインド人を思ひ浮べる。ラホオルの高等法院に勤務してゐる檢事だつた。ちやうど北カシュミヤの山中で、彼の天幕の中で美しい満月を仰ぎながら語り合つた時のことである。彼は撫然として自分の胸中の鬱屈を洩らした。

『私は少年時分から莫迦げた野心家でした。六年もイギリスへ留學する位なら、いつそ下級官吏で

甘んじてゐた方がよかつたと思ふ。その方がよつほど仕合せだつたと思ふのです。現在の地位や、職務を考へると、私は恥づかしくつて顔もあげられない思ひがします。何しろあなた、自分の祖國を桎梏くわきにつなぐやうな眞似ばかりやつてゐるイギリスのために、私といふ人間は働いてゐるのですから……』

まだ思ひ出すことがある。それは高等教育を受けた澤山の青年たちの就職難だつた。かういふ青年たちから幾度行く先々で愚痴をきかされたことだつたらう。彼等は、足を棒にして勤め口を探して歩く。其處には決して二十五歳位の彼等よりも若いイギリス人がゐて、冷たい眼で冷たい口調で答へるのだ。『お氣の毒ですが、あなた方の働き口はありません。……』

また、かつてカシュミヤの大公が、領内の或る秀才を選んで數年間イギリスに留學させ、地質學を研究させたことがある。カシュミヤ山中に埋藏されてゐる種々な貴重資源を調査させる目的だつた。だが、イギリスは、その事實を知ると直ちに、大公から推薦されたインド人の地質學者の名を抹殺して、別のイギリス人を選定したといふ事實もある。

こんな話をしてゐたらきりが無い。私は出發の支度をしてゐる運轉手に聲をかけた。

『オイ、シャリル、早くやれ。では諸君、御機嫌よう！』

若い青年學徒たちが大勢、自動車を取かこんで名残を惜しむ。明日への希望と確信とがその別離の挨拶の中にも溢れてゐるやうだ。



『僕たちはみなお國の獨逸へ勉強に参ります……』

そりや不可能だ、と私は肚の中で思つた。青年たちの言葉は決してお座なりのお世辭ではあるまい。だが、イギリスは、彼等青年學徒の卒業式をイギリスでなければ受けさせないのである。ごく専門的な特殊の科にかぎつて多少の例外はあるが、實際には非常にその例が尠い。思へば、ヴィクトリア女皇がインド人登用の途を開く旨を布告を以つて約束したのは千八百十七年のことだつた。爾來ほとんど一世紀に近い歲月が流れ去つたが、此の約束の實行された例をきかなかつた。後にリットン卿が洩らした言葉は、此の紛れもない事實の真相を、率直に肯定したものではなかつたらうか。曰く。

『余は、ヴィクトリア女皇のなされたお約束が一度も實現されなかつた事實を認めてゐる。然し、イギリスとしてはインド人の官吏登用を公然と否定するか、乃至はどこまでも欺き通すか、此の二つのどちらかを選ぶ必要に迫られたのだ。結局あまりほめた話ぢやない方を、選ぶよりほかなかつたのさ……』

かういふ肚のリットン卿が、なんと四年間もインド副王の位置に在つて、インド國政の實權を握つてゐたのである。

### 香具師と聖者

ムトラ市ではまつ黒な夜闇の中を一時間もウロウロしてしまつた。宿屋がどうしても見つからないのである。やうやくのことで、非常に高級な嚴肅な空氣のP・W・D山莊ベンガロキに一夜の宿を求めた。夜が明けると、何んのことだ。昨夜は家も垣もてんで見えなかつた町が、まるで奇蹟の如く日光の下にかざやいてゐるではないか。再び、別世界へ來た感が深い。ムトラはヒンヅウ派の都會として一流の大都會なのである。

水道ジュエムナへ出るための石段ガットがそちこちに光つてゐる。寺院や禮拜堂が細い尖つた屋根を林立させてゐる。その形式自身からして、男根リシガムにそっくりだ。狭い禮拜堂の通路に、活潑で陽氣なインド人の軍隊が密集してゐる。長い石段の上にもいつばい人が溢れてゐる。ヒンヅウ風の束髪をクリクリに剃つた頭にちよつぱり載せた男たちが、沐浴の後の栗色の肌を日光に乾してゐる。女や娘たちが多勢、しとやかな愛嬌のある物腰で水汲みに降りて行く。傍では子供たちが笑つたり騒いだりしてゐる。白や明色の衣類が洗濯される一方、ま新しい眩しいやうなものも水に漬けられてゐる。彼女達の容子のどこにも、露ほどの氣取もなく、と云つて善い風俗を些かでも棄みすやうな素振りそぶりもない。朝日に輝やき人の群がる此の水道へ降りる石段風景には、ほんたうに樂園パラダイスのやうな印象が溢れてゐる。



る。何といふ素朴質實な明るさであらう、何といふ朗かな敬虔つよまじさであらう。流れの中には大きな龜が群を成して泳いでゐる。岸にあがつて甲羅を乾してゐるものもある。これ等の大龜は聖龜として大切にされ、毎夕、市民から御馳走を興へられる不文律があるのだ。まことにムトラは神の平和と光耀にあふれた都會である。此處には不安も苦惱も影ひとつ見當らないやうである。

市場街に明色の肌をした稚牛わか牛が一頭、手入れの届いた毛並に、小錢や鐘鈴や胴衣を飾り立てゝ歩いてゐる。小さな可愛いくわい口先くちばしと、小さなまだしつかりしない蹄かかととがまつ黒に染めてある。こんな恰好かっこうで、群る市民の間を威張つてよく光る眼を左右に投げ乍ら歩き廻る仔牛の容子は、まるで王子様のやうだ。此の都會の平和と神聖とをそのまま反映してゐるやうに、明るい無邪氣な眼だつた。

禮拜堂の鐘がひびき出し、ヒンヅウ派の市民たちが、いそいそと私を追ひ越して行く。ヴィシユヌ、シヴァ、クリシユナ……と梵鐘は信徒を呼ぶのである。（\*ヴィシユヌ、シヴァ、クリシユナ、共にヒンヅウ教の主神である）豪勇の神クリシユナは、ゴバルタンの連峰を指一本で中空に持ち上げて牧羊の女たちをインドラの豪雨から救つてやつて以來、ヒンヅウ教徒たちの守護神と崇められてゐる。顔中を汗だくにした男たちが、黄色の花環を汗じみた襟首へぶらさげてゐる。大きな梵鐘にも同じ色の花が飾りつけてある。と不意に、『一ルピイですよ、旦那』といふ聲と一緒に私の襟首にも、黄色の花のぼつてりした花輪がぶらさがつてしまつた。『一ルピイだ！一ルピイだ！』梵鐘が殷々轟々と鳴る。クリシユナ様は此方こちだ此方こちだ！下の水道を見ると、甘美な無爲安逸の生活に酔ひ

しれた聖龜の群れが流れに浮いて泳いでゐる。萬物創造の神ヴィシユヌは、此の世に於ては魚として、龜として、野猪、獅子、神の化身ラアマ、豪傑クリシユナ、ゴオタマ・佛陀……等々として現はれたまふのである。（此邊はどうも婆羅門の狡智羅如たる觀がある）では、此の次に此の神が現はれる時にはどんな姿を取ることであらう？なぞと考へてゐる耳もとで、またぞろ例の『一ルピイだ、旦那』と浴びせられる。梵鐘の殷々轟々たる音。豪勇クリシユナ神。私はぼうつとなつて禮拜堂を遁げだした。天國の如きムトラの都は炎熱の日光の中にふやけてゐる。その下を廣い流れが悠々と流れさる。石段のあたりでは相變らず沐浴をする人が上下してゐる。

ムトラ市に龜が群棲する如く、プリンダバンの町には猿猴が多い。大變な群衆を成して墻壁でござれ、門でござれ、立木であれ禮拜堂であれ、お構ひなしに攀登る。プリンダバンはムトラの隣り町で、人の家よりも寺院や禮拜堂の方が多いと云はれる小さな巡禮地だ。そんな猿軍の中の一匹がひらりと、ざつと四メトル米を一跳びに飛び降りたと見る間に、我々に挨拶でもするやうな容子で自動車に飛乗り、我々の朝飯の籠を引搔廻してゐる。

プリンダバンは或る小さな王様の領内である。勿論初めから知つてゐたわけではないが、ちやうど我々が、ぼけた赤色の禮拜堂を見物してゐたとき、斷つて置くが、この禮拜堂は神の乳牛飼うしかひクリシユナを祀つたものであるが、そこへ一人の瘦身のヒンヅウ教徒が近づいて来て、町寧に會釋したのである。これが此の巡禮地を領土とする土侯ツツヂヤの王様の使者だつた。外人が到着したときいて、さ



つそく自分の御殿へ来てくれるやうにお願いに來たといふ。

赤いお堂の背後に廻ると、狭いが涼しさうな通路があり、其處に小さな開放しの廣間が一軒建つてゐた。これが、此の王様の政務を執る官房だつた。その建物の横にある門をくぐると即ち王様の御殿なのである。王様は大した上機嫌の容子でペタペタと出迎へに來られる。足は裸足だが、ゆつたりした鬘つきの半ズボン召され、上には少し花模様のある更紗の、明るい黄色の短衣をつけておゐるだつた。まるい頭はきれいに禿げ上り、うすくなつたヒンヅウ教徒特有の前髪がクル／＼と渦を捲いてゐる。之とは反對に、前の使者に立つた男は洋服を着用してゐた。これが王様の秘書官であり執事の首席であることは直きに分つた。靴も大分くたびれてはゐるが、ちゃんとはいてゐるし、洋服も少し長いが暗色の背廣である。王様は満悦の態であちこちと歩き廻り、ちよつとでも私達が立ち止ると直ぐに召使ひに合圖して、執務所のたつた一つしかない木の腰かけを持ち廻らせるのだつた。此の王様はまるつきり驥だと思へ、洋服の秘書が、忠實に、易々諾々と我々の發言や會話の内容を、石盤へ書き取つてゐる。やゝあつて、我々一行が一人もイギリス人でないと分ると、王様はひどく喜んぢまつていきなり肥つた腿をピシャリと叩き、ボンと雀躍を一番とんで見せ、満面を笑ひ顔にしてしまつた。

『ぢやみんな英人ぢやないんだな?』——『獨逸人です』——王様の少し狡い小つぽけな眼がキラリと光る。

『然らば獨逸は英國の支配を受けつゝありや?』と、今度は筆談である。私の答辯の筆記を、例の石盤で読み終つた此の王様は、口をポカンとあけたまゝ世界には英國と無關係に獨立してゐる國もあるのだ、といふ新發見をしたらしい。漸く納得のいつた顔に戻るとまた別の疑問が飛出した。

『然らばお訊ねするが、その獨逸國を支配して居る大王は何んと仰せらるゝや、して御年はどの位ぢやな?』——これの答辯は、今度はまるきり分らなかつた、獨逸國では國民が國家を支配してゐる——ふうむ、國民が、國家を……? 禿上つたまるつこい頭を傾げて考へてこんである。王様にはそんな事は有り得る筈がないと思はれたのである。

『然らば、獨逸國はカルカッタのやうに美しき所なりや?』——王様はだんだん興奮してきたやうだ。書記の手から石盤を引つたり、筆記した文字を掻き消しながら、直接私へ、ヒンヅウ語で浴びせてきた。——王様との會談はこんな風に際限なく続く。例の召使ひは幾度となく、木の腰掛けを擔いで私達の後を追ひ廻した。最後に王様が、秘書官を通じて私へ發した質問は『然らば卿がイギリス政府に於いて有する地位は何なりや?』といふのだつた。これに對して、『余はイギリス政府とは最小限の交渉も持つ者に非ず』と答へると、又しても王様は全身をゴム鞠のやうに丸くして雀躍し、膝を叩いて讚嘆するのだつた。恐らくかういふ答辯をなし得る人間に出會つたのは今日が初めてだつたに相違ない。王様はいきなり私の腕をつかんで、強引に引上げ、御殿の中へ引ずりこんだ。御殿の中と云つても、實は拱門の中へ引ずりこまれたのだが、此の容子を見て何と思つたか



衛兵が立直つて私の鼻先へピカピカした鋭剣をつきつけてきた。或ひは、王様の肚では自分の兵力を一應自慢したかつたのかも知れない。が、片手をあげて簡単に衛兵を追ひ拂つてから、ちよつと庭でも見てくれ、とお世辭を云つた。御殿の庭としては、遺憾ながらお粗末な狭いものだつた。

さて、我々は當然王様の賓客として食事の饗應にあづからなきやならない場合だが、残念ながら辭退することゝした。そしてずいぶん長いことかゝつて、漸く此の老王様のちと迷惑なほどの款待ぶりをふり放すことが出来たのである。王様は、裸足のまゝ、我々を送つて小路の角までついて來られた。だが其處から先きは一步も出なかつた。小路からそとへ出るといふことは、非常な例外の場合だけなのであると云ふ。

我々が自動車に乗つて後退しようとするところへ、最初の瘦せた秘書官が轉がるやうに駈けつけ菓子やパンのいづばいづめてある小さい籠を一つ私に押しつけた。『王様のお志です、近くまたお立寄り願ひたいと仰せられました』

アクラの町に到着した頃は、ちやうど例の結婚流行期が始まつてゐた。毎日のやうに、今日を晴れと着飾つた婿どの、騎乗姿が多勢の知己友人につき添はれて狭い市場街を通る。花嫁を連れに花嫁の家まで出かけるのである。花嫁の顔は絶対に見られない。兩側をびつちり帷幕でかこつた轎で運ばれるのだ。肥つた毛澤の美しい馬に跨つて行く婿どの、前に、時々白刃をひらめかした男が歩い

てゐる場合もある。これは歩きながら、簡単な劍舞の仕草をやつて見せるのである。然しこんなのはごく卑賤な身分の者の結婚の場合で、上層階級の結婚となると、太鼓をドロドロと叩きながら昇床を花嫁の家へ擔ぎこむのが多い。それには非常に見事な紙細工の人形や花環などがいづばいに飾つてあり、まるで小さな花園でも擔ぎだしたかと思はれるばかりである。

日中の暑氣が去つた夕暮れから宵にかけて、此のアクラの狹隘な市場街を漫然と歩いて見ると、何んとなく夢の世界のやうである。宵闇の迫る中に色とりどりの光彩が浮び、着飾つた群衆がほのかな灯影の中を押し合ひへし合ひしてゐる光景は、どこかに火事でも始まつたのかと怪しまれる位だつた。

アクラの古いが莊麗な王城の墻壁の下の、ジユムナ河の砂洲の上に、ヂトラコット王が行在所を設立なさつた。(ジユムナはジャムナとも云ひガンガ河の支流、全長一五〇〇キロ米)天幕やうごめく人影を岸に立つて眺めると、まるで年の市でも始まつたやうである。危つかしい急造の棧橋が一本、三角洲の島へ架け渡され、大きな龜の群れがのんびりと水中に遊んでゐるのも見える。

單純だが廣々とした天幕の中で、ヂトラコット王は謁見を賜はるのだ。拜謁する者は天幕の前方五歩の所で靴を脱ぎ、そのまゝ砂の上に坐らねばならない。王様を取りまいて多勢の女、男、子供たちが貧富の別なく恭しく居並んでゐる。王朝の廷臣は二十人あまりもあらうか、みな裸形で醜怪



な文身を描いたところはちよつとサアカスの花形役者のやうだ。頭から全身にかけてすつかり暗色の灰がなすりこんである。中に一人、足の裏から頸まで暗灰色の、逞しさうな小男が、黄色の粘土で頭髮をかためてゐた。眉間にはみな黄土で塗り上げた紋様があり、瞼や鼻根のあたりから、蛇の舌のやうな焰の色が描いてある。灰をかぶつたやうな頭髮は、大抵の場合大きな結節にむすんでゐるが、中には野獸のふり亂したたてがみのやうなものもあれば、更に、クリクリに剃上げて恰度腦天の邊に申譯ほどのヒンヅウ髻を押立てゝゐる者もあつた。こんな茶番狂言の舞臺のやうな容子をしてゐるのは、すべて聖者と崇められる豫言者か、乞食乃至は説教僧で、何れも地上的な物質慾の一切を抛棄した人々である。

彼等は各自の小さな天幕の中に小型の禮拜堂(佛壇)を備へてゐるが、そこに並べられた神佛の像たるや實に原始的だ。テカテカと光つた黒い球體に眼を描き、それへ人形の衣裳のやうなのを着せてある。時には石塊だけ二つ三つ置いてあるものもある。かういふ聖者の一人が雨傘を擴げて跼まり長い煙管を吸つてゐる。別の細面の美しい禁欲者型の聖者が、只一人凝然と瞑想の姿勢で胡坐してゐるところは、ちやうど暗色の石材で彫つた像のやうである。此の僧は夜は眠らぬこと、人とは會はぬこと、といふ誓願を立てゝゐると聞いた。

王様が私を迎へて挨拶した。變つた挨拶の仕方、脂肪ぶとりの半身を普通なら前にこゝめるところを反對に後へそり返る。そして掌を私の方へ向けるやうに両手を胸の前へ持ち上げるのであ

る。此の王様もやはり、側近に奉仕する人々と同じ聖者の一人で、隨伴する乞食僧たちの教師の立場に在つた。彼が、デトラコット大王の王冠を抛棄したのは十年も前である。爾來、デトラコットの御殿を出奔して二度と歸還しないのだ。人生の凡ゆる快樂はもとより、家族も財産も捨離し去つた彼がひたすらの願望は、自分の生涯を神に捧げることだつた。やはり全身に灰を塗りこんでゐるせぬか、顔だけは殆んどまづ白に見える。それだけに益々、長いさきの尖つた口髭が昔の瑞典のヒ首のやうに見えて、一層不氣味な感じがある。塵埃をかぶつた頭髮は高々と括りあげ、まるで頭巾のやうに大きな頭の上でグラグラしてゐる。

彼は、私を見るとちよつと説教を止め、何か用事かと訊ねた。その態度には、假に私がどのやうな難問を持ち出しても、喜んで最善の答へを與へてやるぞ、といつたやうな、慈父の如き優しさと思ひが溢れ、また嚴父の如き威嚴も兼ね備へてゐた。

私は此の偉大な聖者と二言三言話し合つてから、思ひきつてちよつとかまを掛けてみた。だが彼は依然として乗つて來ない。巧妙な辭禮を以つてうまく問題の核心を外してしまふ。それに私の見たところでは、英語も相當たつしやらしい。何等かの理由で知らないふりをしてゐるに違ひなかつた。或ひは此の國の言語を好かないのか、そのために殊更通譯などを使つて、自分の聰明さを民衆の前に誇示しようとしたのかも知れない。

『一體どんな衝動から遁世の決心をなさつたのです?』と、私が訊ねると彼は答へた。



『一切が空であることを悟つたのぢや。わしの過去の生涯といふものは、なべての人間と同じ一つの夢であつた。生活は、現在わしのやつてゐるやうなのが眞實であり、本當の生活なのぢやよ。』

『インドの政治上の問題など、御心配にはなりませんか？』  
聖者は微笑した、大きな顔いつばいにこびり着いてゐる白い埃の層に溝をこしらへて笑ふのである。『政治問題などは末の末さ、一顧の價値もない。』

『でも歐羅巴を御存じでせう？ あゝして間斷なしに戦争が起つてゐる原因を何うお考へになりませぬ？』と、私は此處で彼の歐羅巴觀を知りたいと思つた。

聖者は、口をゆがめ、輕蔑しきつた口吻で答へる。『歐羅巴人は眞理から遠ざかつてをる。彼等は何もはや、何が眞理で何が虚偽だか知らないのぢや。彼等が眞理へ歸り着かぬかぎり、お互ひの鬭争は絶えまいな。』

『ではその眞理とは？』

『神に於ける生活ぢやよ、神へ身も心も獻げつくして、私慾や地上の喜びなどを悉く捨離することぢや。』

私の發した甚だ拙劣な質問に至つては、彼ばかりでなく、彼の従者たちまでから、大笑ひに笑殺されて終つた。愚問といふのはほかでもない。彼が何年かの後には再び領國へ歸還して、國政を執る時があるとは考へないか、といふ意味のことだつたのである。

そこへだしぬけにドンチャン騒ぎが起つた。小さな樂隊が活動を開始したのである。或る金持ちのヒンヅウ教徒が、聖者とその一行を饗應するために、樂隊をお迎へによこしたのだつた。

これを知つて眞先に、まるで曲藝師の輕業の如く一米も跳り上つたのが、小柄だが逞しさうな頭が粘土のやうに黄色い。これも聖者の一人である。跳り上つたはずみに、細い玩具のやうな太刀がぶらぶらしてゐる。跳り上りながらぐるりと向きを変へたと思ふと、砂の中へ人蔘を一本つき込み、重々しい歩調で二三歩進み出てから、再び今の跳躍を演じ始めた。だが今度は、跳び上りながら、縮めた兩脚の下をさつと、例の玩具のやうな刀で横に薙いだ。見ると今つき立てた人蔘が、まるで手品の如き早業でうすい一片をきり取られてゐる。さつさつさつとこの跳躍をくり返すごとに人蔘はその都度一片一片ときり取られ、最後はもう小指位の根を残すだけとなつた。ところが、此のちつぽけな根もまた、跳躍の早業と一緒に見事に眞二つに割られたのである。

こんな呆氣に取られるやうな早業が反復されてゐる間に、此の聖者團の團長格なる王様の聖者は悠々と兩手や胸に油を塗り、その上から灰をなすりこんでゐた。それから眉間の宗派を表はす紋様を丁寧に筆太に描き直し、長い八字髭をびんと張つて、これで支度は終りである。

どつしりと重さうな絹布に豪華な刺繡をした王旗が十二腕、高々と先頭に押立てられ、いよいよ出發となる。灰と埃にまみれはしてもかつての王様の品位と威儀はそのまゝ、がつしりした少し脂



肪過多の傾向がある體軀をのつし、のつしと動かして行く。ジユムナ河の棧橋を渡ると、河岸に待ち構へてゐた四輪馬車ドロシユケに乗る。車中には今日の饗應の主人役の、ヒンヅウ派の豪商が待つてゐるのである。聖者團の行進が、狭い市場街を練つて行く。先頭には例の小柄ながら逞しい劍舞師の聖者が細い腰帶一本の裸姿はだかすがたで、太刀を片手に、粘土色の頭をふり立てゝ行く。これに續いて、一財産はありさうな豪華な王侯旗十二旒。隨臣扈從と昔なら云ふところだが、今は何れも埃と灰に塗れた肌へ、文身いれずみのやうな醜怪な紋様を描いた道化師か農民風の乞食僧ばかりざつと二三十人。一番終ひが四輪馬車ドロシユケ、贅澤な暗着をつけて端然と畏つてゐる豪商の前に、油と灰で全身を塗りまぶしたかつての王様マハラヂヤがゐる。彼は、やゝ得意の面持で、兩手兩足を、豪商のおし載くに委せ、接吻するの委せてゐた。

ラム！ ラム！ と群衆が一齊に歡聲を揚げて四輪馬車を送迎してゐる。

私はふと、もうひとつ訊いて見たいことがあつたのを思ひ出し、通譯の男を介して、王様マハラヂヤにはお子様があるか否かと通じてもらつた。通譯は言下に馬車に走り寄り、狭い市場街にひゞき渡るやうな大聲で呶鳴つた。『聖王様バブツ、お子様がお有りかとあの旦那サヒバが訊いておいでです』——だがこの聲も王様には聽こえなかつたらしい。

直きに此の莫迦げた行列は都門の向うへ消えて行つた。

あの王様マハラヂヤは或ひは一種の奇人かも知れない、香具師ヤシシの名で呼ばれる詐欺漢かとも思ふが、それと

もまた眞實の一路を辿る敬虔な聖者だつたのか、これは神のみぞ知る祕密であらう。

此の王様マハラヂヤの天幕から二百歩も距つてゐない同じ河岸に、半ば朽ちかけた達磨舟だるまぶねが二隻もやつてゐる。その二隻の扁舟ひらぶねの間にこれもごく粗末な、丸棒とブリキの破片などで拵へた名ばかりの筏いかだがあり、この上に、ざつと十年も前から、今の一團とは全然別種の型の聖者サツツが一人、隱栖してゐるのだつた。誰一人彼の名を知る者もなく、どこから來たのかもまるきり分らないのである。

十年の間、此の無名僧は筏を離れなかつた。毎朝、日の出を拜みながら流れに沐浴する以外は、一步も筏の上を離れなかつたのである。また、十年の間、彼がものを云ふのを聞いた例がないといふ。完全な徹底的な無言まやうの行を積んでゐるのであらう。食べる物は果實、飲み物はジユムナ河の水と限られてゐた。古びた雜囊が一個、木炭を入れた壺が一個——これがざつと三平方米ほどもある隱栖の住居の、家具の全部だつた。彼の眼は何物をも追はない、アクラ市の町の容子も知らなければ、河に泛ぶボオトも、岸に往來する人間も、決して見ようとはしない。彼が眼に映るものはたゞ粘土色に流れてゐる水ばかりである。流水は、此の孤獨の聖者サツツが眠りにつくとき、やさしく彼のほてつた足を洗ひ冷やすのだつた。

私が此の僧を訪ねたとき、ちやうど小さな讀み古らしい書物を手にして黙禱してゐるところだつた。時々彼のくぼんだ眼が、高い空に向けられる。ひゞく華奢わかしやな、そして美しい手をしてゐる。まだ若いやうだ、青春の健康を全身に湛へてゐる。すつかり裸體はだかなのだ。肌は暗褐色にやけ、頭髮は



長くもちや／＼に亂れてゐる。

聖僧は勿論、言葉を發しない。だが筆と紙による筆談なら差支へなかつた。私は、二三の質問をインド原住民語で書かせてさし出したが、すぐに突返された。

同行したアクラ大學の學生が、『此の人は梵語<sup>サンスクリット</sup>だけしか通じないんです、わざとさうしてゐるのかも知れませんがね。』と云つて、自分で梵語に書き直してくれた。だが、聖僧のこれに對する答へは非常に曖昧な、混亂したものだつた。その結論には、『ムトラ市に梵語の學校を建てるのが自分の希望である。だから自分は、神によつて此の計畫を翼賛してくれる人物が遣はされるまでは、此の筏の上を去らない覺悟だ！』とある。

『然らば、更に今後十年でも此の生活を続けねばならぬとしたなら何んとなさる？』  
『十年が何んです？』

何處の都會でもどんな田舎道でも、かういふ聖者<sup>サツツ</sup>に出會はない場所はない。彼等はみな、浮世を捨離しそれぞれに聖い誓<sup>まじ</sup>を立てゝゐるのだ。夏季にはひると大集團を成して比較的清涼なカシュミヤ地方へ移る。私は、ラダックの高原地帯や西藏國境などでも、さういふ聖者<sup>サツツ</sup>の人々と出會つた覺えがある。ペシャワル地方で見る聖者は、色とりどりのぼろきれなどを織ぎ合した寛衣を着けてゐるが、この寛衣が佛教の僧達の着衣の最も古い形式なのである。勿論、その中には見るからに醜怪

な奇想天外な扮装の者もある。第一、かういふ聖者たちの多くが、歐羅巴の傘をさしてゐる恰好からして既に滑稽だつた。大部分は裸體で、例の灰を塗つた肌をまる出しに、殺人的なインドの日光の直射する中を、托鉢を持つて歩いてゐる。また、中には特別に奇篤な僧もあつて、酷熱の日光だけでは足れりとせず、身近の左右に焚火を燃やして、修道に努めてゐるのも見受けることがあつた。數年にわたつて人家に宿つたことが一度もないといふのがあつた。墓地へ行つて死人の傍で眠るのださうである。

勿論、かういふ聖者や托鉢僧の中には、人の好意によつて我が怠惰の空腹を満たさうとする香具師に類する者も尠くないらしい。が、大多數はやはり、敬虔な求道の士で、高い宗教的理想の下に生活してゐるのである。現實の一切を捨離して、只管遁世の生活を求めようとするかゝる強固な意志力の發現がなぜこんなにも多いのか、と考へると、其處に何等かの神祕的の力が、今日も尙ほインド民族の中に生きてゐる、としか考へられない。

幻術師<sup>マジック</sup>と呼ばれる聖者は、インドでは年々減退する一方である。私の今度の旅行中でもたつた一遍、それも人傳<sup>ヒトコト</sup>にまた聞きしたただけだつた。カルカッタで見たのださうだが、其處に現れた幻術師は一、米位の廣さの穴を掘らせ、深さは足が埋まる位にして、其の穴へ燃えさかつてゐる薪を並べる。その上を誰にでも通らせるのだが、その幻術師が呪文を唄つてゐる間は、燃えさかる薪の上を誰が渡つても微傷だに受けなかつたさうである。噂が立つたため高等警察まで出張して檢閲したが



事實、その檢閲委員たちの眼前で右の通りのことが行はれたので、詐欺や騙の實證を掴むことは不可能だつたといふ。

後に此の奇妙な事件に就いて或る英人の教師に話したら、教師は笑ひもせず云つた。

『そいつは本當です、新聞の報道も嘘ぢやないんです。現に私がこの幻術師を知つてますよ。あの男がガヤにゐた時です。私もその薪の燃えてゐる上を裸足で渡りました。連れて行つた生徒もみんな實驗済みですよ。』

『では君、此の現象をどう説明するね？』

『説明つて？ ありやあなた仕掛があるんです、それ以外の何物でもありませんよ。』  
と、教師の説明もまた甚だ簡單なものだつた。――

アクラの町には、有名な唯一無二と云つてもよい珍しい記念碑がある。もと、愛する妻を記念して建てたものであるが、今日ではそれ以上に有名になつてゐる。インド女性の、いや東洋の女性の、すべてを網羅した記念碑と云つても過言ではないだらう。正體を明かすと、例のシャア・ジャハンが、鐘愛の妃ムムタヂマハルを追慕して建てた有名な靈廟がそれだ。

今日ではもう傳説のやうな韻をもつてゐるが、悲劇の歴史は下の如くである。ジャハン王の大理石御殿は、あの聖龜が群棲するジュムナ河畔に在つた。晝は諸民に謁見し、隨臣の大臣たちと政務

を談じ、歴史を読み、音楽を聴き、密畫を眺め、夕には冷涼な庭内の段丘を逍遙して、お抱への道化師の諧謔や諷刺に腹を抱へて笑つた。シャア・ジャハンはまことに幸福な殿様だつたのである。

もう以上の望みはなかつた。天帝の恩寵によつて迎へた妃アリマンド・バナは、ムムタヂマハル（宮廷第一の美といふ位の意味）と呼ばれる程の美人だつた。此の美妃との間に擧げた子寶が十三人。

當時諸王侯きつての果報者は此の一人一人と羨望の的だつた。が、好事魔多し、愛妃は第十四の赤ん坊を産落すと同時に他界したのである。

シャア・ジャハンの幸福は一瞬にして去つた。爾來彼は一切の女性を卸ける一方、ただひたすらに愛妃ムムタヂマハルを、偲ぶにふさはしい墓を建てることに専心したのである。愛妃の靈廟は十二年の歳月を費やして漸く出来上つた。その間シャア・ジャハンは、御殿の露臺に立つて竣功の日を待ちわびた。延人員二萬の工夫と二千五百萬乃至三千萬マルクの費用をつかつて、漸く二十二年後に出来上つたのである。やがて、シャア・ジャハンが自分の死期を豫知したとき、彼は臣下に命じて身分の身體を露臺の上へ運ばせ、心ゆくばかり、亡き愛妃を祀つた靈廟タヂマハルを見守つたと傳へられる。

ジャハン王の晩年は非常に貧乏だつた。今云つたやうな莫大な建築費を愛妃の墓に投じたところへ、今度は自分自身の墓も建て始めてゐたのである。その計畫は、雪白の大理石で輝いてゐるタヂマハルに對ひ合つた敷地へ、全部黒大理石を以つて建てる豫定だつた。此の基礎工事は今日でも殘



つてゐるが、此の計畫を知つて、財産の蕩盡するのを惧れた彼の後嗣の王子は、直ちに老衰の父王を、宮殿内の小さな大理石の一室に幽閉してしまつた。憐れなシャア・ジャハンの晩年は此處に始まつたのである。

彼の遺骸は、後嗣の王の計らひで、ムムタヂマハルの靈廟と並んで祀られた。

今日、此のタヂマハル廟はインド旅行者の巡禮地のやうになつてゐる。イギリス人に訊くと、口を揃へて、タヂマハルを見るなら月明の晩にしる、などといふ。遊覽客たちはムムタヂマハル妃の眞實を象徴する雪白純潔の大理石に手を觸れたり、美しい色の石を刻んだ花飾りを撫でたりする。また、案内人の聲が、高く中空に秀でた伽藍の穹窿に響くのを興じ合つたりする。だがこの位はまだいゝとして、許せないのは此の靈廟の監視人の無耻厚顔な、まるで商人の如き態度だ。彼等はいかにしてより多くの金を遊覽の旅行者から絞り取らうかとそればかり覘つてゐる。氣の毒なシャア・ジャハン。

最後に、ムムタヂマハルの靈廟は、ペルシヤ——インドの、建築工藝の一傑作であること疑ひない。が然し、私をして云はせれば餘りにも古典的に過ぎて、殆んど古典建築の模倣の如く見えるのが、どうかと思ふのである。

## インドの心臓

國道の上で、我々の進む方向に塵埃の雲が轉つて行く。その動きがなかなか迅速である。追着いて見ると塵埃の濛々たる中から、三人の托鉢僧らしいのが現れた。正午の殺人的な日光の直射する下を、平氣で歩いてゐるのである。一人は大型の黄色い日傘を擔ぎ、一人は瓢箪を肩にぶらさげてゐるが、三番目のは細い旅杖を一本握つてゐるきりだ。三人とも丸裸で、まるで路上の砂塵のやうな肌をさらしながら目立つて道を急いでゐる。すれ違ふ巡禮者の數が殖えて来る。みんな安物のサフラン黄の寛衣をつけ、手に手に、新しいチカチカするやうな眞鍮の桶を抱へてゐる。これには故郷へお土産の、ガンジス河の聖水がはひつてゐるのである。遠く硫黄色にきらめく大氣の下に、都會の影像が微かに現れてきた。今日の我々の目標ベナレスである。

ベナレス市へ足を踏入れて先づ覺えるものは何とも云ひ知らぬ興奮焦燥の感であらう。これは、狹隘な市場街の極端な混亂と、無數に建ち並ぶ禮拜堂や寺院の鐘聲と、餘りにも狂信的な宗教の雰圍氣などの特別異常な刺戟によつて、一種熱病みたいなものが此方にのり移るせゐるだと思ふ。ベナレスは不安焦燥の都なのである。寺々、禮拜堂などの銅羅や鏡鉢が朝は黎明から夜は深更までも鳴り轟く。来る日も来る日も、街上といふ街上は手に長い杖を曳き、黄色の寛衣を纏うた巡禮の旅人



が列を成してゐる。何れも、ありとあらゆるヒンヅウ諸派の信者であり、その眉間には黄また赤の繪具で、およそ考へられる限りの表徴が描きだされてゐる。點を幾つか描いたもの、横線を引いたもの、垂直の點線、太い條、細い條、波狀の線、焰の形。聖都ベナレスに杖を曳く巡禮者の數は年々百萬を超へると聞くが、此處に住む三萬の娑羅門は、これ等の巡禮者が投ずる一人當り數枚の銅錢によつて生活してゐるとも云へるであらう。

巡禮たちは此の都の周圍を巡禮しなければならぬ。それだけでも六日間はかゝり、然も忙しいのだ。大小數百の禮拜堂や寺院や厨子堂がある。これが悉く、何百里離れたヒンヅウ派の僻村までその名のひゞいてゐるものばかりだから、一つ禮拜を怠つてもいけないのである。このほかにまだ、此の聖地に安住してゐる無數の神と女神があり、これにも一々、敬意を表して歩かねばならない。生殖豐穰の神として祀られてゐる男根像には水をかけ、祭壇へは花を捧げ、またペストその他の惡疫の媒體となる夥たゞしい猿群にも御馳走を振舞つてやらねばならない。それから娑羅門の僧たちが、惡魔拂ひの孔雀扇でお祓ひをしてくれるからそれにも、若干のお賽錢を椰子の實の殻のお皿へ入れねばならず、さてはヴィシヌ、シヴァ、ガネシュ、ハヌマン、猿の神、萬病を療す神、バラヒン・デヴィ、十本腕のデュルガ、クリシュナ等々の諸神を拜禮して廻るうち、憐れな巡禮たちはたゞもう神佛を畏れかしこむ一心で生きた心地もなく、銅羅や鐘鈴の狂燥音にのぼせ上つた眼を硝子玉のやうに空虚に据ゑたまゝ、金びかづくりのお堂のうす暗い中を、夢遊病者の如く歩けば

かりなのである。

ベナレスは、二億五千萬と數へられるヒンヅウ教徒の羅馬だつた。既に佛陀在世の時代といふから西洋紀元より五百年も前に、世界最古の都會として榮えてゐたのである。それはとにかくとして今日のベナレスが世界一番の不思議な都であることには誰も異存はなからうと思ふ。

ベナレスは乞食の棲家である。市街の到る處に、群を成して坐つてゐる。巡禮者や敬虔な信者たちは、彼等に或ひは銅錢を投げ或ひは米麥などを彼等の捧げる鉢の中に入れてやる。尙儂や跛足なぞの不具者も居る。まるで獵の獲物のやうに棒へ括られて、前後を二人で擔いでゐる不具者も目撃した。腕のない不具者の乞食を見ると、その顔を洗つて拭いてやつてゐる婦人もあつたが、これはどうやら商賣にやつてゐるらしかつた。

ベナレスは乞食僧と香具師と聖者の棲家である。これ等の人々も此の都會に群を成してゐる。大抵は戦に行くアメリカ土人のやうに物々しい文身を描いてゐる。當地の寫真で見たのだが、二年前に死んだ托鉢僧で、生前、神を讚へる誓ひの下に夜も晝も兩腕を上に掲げてゐたのである。兩腕は次第に萎縮し、骨と皮ばかりに成り、手も自然と萎縮して拳になり、肩の關節は凝着してしまひ、もう他からどんなに力を加へても腕を曲折することが不可能になつた。さういふ托鉢僧の寫真だつたが、現在彼の像は鍍金されて、聖像として或る禮拜堂に祀られてゐる。

ベナレスはまた暗色の肌をした聖牛の棲地でもある。市場街を我物顔に跋扈して、店頭の前野



菜を食ひ荒しても、誰あつて叱る者となない。たしかにこれはシヴァの聖牛かも知れない。

さて、聖都ベナレスの名を高め、その忘れぬ美しさを印象づけるものは、ガンジス河の沐浴場であらう。聖河の岸は水面よりも三階建て乃至四階建ての家屋位は高い。従つてその上につき立つてゐる諸王や諸侯の御殿が、六階建てから八階建てのやうに見えるのも當然である。之等の御殿は、民衆と信仰を同じくする諸王諸侯が、ベナレスに何か宗教上の祭典が行はれる際の宿舎にあてられため、豫め建造されてゐたものである。

ところで、今云つた三、四階建て位もあるやうな高い岸壁が、約四キロ米ほども續いて幅の廣い石段の連続になつてゐるのである。無論、ガンジス河へ降りるための階段で、これが、諸侯諸王の御殿に附屬する沐浴場だ。岸の上に立ち並ぶ寺塔や厨子堂の林立と相俟つて、此の廣大な石段の連續はたしかに、ベナレスの奇觀たるを失はない。日の出から夜の更けるまで、信徒の群がこの石段に溢れてゐる。平常の日でも數千人は集つてゐるが、何か特別な行事の日には十萬人を超えることも珍らしくないのである。普通のヒンヅウ教徒は一日に一回此處で聖河の水に沐浴するが、特に熱心な信徒は二回も三回も沐浴の行をやる。規定された沐浴にいそむ巡禮者もあれば、疾患部を聖河の水に浸してゐる病人もある。水上に突出してゐる壘壁や、禮拜堂に通ずる段丘の上などには托鉢の僧や聖者と呼ばれる乞食僧が群をなして跏趺してゐる。何れも座禪をくんで冥想に耽つてゐるところは、大佛様の見本が並んだやうである。灼けるやうな炎天下にまるで木像か何かのやうに凝然

と坐りつゞけ、それでもまだ足りないのか燃える薪を前に置いて、いやが上にも煉獄の試煉に堪えようとしてゐる。此の中に特に私の注目を惹いた若い苦行僧があつた。非常な美男で、その苦行演習の態度にも神聖な犯しがたい誠實が籠つてゐた。いつ行つて見ても、同じ場所に同じ座禪を組みほんの身動きひとつ見せない。私がルピイ銀貨を一枚彼の前に投げてみても、睫毛ひとつ動かす容子もなかつた。

禮拜堂へ通じる段丘の上には、歌手の一團が立つて、恍惚と耳を傾けてゐる聴衆にかこまれたながら、クリシュナを歌ひ、ラアマを吟じてゐる。——我が神クリシュナ、浴せる農家の娘の衣服を盗めりしとき……とか、或ひはまた——我が神クリシュナ、インドラの洪水を防がんと山を片手にさしあぐれば……などといふところを歌ひだすと、聴衆も歌手もひとしく眼を輝やかかせ、栗色の頬を緊張させるのである。クリシュナは人間的な神であり、彼等にとって親しき主であり、主神ヴィシュヌの化身である。民衆を理解すること深く、彼等のために家畜と畑とを保護してくれるから、一番人氣のある神の一人だ。歌手の一團の後方に伴奏の音楽隊がゐて、小さな銅羅や長大な太鼓を、鳴らし、打つてゐる。クリクリに剃りあげた坊主頭の中に一段と擡んでた、ちよつと説教僧か教誨師のやうな特異な扮装の男が、一際高い聲で歌つてゐる。これは、以前市場街に賣店をもつてゐた商人で、顔の廣い男であるが、最近すつかり信心に凝りだし、毎日のやうに此のマニ・カルミカ沐浴場へ出かけては、神の善さと全能の技とを讃へてやまないものである。



ガンジス河の水は、壮大に輝しく流れ来り、信心ぶかい田舎娘が捧げた、黄色い花束を泛べて流れ去る。大きな帆を張つたボートが流れを上下し、廣い沐浴場の石段には、多勢の信徒が群つてゐる。ベナレスの町も、寺院も、諸王の御殿も、かういふ風光の中に、華かに輝いてゐるのだ。

この風景は明日も明後日も、永遠に續けられさうに見える。ガンジスの聖河、美しい沐浴場、其處に群がる栗色の肉體——これ等もまた永遠を約束された風景であらうか。

ベナレスで死ぬことを自慢するほど、此の聖都に對するヒンヅウ教徒の愛著は強い。老年者が競つて此の都に住宅を求めようとする理由はそこに在るのだ。死の身近に迫つたことを自覺した病人は、遙々と故郷を後にして此の都に運ばれ、聖河ガンジスの岸に仰臥して死を待つことを望む。私はさうした實例を、河中に突出した岸壁の上に、數日の間、死を待つて横はつてゐる高齡の老婦人によつて知つたのである。彼女はうすい蒲團の上に臥し、栗色の息子の逞しい腕の中に最後の數日を抱かれつゞけてゐた。燃えつくして、蠟燭の蠟のやうに、黄色く冴えた老母の顔は、何かを待ち焦がれてゐるものゝ如く、河の流れを追ひ求めてゐる。やがて一日、彼女の靈は朽木のやうな肉體を離れて去つた。

黄昏が迫ると、沐浴場の人影は一層ふえて大きくなる。葦の葉柄で編んだ小さな筏に小さな灯を

立てたものが、何百ともなくガンジス河の聖流に獻げられ、それが穩やかな星となつてキラ／＼と下流へ漂よひ下つて行く。説教僧が一人岸壁の上に進み出て、携さへた蠟燭を嚴肅莊重に、深々と流れ行くガンジスの水上に捧持し、銅羅や鏡鉢（やうばち）の鳴り響く間、凝乎と默禱禮拜を聖河にさし上げる。私は、此の壓倒的な森嚴な美の前に、思はず頭を垂れるのであつた。

僧の捧持する尖塔型の灯は次第に燃え下る。僧を取捲いた信者たちの指が蠟燭の灯影にゆらぎ浮ぶのは、僧の額に相争つて觸れようとしてゐるのだ。俄かに附近一帶の寺院や禮拜堂から、梵鐘や銅羅の音が轟々殷々と鳴り渡る。それを合圖に一齊に湧き立つ叫喚の聲。聖都を包む喧囂の聲は天上の星までも届くであらう。

これが、主神の一人なるシヴァに捧げる儀禮の情景である。此の神は時々深い冥想に沈むことがあるので、かうして喚び起して信徒の上を忘れないやうにする必要があるのだつた。シヴァを祀つたお堂にはいつでも、ナンディといふ名の石の聖牛が踞つてゐる。此の牛に手を觸れる者はシヴァを冥想から呼び起すことが出来るが、それ以來その人間はシヴァの、目に見えない繩によつて束縛されるとも云傳へられてゐる。

宵闇が濃くなりいよいよ本物の夜が来ると、今度はジャルサン沐浴場の方で、死者を焼く薪の火が闇を貫いて燃え上る。

『ラアマ、ナアマ、サチア、ハイ！』と唱へる聲がする。これは、『ラアマの名のみが眞理だ』と



ふ意味である。

(\*ラアマ、主神グイシユマの化身で、インド民族の英雄史詩中に歌はれてゐる「マアヤナといふ英雄もこれである。)

擔架の擔ぎ人の息が弾む。急げ急げ。掛聲にあふられて擔ぎ人の足は狭い御路を走り、乞食、托鉢僧、石の聖牛等々の前を駈けぬけ、驀地にガンジス河の岸へと目ざして行く。肩に載せた擔荷は一枚の狭い竹製の梯子。それに、長く伸びた白布を束ねたやうなものが結へつけてあり、擔ぎ人たちの掛聲と一緒にユサユサ揺れてゐる。これが死者の遺骸だつた。一刻も早く此の世を立ち去らうと急いでゐる死者なのである。顔も胸も、鬼のやうに赤く染めてあるがまだ繪具が乾いてゐない。屍體は女だつた、人妻だつた。『仕合せなやつさ、亭主よりさきに行くなんて！ あゝ、ラアマ

ナアマ サチャ ハイ！』——<sup>ひつかり</sup>間断なしに、擔ぎ人夫の掛聲が飛び、往來の人々が急いで左右へ開く。みんな、死者が急いでゐるのを察してゐるのである。亭主に弟に息子に友達、此の四人が擔ぎ人夫をやつてゐるのだ。急な石段を跳ぶやうに、二度ばかり駈け降りるともう焼場である。粘土色に澱んだ聖河の水が、廣い河幅いつばいに、折々キラ／＼と光を投返しながら流れてゐる。薪の山は煙を噴上げ、時々パチパチと爆ぜながら焰を吹く。此のさゝやかな焼場を取りかこんで、ヒンヅウ寺院の尖塔と廻廊をもつた建物と、段丘と段階などが並んでゐる。これがベナレスの火葬場ジャンサン<sup>ジャンサン</sup>の全景だ。ヒンヅウ教徒は、此處で灰となることをいたく喜ぶのである。

竹の梯子の擔架は急ぐ。あゝ、ラアマ ナアマ サチャイ ハイ！ 梯子を肩から外すと頭を上  
に、斜に流れの上に支へる。ガンジス河の聖水が死者の足をサラ／＼と洗ふ。亭主は隻手で掌に水  
を掬ひ、愛妻の顔と胸にサツサツとふりかける。顔も胸も血のやうに赤く彩色してあり、黄色い花  
環が手向けられてゐる。

死者の望みはこれで叶つた。もう今までのやうに慌てる必要はない。ガンジス河の聖水が彼女の  
持つてゐる凡ゆる浮世の不淨を洗ひ淨めて、無事にあの世へ旅立てるやうにしてくれたのである。

亭主の頭は、てつぺんの小さな髻を残してすつかりクリクリ坊主、腰に特別な仕立下しの麻布を  
捲いてゐるだけ、これが此の儀禮に許される只一枚の衣類だつた。剃髮、沐浴、腰布の着用、これ  
がヒンヅウの掟であり、愛妻の息を引取つた直後に、遲滞なく調へられねばならぬ準備である。死  
後二時間、長くても三時間の中には、屍體に火が廻らねばならないといふ掟である。

焼場の直ぐ近くに薪の倉庫があり、此處で薪の必要量が計算される。一人の死體を焼くに必要な  
薪の量は三百ポンドから四百ポンドまで十分とされてゐる。諸侯や諸王でもそれ以上の要求は許  
されない。ジャンサン火葬場は誰にでも平等なのである。

既に二個所で薪の山が煙を噴上げてゐた。その中間の場所を選んで、河岸に近く、亡妻の亭主が  
所定の薪を積み始める。先づ、地上に、細心の注意をもつて位置をきめ、敷本の薪を縦に並べる。  
次ぎにそれへ重ねて斜めに置く。段々薪の並列層が高くなる。今日まで何回となく見てきた通りを



ごく慎重に眞似てやるのである。一番上は、細長い盆のやうな形に四邊を高めに積む。これで出来上つたのである。友人の一人が手を貸して、彼と一緒に先刻の竹の梯子を水平に支へ、薪の積み上げた傍へ置く。續いて、縋つた草の蔓の繩を解いて屍體を解放し、靜かに抱へあげて薪の上の盆のやうな窪みの中へ仰臥させる。その上からまた數本の薪を、やゝ斜めに並列する。いよいよ準備は成つたのである。積上つた薪の堆積は、長さがかつきり一米の規定だ。それ以上は不要なのである。従つて覆面された頭部が一方に突出され、同じく掩はれた兩足のはし、が他方に覗いてゐる。

お堂の中から説教僧が一人出て來た。これも腰布一枚といふ扮装である。無雜作に薪の堆積へ近づくと、何やら、指一本位の燃えてゐる枝のやうなものを、屍體の頭の傍につき立てる。續いて乾燥した葦の葉の束を取り出し、今の燃えさしの焰を移し取り、それを持つて死者の頭部をかざすやうに撫で、祈禱を呟やきつゝ一定の距離を歩く。時々足を停めたりして、結局薪の山の周圍を七回廻るのだが、死者の頭の前に來ると、必ず一秒時ほど立ち止つて頭をたれる。七回目の廻歩を終ると、まだ燃えさかつてゐる葦の束を、薪の牛にぐいと突さして踵を返す。僧のつとめは終つたのである。火葬の儀禮はこれだけだ。經文の吟誦も、鐘鈴の響も、また哀歌の合唱も、追悼の演説も、何もない。この掟は、死者が苦力だらうと諸侯だらうと一切平等に遵奉されるのである。

さてそれからが喪主である亭主の働く番である。彼は自分の義務をよく知つてゐる。説教僧が突さして行つた葦の束の、あはやたち消えかゝる焰を、すばやく新しい枯葦の束に移し取る。あとは

もうその焰が消えないことに専念すればよいのである。薄い木片を取つて薪の間へ挿み、薪と薪との隙間を少し押しひろげる。焰は、パツと舌を吐き、薪が明々と燃える。更にもう一束、枯葦を添へてやる。ちぎに、焰は強く逞しく擴まつて行く。早くも、屍體をくるんだ經帷子に燃えうつたやうだ。

亭主は身をひいて、五六歩離れた石段に腰を下して跼まる。見たところ平然と焰の具合を見てゐるが、恐らくは表面だけのものであつたらう。傍に、子供たち、女たち、今焼かれつゝある死者の一族の者、等がひつそりとつゝましく悲しみを抑へてゐる。かすかな嗚咽も折々まじつてゐる。時々、亭主が起上つて、葦の束や木片を突きこんだり、薪の組方を直したりしてゐる。焰の熱が次第に烈しくなると、今度は一本の竹の棒を取つて火勢や、薪の組方を適當に直し、よい香を發散する白檀の木片を火中に撒布する。また、時々は何か牛酪のやうな物を焰の中に投げ込む。牛酪は聖牛の乳によつて作られるものであるから、焰をも培養し補強するに十分なのである。

薪の山が紅蓮の如く燃え熾り、屍體が焼かれ始めた。先づ燃えるのは腰から臀部と、胸の邊である。直きにそこは燃え落ちて、麻の經帷子が黒化する。前に覗いてゐる足ばかりは、煙で僅かにいぶつて見える。

いよいよ妻は地上を去つた。彼に抱かれ、子供たちを産み、食事を調へ、彼の額の汗を拭ひ取つた妻は、いよいよあの世へ行つた。ラアマ ナアマ サチャイ ハイ！ 今こゝに焰を見張つて一



刻も早く、何の障害もなしに愛妻の靈を包んだ浮世の絆の一切を焼きつくすことが、彼の示し得る唯一の、そして最後の、愛情の奉仕なのである。下は苦力から上は王侯マハラジャにいたるまで、此の愛情の最後の奉仕をはむことは許されない。此處では、火葬場の事務所へ電話をかけるなどといふことは不可能なのである。父はその息子を焼き、子はその父を焼く。萬一、死者に身内の者がゐない場合は、友人が、またはその近隣の者が、死者に最後の奉仕をするのである。これがヒンヅウ教徒に課された風習であり掟であつた。また、もし死者が異國人であつたなら、その場合にも、街上を通行中の誰彼の中から、死者に對して最後の奉仕を全うする者を探し出すことは容易であらう。

死者の靈は直ぐに別の世界へ行つてゐる。そして早くも冥府の王ヤマアの裁斷の前に立つのである。ヤマア王は天國への門を閉ざし、死靈たちを地獄へ追ひ落すか、又は何かの生物に甦生させて再び此の地上世界へ追ひ戻すか、何れかに決める権利をもつてゐる。我々人間は之に對してどうすることも出来ないのである。無力な我々は、たゞ彼の裁斷のまゝに従ふよりほかないのだ。

四つ五つも同時に、薪の山が燃え煙を噴いてゐる。冥府の神は一刻の睡眠も取らずに、夜を日についで活動してゐるであらう。明々とガンジス河の流れに映える薪の山の火は、人間に向つて明日はお前の番だぞと、無言の警告を與へてゐるやうにも見える。

ボオトが後から後からと水面を上下してゐる。草を編んだ日よけの下に、一團となつた聖者サツクたちが冥想に耽つてゐる。子供たちが遊び廻り笑ひさゞめいてゐる。時々、聖牛が一頭石段を降りて

来て、のうのうと薪の山の間を通り抜けたりする。竹の梯子に死者を結へてきた枯草で縛つた繩なはや、河岸にうち寄せられた野菜の葉などを、探し廻つてゐるのだ。また空腹うきばらを抱へた犬が、薪の山の煙の中へ鼻を突込んでゐることもある。そして見てゐる人間が無いと灰の中を引搔廻したりする。然し見つかつて捉へられても、別に手荒な折檻は受けずに追放されるだけだつた。

薪の山の一つが勢ひよく爆ぜあがつて、火花が西に飛んだ。黒焼きになつた頭が一つ、ころりと仰向けに落ちる。慌て、誰かゞそれを、竹の棒で火の中へ押し返した。

ある時はまた、屍體の頭蓋骨を棍棒で叩き割つてゐるのを見たことがある。これは死者の靈に早く出口を作つてやるといふ古くからの迷信に出た仕業に違ひないが、信心もかうなると度が過ぎるといふものだ。

時々半分黒くなつた腕や足などが轉げ落ちることがあるが、そんな場合は竹の棒で火中へつき戻すのである。誰もかまひつけてのないうるやうな、向うの石段の傍で燃えてゐる屍體もあつた。暫らくはわからなかつたが、一時間ばかり経つて見ると、半分黒焦げになつた頭がはつきり見えてゐた。よほど大男だつたらしく。一度苦力クワイクのうる／＼してゐるのを見たが、これは燃えてゐる薪を、晝飯の仕度に盗みに來たものらしかつた。そのうちに漸く、頭をクリクリに剃上げた喪主らしいのが現れて、半分消えかゝつてゐる火をかき直したりしてゐた。

ジャルサンの火葬場には、あまり目立たないけれども小さな墓石が二つ三つある。氣をつけて見



ないと見通し易いが、その石の面に、風雨に曝されて朦朧となつた碑文が刻んであるのだ。讀んで見ると、これ等の墓石は、死んだ夫と共に我身を焼かれた婦人たちのための記念碑である。かういふ野蠻な風習は、數千年前にイギリス政府によつて禁じられたのだが、今だに、教養の高いヒンツウ教徒の中にすら、此の禁令を口惜しがる者があるのを知つてゐる。彼等に云はせれば、男女の夫婦關係といふものは假に片方が死んだからとて、それで解放ホトされるやうな淺い單純なものではなかつたのだ。

かういふ考へ方から生れた前記の如き風習は、今日もまだ根絶されてはゐないらしい。つひ最近にも、此のペナレスの近在の部落で、ヒンツウ教徒の一婦人が、夫の死に殉じようとした事件が起つてゐる。警察當局も、これを見物しようと思つた群衆の整理には手を焼いたさうだ。やがて死を覺悟したその婦人が、夫の横はつてゐる薪の山の上へ昇ると、その瞬間に、奇蹟といはうか火の手が急に強くなつて、一遍に焰が燃え上つた。おそらくこれには奇蹟を強調しようとする説教僧たちの芝居も手傳つてゐることは明白だが、氣の毒なことにその婦人は全身に火傷を受けて轉落してしまつた。おまけに、誰一人それへ近寄る勇氣もなかつたため、一時間もそのまま放置されたのである。だが結局、その翌々日に望み通り彼女の殉死は遂げられた。そして、今度は夫に殉死した貞節の女を拜まうとする群衆が、前にも倍して押し寄せたさうである。ところで問題がまた一つ残された。此の貞女の屍體はもう一度焼いたものか、それとも此のまゝでガンジス河に流したのかも

のか、といふ、まあ當然起るべき問題ではあつたが、たうとうペナレスの或る婆羅門に伺ひを立てることに衆議一決したさうである。然し結局は、役場の方から指令されて、貞女の屍體は、そのまゝでガンジス河に流したのだつた。

歐羅巴人けよく、身内の者の屍體が焼かれるのを眺めてゐるかうした風習を目して、やれ情操の不足だの冷血だのと非難するが、今云つた貞婦の實例などは此の非難に答へる立派な解答の一例ではあるまいか。私はペナレスから二日ばかりの行程にあるやはりガンジス河畔のガヤで體驗した斷腸悲痛の思出を、永久に忘れ得ないのである。河中の砂洲の上に、もう幾度か見覺えた葎クサの山が出來てゐた。その上に屍體が一つ横になり、數名の男が、それを前にして誰かを待つものゝやうに歸まつてゐる。やがて三人の白布を纏うた女が、互ひに絡み合ふやうな容子で砂洲を渡つてきた。大きな荒つぽい聲で、悲痛に、死の哀傷歌を唄つてゐる。と、不意に女の一人が高聲に歎き悶えながら砂に倒れ伏した。死者の女房らしかつた。二人の女が縋りつくやうにして彼女を抱き起した。よろ／＼と糺もつれ合ふ如く二三歩行つたと思ふと、今度は年長の母親らしいのが、くづ折れるやうに砂の上へ這ひつくばつてしまつた。こんな風に、轉まげつ轉まびつ、互ひに抱き合ひ支へ合ひ、嘔う嗽そし嗚咽し、或ひは心の怯おそれを振り落さうとしてか、節ふしも何も目茶苦茶な、涙なみに曇るだみ聲を張りあげて哀傷の歌を斷腸の思ひに歌ひあげようとする。薪の山の所まで辿りつくと、死者の妻が先づ慣習に従つて、亡夫の額へ、紅べにで二世の契りの記標を描かねばならない。彼女はまたしてもよるよると倒れ



た。女も男も一齊に走りよつて、彼女の腕を支へ、手を添へて、嘆き悶へる彼女を勵ましてゐる。

およそヒンヅウ教徒の寡婦ぐらゐ悲惨なものはないであらう。髪は剃り落され、衣類も一番質素で地味なものを着け、お洒落はもとよりあらゆる身嗜みまでも、一切禁じてしまふのである。ただ一人、離れの部屋に閉ぢこもつて悲しい日を送らねばならない上に、三度の食事さへ、出來得るかぎり制限される。一度寡婦となつたらもうお終ひだ。再婚などは無論許されない。よしんば十六歳で寡婦になつても此の掟は動かさないのである。インド人は、若い身空で寡婦になるものは、前の世で悪事悪行をはたらいた報ひだと云つてゐる。――

さて、話を前に戻さう。愛妻の屍體を焼くさつきの男やもめは、黙然として薪の焰を凝視してゐる。一時間ばかりも経過したらうか、愛妻はすっかり灰になつた。後は足だけが二つ燃える焰の間から覗いてゐるだけである。男は起上つてその小さな足を、思ひきつて火中へ押しやつた。今もその耳に足音の残つてゐる小さな足――男は、心を勵まして、燃え残りの薪を拾ひ集め、火中に投げた。さあ、これで終りである。

男は、餘燼のさめるのを待つてゐる。やがてお骨を集め、素焼の壺に納めて、ガンジス河に沈める。さあ行け、お前の生れて來た故郷へ、ガンジス河は生きとし生けるものゝ母なのだ。――

「ラアマ ナアマ サアチャ ハイ！ さあ急がうぜ！」と、はやもうお替りの擔架擔ぎが、死者を擔いで石段を駈け降りて來る。

聖古都ベナレスに集中した巡禮者の數は十萬と傳へられてゐる。明後日と明日と今日と、三日間に亘つて月蝕の祭儀が行はれるのだ。隊伍を組んで來るのもあれば、一團となつて前後不揃ひにやつて來るものもある。主に農村の人々や庶民階級が多い。市街の雑沓に怖氣づいた子供や女房の手を曳いてゐるのは大抵農村の百姓である。乞食の大群も無論かういふ機會を見遁しはしない。寺や禮拜堂へ通ずる路上には必らず長蛇のやうな坐列を作つて、その椀や皿の中には米だの銅錢だのいっぱいまつてゐる。身の毛もよだつやうな氣味の悪い乞食の一隊が、歌を唄ひながらまるで楔でも打ち込むやうに群衆の間を押分けて行く。先頭は二名のいざり、腰で地上を這つて來る。癲病で利かなくなつた脚を不潔な布片でくるんでゐる。續いて手や腕のない不幸な男たち……此の不具者の一團が歌ふ聲は呻吟の聲に似てゐる。「シヴァの大神、シヴァの大神……」――無論、托鉢僧や聖者ぶつた宿無し僧なぞの大群も此の祭日には八方から押し寄せる。或ひは、これ等の中にも平素は何處かの深山幽谷に隱士の生活をしてゐる本當の聖者が、一人二人は混つてゐたかも知れない。だが、さういふ人はたゞガンジス河に沐浴に來るだけで、それさへ濟めばまたさつさと遁俗隱栖の生括へ引上げて行く。市街は新手の巡禮者群もまじつてごつた返してゐる。随分高齢の男女があるらしい。百歳位ではあるまいかと思えるのも相當居るのには眼を瞠らすにはゐられなかつた。黄金寺に行く狭い通路の如きは、文字通り殺人的の雑沓である。寺の僧侶が總出で、梵鐘や鐺鈸のどろ



きにはせ返つて、汗でずぶ濡れになりながら交通整理をやつてゐるが、まるで効果が無い。巡禮者の行列が後から後から繰込むので、黄金寺の聖地は薯を洗ふやうにこつた返してゐる。そんな中でも、暗色の肌をした聖牛ばかりは、相變らず何處を風が吹くと云つた顔で、悠々と雑沓を押分けて漫歩をやつてゐる。時々、反對の方向から來る巡禮團とぶつかつたりして大變な騒ぎを惹起してゐる。

婆羅門たちに取つては一年中の書入時、參詣人の投げる銅錢で、みんなほくほくした顔をしてゐる。だが、何と云つても婆羅門は庶民の俗人とは格が違ふから、ちよいと袖が觸つても大騒ぎである。急いで沐浴齋戒した上、別の法衣と着更へねばならない。南方インドの都會などでは、婆羅門の通路といふのを特別に設けて一般俗人と接觸するのを豫防してゐるところさへあるのだ。

さて、平常でさへ熱の高い此の聖都は、今日は特に酔つぱらつたかのやうな景氣である。早くもガンジス河畔に降る廣大な石段までが満員になり始めた。歌手たちはびつしよりと汗にうだつて鹽辛聲をふり絞り、太鼓や銅羅の音楽隊も疲れ萎えた腕で滅茶苦茶に叩き鳴らしてゐる。こんな人間の洪水の中に在つても、例の灰色の聖者ばかりは佛像の如く胡坐して眉ひとつ動かさない。

聖河の水が、一面に光り始めた。黄昏が迫つたのである。今日ほど、此の河に黄色の花の捧げられた例を見たことがない。小さな蠟燭を灯した葦の葉の筏も、水面を埋めて後から後からと流れてゐる。例の大蠟燭の尖塔の祭儀も、今宵は一入に嚴かで且つ崇高い。

『然らば獨逸は英國の支配を受けつゝありや?』と、今度は筆談である。私の答辯の筆記を、例の石盤で読み終つた此の王様は、口をポカンとあけたまゝ世界には英國と無關係に獨立してゐる國もあるのだ、といふ新發見をしたらしい。漸く納得のいつた顔に戻るとまた別の疑問が飛出した。

『然らばお訊ねするが、その獨逸國を支配して居る大王は何んと仰せらるゝや、して御年はどの位ぢやな?』——これの答辯は、今度はまるきり分らなかつた、獨逸國では國民が國家を支配してゐる——ふうむ、國民が、國家を……? 禿上つたまるつこい頭を傾げて考へてこんである。王様にはそんな事は有り得る筈がないと思はれたのである。

『然らば、獨逸國はカルカッタのやうに美しき所なりや?』——王様はだんだん興奮してきたやうだ。書記の手から石盤を引つたり、筆記した文字を掻き消しながら、直接私へ、ヒンヅウ語で浴びせてきた。——王様との會談はこんな風に際限なく續く。例の召使ひは幾度となく、木の腰掛けを擔いで私達の後を追ひ廻した。最後に王様が、祕書官を通じて私へ發した質問は『然らば卿がイギリス政府に於いて有する地位は何なりや?』といふのだつた。これに對して、『余はイギリス政府とは最小限の交渉も持つ者に非ず』と答へると、又しても王様は全身をゴム鞆のやうに丸くして雀躍し、膝を叩いて讚嘆するのだつた。恐らくかういふ答辯をなし得る人間に出會つたのは今日が初めてだつたに相違ない。王様はいきなり私の腕をつかんで、強引に引上げ、御殿の中へ引ずりこんだ。御殿の中と云つても、實は拱門の中へ引ずりこまれたのだが、此の容子を見て何と思つたか



衛兵が立直つて私の鼻先へピカピカした鋭剣をつきつけてきた。或ひは、王様の肚では自分の兵力を一應自慢したかつたのかも知れない。が、片手をあげて簡単に衛兵を追ひ拂つてから、ちよつと庭でも見てくれ、とお世辭を云つた。御殿の庭としては、遺憾ながらお粗末な狭いものだつた。

さて、我々は當然王様の賓客として食事の饗應にあづからなきやならない場合だが、残念ながら辭退することゝした。そしてずゝ分長いことかゝつて、漸く此の老王様のちと迷惑なほどの款待ぶりをふり放すことが出来たのである。王様は、裸足のまゝ、我々を送つて小路の角までついて來られた。だが其處から先きは一步も出なかつた。小路からそとへ出るといふことは、非常な例外の場合だけなのであると云ふ。

我々が自動車に乗つて後退しようとするところへ、最初の瘦せた祕書官が轉がるやうに駈けつて菓子やパンのいつぱいづめてある小さい籠を一つ私に押しつけた。『王様のお志です、近くまたお立寄り願ひたいと仰せられました』

アクラの町に到着した頃は、ちやうど例の結婚流行期が始まつてゐた。毎日のやうに、今日を晴れと着飾つた婿どの、騎乗姿が多勢の知己友人につき添はれて狭い市場街を通る。花嫁を連れに花嫁の家まで出かけるのである。花嫁の顔は絶対に見られない。兩側をびつちり帷幕でかこつた轎で運ばれるのだ。肥つた毛澤の美しい馬に跨つて行く婿どの、前に、時々白刃をひらめかした男が歩いてゐる場合もある。これは歩きながら、簡単な劍舞の仕草をやつて見せるのである。然しこんなのはごく卑賤な身分の者の結婚の場合で、上層階級の結婚となると、太鼓をドドドと叩きながら昇床を花嫁の家へ擔ぎこむのが多い。それには非常に見事な紙細工の人形や花環などがいつぱいに飾つてあり、まるで小さな花園でも擔ぎだしたかと思はれるばかりである。

日中の暑氣が去つた夕暮れから宵にかけて、此のアクラの狹隘な市場街を漫然と歩いて見ると、何んとなく夢の世界のやうである。宵闇の迫る中に色とりどりの光彩が浮び、着飾つた群衆がほのかに灯影の中を押し合ひへし合ひしてゐる光景は、どこかに火事でも始まつたのかと怪しまれる位だつた。

アクラの古いが莊麗な王城の墻壁の下の、ジユムナ河の砂洲の上に、ヂトラコット王が行在所を設立なさつた。(ジユムナはジャムナとも云ひガンガ河の支流、全長一五〇〇キロ米)天幕やうごめく人影を岸に立つて眺めると、まるで年の市でも始まつたやうである。危つかしい急造の棧橋が一本、三角洲の島へ架け渡され、大きな龜の群れがのんびりと水中に遊んでゐるのも見える。

單純だが廣々とした天幕の中で、ヂトラコット王は謁見を賜はるのだ。拜謁する者は天幕の前方五歩の所で靴を脱ぎ、そのまゝ砂の上に坐らねばならない。王様を取りまいて多勢の女、男、子供たちが貧富の別なく恭しく居並んでゐる。王朝の廷臣は二十人あまりもあらうか、みな裸形で醜怪



な文身を描いたところはちよつとサアカスの花形役者のやうだ。頭から全身にかけてすつかり暗色の灰がなすりこんである。中に一人、足の裏から頸まで暗灰色の、逞しさうな小男が、黄色の粘土で頭髪をかためてゐた。眉間にはみな黄土で塗り上げた紋様があり、脛や鼻根のあたりから、蛇の舌のやうな焰の色が描いてある。灰をかぶつたやうな頭髪は、大抵の場合大きな結節にむすんでゐるが、中には野獸のふり亂したたてがみのやうなものもあれば、更に、クリクリに剃上げて恰度腦天の邊に申譯ほどのヒンヅウ鬚を押立てゝゐる者もあつた。こんな茶番狂言の舞臺のやうな容子をしてゐるのは、すべて聖者と崇められる豫言者か、乞食乃至は説教僧で、何れも地上的な物質慾の一切を抛棄した人々である。

彼等は各自の小さな天幕の中に小型の禮拜堂(佛壇)を備へてゐるが、そこに並べられた神佛の像たるや實に原始的だ。テカテカと光つた黒い球體に眼を描き、それへ人形の衣裳のやうなのを着せてある。時には石塊だけ二つ三つ置いてあるものもある。かういふ聖者の一人が雨傘を擴げて蹠まり長い煙管を吸つてゐる。別の細面の美しい禁欲者型の聖者が、只一人凝然と瞑想の姿勢で胡坐してゐるところは、ちやうど暗色の石材で彫つた像のやうである。此の僧は夜は眠らぬこと、人とは會はぬこと、といふ誓願を立てゝゐると聞いた。

王様が私を迎へて挨拶した。變つた挨拶の仕方、脂肪ぶとりの半身を普通なら前にこゝめるところを反對に後へそり返る。そして掌を私の方へ向けるやうに兩手を胸の前へ持ち上げるのであ

る。此の王様もやはり、側近に奉仕する人々と同じ聖者の一人で、隨伴する乞食僧たちの教師の立場に在つた。彼が、デトラコット大王の王冠を抛棄したのは十年も前である。爾來、デトラコットの御殿を出奔して二度と歸還しないのだ。人生の凡ゆる快樂はもとより、家族も財産も捨離し去つた彼がひたすらの願望は、自分の生涯を神に捧げることだつた。やはり全身に灰を塗りこんでゐるせむか、顔だけは殆んどまづ白に見える。それだけに益々、長いさきの尖つた口髭が昔の瑞典のヒ首のやうに見えて、一層不氣味な感じがある。塵埃をかぶつた頭髪は高々と括りあげ、まるで頭巾のやうに大きな頭の上でグラグラしてゐる。

彼は、私を見るとちよつと説教を止め、何か用事かと訊ねた。その態度には、假に私がどのやうな難問を持ち出しても、喜んで最善の答へを與へてやるぞ、といつたやうな、慈父の如き優しさで穩さどが溢れ、また嚴父の如き威嚴も兼ね備へてゐた。

私は此の偉大な聖者と二言三言話し合つてから、思ひきつてちよつとかまをかけてみた。だが彼は依然として乗つて來ない。巧妙な辭禮を以つてうまく問題の核心を外してしまふ。それに私の見たところでは、英語も相當たつしやらしい。何等かの理由で知らないふりをしてゐるに違ひなかつた。或ひは此の國の言語を好かないのか、そのために殊更通譯などを使つて、自分の聰明さを民衆の前に誇示しようとしたのかも知れない。

『一體どんな衝動から遁世の決心をなさつたのです?』と、私が訊ねると彼は答へた。



『一切が空であることを悟つたのぢや。わしの過去の生涯といふものは、なべての人間と同じ一つの夢であつた。生活は、現在わしのやつてゐるやうなのが眞實であり、本當の生活なのぢやよ。』

『インドの政治上の問題など、御心配にはなりませんか？』

聖者は微笑した、大きな顔いつばいにこびり着いてゐる白い埃の層に溝をこしらへて笑ふのである。『政治問題などは末の末さ、一顧の價値もない。』

『でも歐羅巴を御存じでせう？ あゝして間斷なしに戦争が起つてゐる原因を何うお考へになりませぬ？』と、私は此處で彼の歐羅巴觀を知りたいと思つた。

聖者は、口をゆがめ、輕蔑しきつた口吻で答へる。『歐羅巴人は眞理から遠ざかつてをる。彼等はおもはや、何が眞理で何が虚偽だか知らないのぢや。彼等が眞理へ歸り着かぬかぎり、お互ひの鬭争は絶えまいな。』

『ではその眞理とは？』

『神に於ける生活ぢやよ、神へ身も心も獻げつくして、私慾や地上の喜びなどを悉く捨離することぢや。』

私の發した甚だ拙劣な質問に至つては、彼ばかりでなく、彼の従者たちまでから、大笑ひに笑殺されて終つた。愚問といふのはほかでもない。彼が何年かの後には再び領國へ歸還して、國政を執る時があるとは考へないか、といふ意味のことだつたのである。

そこへだしぬけにドンチャン騒ぎが起つた。小さな樂隊が活動を開始したのである。或る金持ちのヒンヅウ教徒が、聖者とその一行を饗應するために、樂隊をお迎へによこしたのだつた。

これを知つて眞先に、まるで曲藝師の輕業の如く一米も跳り上つたのが、小柄だが逞しさうな頭が粘土のやうに黄色い。これも聖者の一人である。跳り上つたはずみに、細い玩具のやうな太刀がぶらぶらしてゐる。跳り上りながらぐるりと向きを變へたと思ふと、砂の中へ人蔘を一本つき込み、重々しい歩調で二三歩進み出てから、再び今の跳躍を演じ始めた。だが今度は、跳び上りながら、縮めた兩脚の下をさつと、例の玩具のやうな刀で横に薙いだ。見ると今つき立てた人蔘が、まるで手品の如き早業でうすい一片をきり取られてゐる。さつさつさつとこの跳躍をくり返すごとに人蔘はその都度一片一片ときり取られ、最後はもう小指位の根を残すだけとなつた。ところが、此のちつぽけな根もまた、跳躍の早業と一緒に見事に眞二つに割られたのである。

こんな呆氣に取られるやうな早業が反復されてゐる間に、此の聖者團の團長格なる王様の聖者は悠々と兩手や胸に油を塗り、その上から灰をなすりこんでゐた。それから眉間の宗派を表はす紋様を丁寧に筆太に描き直し、長い八字髭をびんと張つて、これで支度は終りである。

どつしりと重さうな絹布に豪華な刺繍をした王旗が十二旒、高々と先頭に押立てられ、いよいよ出發となる。灰と埃にまみれはしてもかつての王様の品位と威儀はそのまゝ、がつしりした少し脂



肪過多の傾向がある體軀をのつし、のつしと動かして行く。ジユムナ河の棧橋を渡ると、河岸に待ち構へてゐた四輪馬車に乗る。車中には今日の饗應の主人役の、ヒンヅウ派の豪商が待つてゐるのである。聖者團の行進が、狭い市場街を練つて行く。先頭には例の小柄ながら逞しい劍舞師の聖者が細い腰帶一本の裸姿で、太刀を片手に、粘土色の頭をふり立てゝ行く。これに續いて、一財産はありさうな豪華な王侯旗十二旒。隨臣扈從と昔なら云ふところだが、今は何れも埃と灰に塗れた肌へ、文身のやうな醜怪な紋様を描いた道化師か農民風の乞食僧ばかりざつと二三十人。一番終ひが四輪馬車、贅澤な晴着をつけて端然と畏つてゐる豪商の前に、油と灰で全身を塗りまぶしたかつての王様がゐる。彼は、やゝ得意の面持で、兩手兩足を、豪商のおし載くに委せ、接吻するのに委せてゐた。

ラムー！ラムー！と群衆が一齊に歡聲を揚げて四輪馬車を送迎してゐる。

私はふと、もうひとつ訊いて見たいことがあつたのを思ひ出し、通譯の男を介して、王様にはお子様があるか否かと通じてもらつた。通譯は言下に馬車に走り寄り、狭い市場街にひゞき渡るやうな大聲で呶鳴つた。『聖王様、お子様がお有りかとあの旦那が訊いておいでです』——だがこの聲も王様には聽こえなかつたらしい。

直きに此の莫迦げた行列は都門の向うへ消えて行つた。

あの王様は或ひは一種の奇人かも知れない、香具師の名で呼ばれる詐欺漢かとも思ふが、それと

もまた眞實の一路を辿る敬虔な聖者だつたのか、これは神のみぞ知る祕密であらう。

此の王様の天幕から二百歩も距つてゐない同じ河岸に、半ば朽ちかけた達磨舟が二隻もやつてゐる。その二隻の扁舟の間にこれもごく粗末な、丸棒とブリキの破片などで拵へた名ばかりの筏があり、この上に、ざつと十年も前から、今の一團とは全然別種の型の聖者が一人、隱栖してゐるのだつた。誰一人彼の名を知る者もなく、どこから來たのかもまるきり分らないのである。

十年の間、此の無名僧は筏を離れなかつた。毎朝、日の出を拜みながら流れに沐浴する以外は、一步も筏の上を離れなかつたのである。また、十年の間、彼がものを云ふのを聞いた例がないといふ。完全な徹底的な無言の行を積んでゐるのであらう。食べる物は果實、飲み物はジユムナ河の水と限られてゐた。古びた雜囊が一個、木炭を入れた壺が一個——これがざつと三平方米ほどもある隱栖の住居の、家具の全部だつた。彼の眼は何物をも追はない、アクラ市の町の容子も知らなければ、河に泛ぶボオトも、岸に往來する人間も、決して見ようとはしない。彼が眼に映るものはたゞ粘土色に流れてゐる水ばかりである。流水は、此の孤獨の聖者が眠りにつくとき、やさしく彼のほつた足を洗ひ冷やすのだつた。

私が此の僧を訪ねたとき、ちやうど小さな讀み古らしい書物を手にして黙禱してゐるところだつた。時々彼のくぼんだ眼が、高い空に向けられる。ひどく華奢な、そして美しい手をしてゐる。まだ若いやうだ、青春の健康を全身に湛へてゐる。すつかり裸體なのだ。肌は暗褐色にやけ、頭髮は



長くもぢや〜に亂れてゐる。

聖僧は勿論、言葉を發しない。だが筆と紙とによる筆談なら差支へなかつた。私は、二三の質問をインド原住民語で書かせてさし出したが、すぐに突返された。

同行したアクラ大學の學生が、『此の人は梵語<sup>サンスクリット</sup>だけしか通じないんです、わざとさうしてゐるのかも知れませんがね。』と云つて、自分で梵語に書き直してくれた。だが、聖僧のこれに對する答へは非常に曖昧な、混亂したものだつた。その結論には、『ムトラ市に梵語の學校を建てるのが自分の希望である。だから自分は、神によつて此の計畫を翼賛してくれる人物が遣はされるまでは、此の筏の上を去らない覺悟だ!』とある。

『然らば、更に今後十年でも此の生活を續けねばならぬとしたなら何んとなさる?』  
『十年が何んです?』

何處の都會でもどんな田舎道でも、かういふ聖者<sup>サツ</sup>に出會はない場所はない。彼等はみな、浮世を捨離しそれぞれに聖い誓<sup>きま</sup>を立てゝゐるのだ。夏季にはひると大集團を成して比較的清涼なカシュミヤ地方へ移る。私は、ラダックの高原地帯や西藏國境などでも、さういふ聖者<sup>サツ</sup>の人々と出會つた覺えがある。ペシャワール地方で見る聖者は、色とりどりのぼろきれなどを織ぎ合した寛衣を着けてゐるが、この寛衣が佛教の僧達の着衣の最も古い形式なのである。勿論、その中には見るからに醜怪

な奇想天外な扮装の者もある。第一、かういふ聖者たちの多くが、歐羅巴の傘をさしてゐる恰好からして既に滑稽だつた。大部分は裸體で、例の灰を塗つた肌をまる出しに、殺人的なインドの日光の直射する中を、托鉢を持つて歩いてゐる。また、中には特別に奇篤な僧もあつて、酷熱の日光だけでは足れりとせず、身近の左右に焚火を燃やして、修道に努めてゐるのも見受けることがあつた。數年にわたつて人家に宿つたことが一度もないといふのがあつた。墓地へ行つて死人の傍で眠るのださうである。

勿論、かういふ聖者や托鉢僧の中には、人の好意によつて我が怠惰の空腹を満たさうとする香具師<sup>シ</sup>に類する者も尠くないらしい。が、大多數はやはり、敬虔な求道の士で、高い宗教的理想の下に生活してゐるのである。現實の一切を捨離して、只管遁世の生活を求めようとするかゝる強固な意志力の發現がなぜこんなにも多いのか、と考へると、其處に何等かの神祕的の力が、今日も尙ほインド民族の中に生きてゐる、としか考へられない。

幻術師<sup>フンキイ</sup>と呼ばれる聖者は、インドでは年々減退する一方である。私の今度の旅行中でもたつた一遍、それも人傳<sup>ひとつて</sup>にまた聞きしただけだつた。カルカタで見たのださうだが、其處に現れた幻術師は一米<sup>メートル</sup>位の廣さの穴を掘らせ、深さは足が埋まる位にして、其の穴へ燃えさかつてゐる薪を並べる。その上を誰にでも通らせるのだが、その幻術師が呪文を唄つてゐる間は、燃えさかる薪の上を誰が渡つても微傷だに受けなかつたさうである。噂が立つたやめ高等警察まで出張して檢閲したが



事實、その檢閲委員たちの眼前で右の通りのことが行はれたので、詐欺や騙の實證を掴むことは不可能だつたといふ。

後に此の奇妙な事件に就いて或る英人の教師に話したら、教師は笑ひもせず云つた。

『そいつは本當です、新聞の報道も嘘ぢやないんです。現に私がこの幻術師を知つてますよ。あの男がガヤにゐた時です。私もその薪の燃えてゐる上を裸足で渡りました。連れて行つた生徒もみんな實驗済みですよ。』

『では君、此の現象をどう説明するね？』

『説明つて？ ありやあなた仕掛があるんでさ、それ以外の何物でもないですよ。』

と、教師の説明もまた甚だ簡單なものだつた。――

アクラの町には、有名な唯一無二と云つてもよい珍らしい記念碑がある。もと、愛する妻を記念して建てたものであるが、今日ではそれ以上に有名になつてゐる。インド女性の、いや東洋の女性の、すべてを網羅した記念碑と云つても過言ではないだらう。正體を明かすと、例のシャア・ジャハンが、鐘愛の妃ムムタヂマハルを追慕して建てた有名な靈廟がそれだ。

今日ではもう傳説のやうな韻をもつてゐるが、悲劇の歴史は下の如くである。ジャハン王の大理石御殿は、あの聖龜が群棲するジユムナ河畔に在つた。晝は諸民に謁見し、隨臣の大臣たちと政務

を談じ、歴史を読み、音楽を聴き、密畫を眺め、夕には冷涼な庭内の段丘を逍遙して、お抱への道化師の諧謔や諷刺に腹を抱へて笑つた。シャア・ジャハンはまことに幸福な殿様だつたのである。

もう之以上の望みはなかつた。天帝の恩寵によつて迎へた妃アリマンド・バヌは、ムムタヂマハル（宮廷第一の美といふ位の意味）と呼ばれる程の美人だつた。此の美妃との間に擧げた子寶が十三人。

當時諸王侯きつての果報者は此の人一人と羨望的だつた。が、好事魔多し、愛妃は第十四の赤ん坊を産落すと同時に他界したのである。

シャア・ジャハンの幸福は一瞬にして去つた。爾來彼は一切の女性を卸ける一方、ただひたすらに愛妃ムムタヂマハルを、偲ぶにふさはしい墓を建てることに専心したのである。愛妃の靈廟は十二年の歳月を費やして漸く出来上つた。その間シャア・ジャハンは、御殿の露臺に立つて竣工の日を待ちわびた。延人員二萬の工夫と二千五百萬乃至三千萬マルクの費用をつかつて、漸く二十二年後に出来上つたのである。やがて、シャア・ジャハンが自分の死期を豫知したとき、彼は臣下に命じて身分の身體を露臺の上へ運ばせ、心ゆくばかり、亡き愛妃を祀つた靈廟タヂマハルを見守つたと傳へられる。

ジャハン王の晩年は非常に貧乏だつた。今云つたやうな莫大な建築費を愛妃の墓に投じたところへ、今度は自分自身の墓も建て始めてゐたのである。その計畫は、雪白の大理石で輝いてゐるタヂマハルに對ひ合つた敷地へ、全部黒大理石を以つて建てる豫定だつた。此の基礎工事は今日でも殘



つてゐるが、此の計畫を知つて、財産の蕩盡するのを惧れた彼の後嗣の王子は、直ちに老衰の父王を、宮殿内の小さな大理石の一室に幽閉してしまつた。憐れなシャア・ジャハンの晩年は此處に始まつたのである。

彼の遺骸は、後嗣の王の計らひで、ムムタデマハルの靈廟と並んで祀られた。

今日、此のタデマハル廟はインド旅行者の巡禮地のやうになつてゐる。イギリス人に訊くと、口を揃へて、タデマハルを見るなら月明の晩にしる、などといふ。遊覽客たちはムムタデマハル妃の貞實を象徴する雪白純潔の大理石に手を觸れたり、美しい色の石を刻んだ花飾りを撫でたりする。また、案内人の聲が、高く中空に秀でた伽藍の穹窿に響くのを興じ合つたりする。だがこの位はまだいゝとして、許せないのは此の靈廟の監視人の無耻厚顔な、まるで商人の如き態度だ。彼等はいかにしてより多くの金を遊覽の旅行者から絞り取らうかとそればかり覘つてゐる。氣の毒なシャア・ジャハン。

最後に、ムムタデマハルの靈廟は、ペルシャ——インドの、建築工藝の一傑作であること疑ひない。が然し、私をして云はせれば餘りにも古典的に過ぎて、殆んど古典建築の模倣の如く見えるのが、どうかと思ふのである。

### インドの心臓

國道の上で、我々の進む方向に塵埃の雲が轉つて行く。その動きがなかなか迅速である。追着いて見ると塵埃の濛々たる中から、三人の托鉢僧らしいのが現れた。正午の殺人的な日光の直射する下を、平氣で歩いてゐるのである。一人は大型の黄色い日傘を擔ぎ、一人は瓢箪を肩にぶらさげてゐるが、三番目のは細い旅杖を一本握つてゐるきりだ。三人とも丸裸で、まるで路上の砂塵のやうな肌をさらしながら目立つて道を急いでゐる。すれ違ふ巡禮者の數が殖えて来る。みんな安物のサフラン黄の寛衣をつけ、手に手に、新しいチカチカするやうな眞鍮の桶を抱へてゐる。これには故郷へお土産の、ガンジス河の聖水がはひつてゐるのである。遠く硫黄色にきらめく大氣の下に、都會の影像が微かに現れてきた。今日の我々の目標ベナレスである。

ベナレス市へ足を踏入れて先づ覺えるものは何とも云ひ知らぬ興奮焦燥の感であらう。これは、狹隘な市場街の極端な混亂と、無數に建ち並ぶ禮拜堂や寺院の鐘聲と、餘りにも狂信的な宗教の雰圍氣などの特別異常な刺激によつて、一種熱病みたいなものが此方にのり移るせゐるだと思ふ。ベナレスは不安焦燥の都なのである。寺々、禮拜堂などの銅羅や鏡鉢が朝は黎明から夜は深更までも鳴り轟く。来る日も来る日も、街上といふ街上は手に長い杖を曳き、黄色の寛衣を纏うた巡禮の旅人



が列を成してゐる。何れも、ありとあらゆるヒンヅウ諸派の信者であり、その肩間には黄また赤の繪具で、およそ考へられる限りの表徴が描きだされてゐる。點を幾つか描いたもの、横線を引いたもの、垂直の點線、太い條、細い條、波状の線、焰の形。聖都ベナレスに杖を曳く巡禮者の數は年々百萬を超へると聞くが、此處に住む三萬の娑羅門は、これ等の巡禮者が投する一人當り數枚の銅錢によつて生活してゐるとも云へるであらう。

巡禮たちは此の都の周圍を巡禮しなければならぬ。それだけに六日間ばかり、然も忙しいのだ。大小數百の禮拜堂や寺院や厨子堂がある。これが悉く、何百里離れたヒンヅウ派の僻村までその名のひゞいてゐるものばかりだから、一つ禮拜を怠つてもいけないのである。このほかにまだ、此の聖地に安住してゐる無數の神と女神があり、これにも一々、敬意を表して歩かねばならぬ。生殖豊穰の神として祀られてゐる男根像には水をかけ、祭壇へは花を捧げ、またベストその他の悪疫の媒體となる夥たゞしい猿群にも御馳走を振舞つてやらねばならない。それから娑羅門の僧たちが、悪魔拂ひの孔雀扇でお祓ひをしてくれるからそれにも、若干のお賽錢を椰子の實の殻のお皿へ入れねばならず、さてはヴィシユヌ、シヴァ、ガネシユ、ハヌマン、猿の神、萬病を療す神、パラヒン・デヴィ、十本腕のデュルガ、クリシユナ等々の諸神を拜禮して廻るうち、憐れな巡禮たちはたゞもう神佛を畏れかしこむ一心で生きた心地もなく、銅羅や鐘鈴の狂燥音にのぼせ上つた眼を硝子玉のやうに空虚に据ゑたまふ、金ぴかづくりのお堂のうす暗い中を、夢遊病者の如く歩くば

蓋、貯水塔、精米所の煙筒などが、青葉の梢からつき立つてゐるだけで、何方を向いても青葉に埋つた一面の庭、樹海。此の中に、自動車や人力車や馬車などの群つてゐるあの廣い大通りが走つてゐるとはちよつと想像もつかない。河の彼岸に、やはり樹海に掩はれた、舊バンコックの町がある。此處は、街道は一本しかないと云つてもよく、市民の交通はすべて縦横に枝をだした運河の水路を利用してゐる。

いま云つた築山の丁度麓に當るところに、寺院の屋根が見え、村のやうなものが見えてゐる。うつすらとした煙が梢の間から立ちのぼつてゐるが、これが何か妙な、一度嗅ぐと忘れられない臭氣をもつた煙である。ワットスレクト寺の火葬場で、此の都の一番高級な火葬場なのである。

夕方になると此の廣大な樹海のそちこちから、電燈や燈火の灯が一齊に輝やき始める。同時に、銀河を見るやうなジャワラジ遊歩道や、支那人街の高層なホテル、映畫館の電氣招牌などの存在がはつきりする。これがバンコック市内で一番賑やかな、一番明るい通りなのである。

バンコックの半分は支那人街だつた。市中のどこにでも支那人がある。人力車を挽き、自動車を操縦し、給仕人となり、手工藝をやり、商店、銀行、精米所、船、映畫館等々、何一つ支那人の手を經ないものはないのだ。少々哲人めいた生活を好むシャム人に較べて、遙かに勤勉であり商賣熱心で且つ企業家肌である。以前の支那人は蓄財が出来ても故郷へ歸らうとはせず、シャムの女を嫁



にしたりして土着してゐたが、近頃では、たんまりためこむとさつさと支那へ引上げてしまふやうである。此の支那人移住問題が、シャム國に取つて重大な問題となる日もさう遠い將來ではあるま  
す。

涯を知らぬ廣大な首府も、暑氣はなか／＼にきびしい。この暑氣さへなかつたら、シャムは文字どほりの天國だつたであらう。河川や附近の入江から来る濕度と相俟つて、シャムの暑さは甚だ猛烈だ。今は冬の季節だが、ポメロヤバナが熟れ、支那人は半裸體で働らき、力車を曳く苦力などは背中に瀧のやうな汗を流してゐる。商店や事務所、ホテルなどでは、扇風機が朝から夜中まで唸りどほしだ。バンコックはまた、溝と水路と濕地が多いために蚊の天國でもある。支那人の苦力でさへ、眠るには蚊よけの網をはつてゐる。熱風にむしむしする夜など、ホテルの庭に行つて見ると淑女たちはみな膝の上まで届くやうな一種の袋をつけて、蚊の襲撃を防いでゐる。

バンコックには、佛陀讚仰のために建立した佛堂が三百以上もある。このために全市域の五ヶノ一の面積が占められてゐるのである。

さうして此の三百の佛堂の中に、ゴオタマ（佛陀に同じ）の温健な教へが今尙ほ生きてゐる。一歩外へ出れば、國內中どんな原始林の中でも、剃髮黄衣の僧に出會はない例がない。僧の中には十歳位の間もつと年少の子供もゐる。法衣は安物の木綿で、シトロン黄からオレンジ黄まで、濃淡さまざまである。此の色は、ゴオタマが自分の教義を基礎づけた際に選定したもので、當時、黄色

は賤民と乞食の服色だつたのである。法衣の上衣は、古式に従つて右肩と右腕が露出するやうに纏ふ。寒い北西藏のラマ僧の厚ぼつたい毛皮にくるまつた不潔な姿に較べて、シャムの僧たちは著しく清潔であり、きちんとしてゐる。

廣場なぞへ出ると、よくかういふ黄衣の僧の集團を見かけるが、みな大型の白い日傘を携さへて寺や佛堂へ參詣するのである。日傘は本當は蚊よけ網と云つた方が正しいであらう。ちやうどこれを擴げると、その中で休息するに適した廣さになるのだ。こんなのが稲田の間にズラリと並んでゐるのを見ると、小人の天幕町でも出來たのかと思ふことがある。

バンコックの市中でも此の黄衣の僧は到る處にゐる。電車の中でも市場街でも見かけない例はない。また朝は早くから、多勢つれだつて、めんつう、片手に河中の泛べる市場へ、今日一日の糧を貰ひ集めに急ぐのである。

バンコックの寺々や佛堂は、立派な廻廊、厨子、等々を備へて非常に豪華である。シャム本來の建築様式にインドや支那の型が加はつて、華美好みのシャム人らしく壁にも切妻にも門にも、金びか銀びかの裝飾がはりつけられ、古典のかたさが明るく緩和されてゐる。云はゞ、インド的支那的の混和した獨得のロココ藝術として、大きな魅力のあるものだ。黄金の彫刻などをはり込んだ切妻壁、眞珠貝の嵌木細工を施した美しい扉。丹精こめた石工の技術によつて瀑布の奔流を表現した見



事な尖塔型の屋根。廻廊、玄關、縁飾をした石。目に觸れるもの悉く火を吐くかと思はれるばかりである。切妻から棟木へかけて赤い舌をメラ／＼と出してゐる長大な焰は、ナガと呼ぶ蛇の一群を描いたものである。こんな雰圍氣の中にも、何處かクラシク落ちつきと單純感が流れてゐる。夢見るやうな内苑にはバロック風の、支那風の彫像と相並んで、奇怪なシャム獨得の、ラマアヤア時代の英雄や神話の中の生物の像がのんびりと立つてゐる。

宗教上の祭典の當日には、此の内苑も堂の中も、參詣の信者たちで満員ださうだ。彼等は皆、僧や説教師への贈物として、米、バナナ、花などを黄色の布にくるんで持參する。僧はこれを祭壇に供へ、よい匂ひのする蠟燭に點火する。大抵の寺ではその日、小さな金紙が賣出され、參詣人はこれを購つて、煤けて黒ずんだ巨大な佛陀像へ貼りつけるのである。スラケット寺に在る佛陀像は九米も高い偉大なものだが、更にポオ寺に在る佛陀の寢像にいたつては高さ十二米、長さ四十九米といふ龐大なもので、これは佛陀の臨終を表徴したものだ。古い彫像の大部分は、昔の地方都市チエンライ、ナコンラムパン、チェンマイ等々から、新バンコック建設のお祝ひに集められたものである。佛陀像の中でも、一番貴重な神聖な國寶とされてゐるのは、フラケオ寺院に在るフラケオ像だ。これは高さが約六十糎ばかりの、藍碧の碧玉を彫琢したものである。シャム王國を象徴する偶像とも云ふべきもので、今日まで幾度かこれを目標とする争奪戦が、各地の諸侯の間に行はれたのである。従つて、此の碧玉の佛陀はいま／＼に幾度となく轉々と居所を變へてゐた。例へば王朝時

代には北の國境附近から北東へかけて流轉つねなき旅を續けてゐたので、此の新都バンコックに安息するやうになつたのは漸く近頃の話だつた。今此の佛陀は、ピラミッド型の黄金作りの佛壇の上高く、天蓋をかざして安座につき、黄金の盾を持つた黄金等身大の立像の幾體かに左右を警固させて、數限りない珍寶の中に端座してゐる。それ等の珍寶の中にはフランス製の大理石小兒像が二體、同じくフランス製の置時計を並べてゐるが、これは、かつてベルシヤ國王が訪歐の旅から持ち歸られたものを佛陀に獻じたのである。

黄色の僧衣を纏うた教養の高い青年僧が私に話しかけた。『お分りですか、佛陀は今ま冬の衣裳を召しておいでですよ。』

なる程、高い祭壇の上に鎮座する小さな碧玉の佛像は、黄金の、寶石を鑲りばめたマントのやうなものに肩にかけ、頭には黄金の冠を戴いてゐた。これが寒い季節の防寒着だつた。

若い僧は私を小さな戸棚の前へ導いた。中には、同じやうな非常に高貴な、雨期用の冠や夏期用の外套が保管されてあつた。

聖堂の前の内苑は佛教の寺院に特有な平安の中にまどろんでゐる。だが塙の外では自動車が咆えてをり、近隣には軍樂隊の演習が始つてゐるのだつた。曲目は『トリスタンとイゾルデ』の前奏、おそろしく高い音波が叩きつけるやうに流れて来る。(＊トリスタンとイゾルデはリイヒアルト・ワグナー



アの作) 諸樂器はいま型どほりの展開を見せて合奏され、高い協音から漸いに不協音に分れ、やがて或る間を置いて新しい悲壯な曲に移つて行く。これだけに演奏するには、尠くとも數ヶ月の練習を必要としたらうと思はれた。

先刻、寺堂の中で私へ話しかけた青年僧は、以前、ロンドンに留學して鑛山技師としての勉強を終つて來た篤學の人である。英語が素晴らしく達者で、二ヶ月前から、此のフラケオ寺に新發意として住み込んでゐるのださうである。

『で、あと何ヶ月位此寺におゐるのです?』  
『もう四ヶ月です。』

これでも分るとほり、シヤムではいまだに、青年を尠くとも三ヶ月は寺に入れて敬虔な修行をつませる風習が行はれてゐるのだつた、最近のシヤム國王の一人であるラマ四世の如きも、王座を繼承するまでは二十七年の長い歳月を、或る寺院の僧正として佛教僧侶の修行を積まれたのである。現にこの十年來、シヤム王國の運命を左右しつゝある高貴な純粹な精神の持主、ダムロン王子の如きも、今尙ほ、私が東部でお目にかゝつた時、托鉢僧の持つめんつうをお見せになつた位だ。

かうした敬虔な慣習が、やさしく平和な、そして明朗な、シヤム民族の性格に根ざすものであることは、疑ふべくもないのである。

シヤムの高級將校は殆んど例外なしに、獨逸へ行つて軍事教育を受けた人達だが、さういふ將校

たちの社交團體の或る宴席で、いま聯隊長の要職に在る王子殿下にお目にかゝつた。此の王子は、かつてオーデル河畔のフランクフルトに二三年留學してゐた事があるが、歸朝すると同時に、やはり或る寺へ追ひこまれたといふ話だつた。

『實際きつかつた』と、王子は今更のやうにため息をつく。『何しろ獨逸でさんざ面白おかしい生活をして來た直後なんですからね。朝、例のめんつうを持つて托鉢に出かけると、午後にはもう食ふ物が何ひとつ無いんですよ。それから四時間にわたる黙想です。此の間は苟くも佛陀の御弟子たる僧侶は、蚊に食はれてもこれをうち殺すことが出來ないのです』

戶外では、相變らず軍樂隊の演習が続いてゐる。私は寺を辭去した。さつきの鑛山技師の青年僧が佛壇の階段に坐つて、冥想に沈んでゐる。もう彼も、ロンドンの喧噪な生活はきれいに忘れ去つてゐることであらう。

卒直にいふと、白い象といふのは云はゞ錯覺に等しいのである。にも拘らず大多數の旅行者は、その錯覺に引ずられて、白くはないが普通の象から見ると遙かに明るいい色をしてゐる、なぞと強情を張らうとする。

象群の棲む家は、イタリイのルネッサンス形式を多分に取入れた。あまり芳しからぬ建築で、工費七百萬チカル、シヤム國民の自慢の一つである。だが、建物それ自身は甚だ單純で原始的で、國



寶視されてゐる問題の白象も、これと云つて特徴もない、へうきんな三歳位の仔象である。これが凱旋行進と共にバンコックへ連れて來られたのはつひ最近のことで、首府へ到着すると同時に高位を授けられた。母象は柄の大きい深切な象で、仔象をよく面倒見てやつてゐる。彼女は、此の子供を此の世に送り出すまで約二十年間も、北方シャムの高地でチイク材の索引機代りに働いてゐた労働婦人だつた。

ところで問題の國寶的存在にされた仔象だが、特徴と云へば僅かに、右の耳朶に、明色の斑點が二つ三つあるに過ぎない。それともう一つ、褐色と紺色の眼玉を一つづつもつてゐることだが、この點は確かに普通とは異つてゐると云へるであらう。だがそれ以外にはもうごく普通にいふ白象と少しも異つた點はなかつた。輿地インドの諸王たちが、激しい戦鬪を賭けて争つた白象といふのも、みなこの程度の白さだつたに違ひない。もつとも、シャム語では決して『白い象』とは云はないので、單に『シャン・フェウタ』（珍らしい象）と云つてゐる。その意味はつまり珍種と云ふ程度のところであらう。従つて白象などといふ名前が世界にひろまつた直接の責任は、此のシャム語の誤譯に在るのだらうと思はれる。

此の幸運な仔象は、もうこれでチイク材を運ぶ代りに一生の間好物の砂糖黍を嚙つてゐられるといふ結構な身分に成上つたわけだが、お蔭で從來の國寶象の方はすつかり左遷の憂目に會ひ、隣りの部屋で鎖に繋がれてゐる。此の方も耳朶にばら色の斑點がぼつぼつとあるが、やつぱり白象では

なく、ごく一般の象と同じ灰色の肌をしてゐる。體軀が素晴らしく大きいせゐか、耳朶の斑點もあまり目立たないやうだ。結局、國寶象の榮冠は、チイク材運搬の労働者を母にもつた仔象の方が適材かも知れない。それに、大きい方は眼球も血走つたやうに赤く、見てゐてあまり氣持のいいものでなかつた。

ところで最近ひどく、此の左遷された巨象の機嫌が悪いさうである。川へ沐浴に連れて行つた戻り道などで、何か氣に食はないことがあると、通りかゝつた人力車を苦力もろとも石垣に叩きつけて即死させるなどといふ亂暴をはたらくさうだ。不平があるに相違ないといふわけで、政府委員が智慧を絞つた揚句、たうとう此の巨象にフィヤの稱號を興へることに決定した。ちやうど男爵とか貴族とかいふのに該當するものだが、一旦さう決ると、それ以來すつかり亂暴をしなくなつて、鷹揚になつたといふ話である。

だが、白象の話などにさう拘はりたくなかつたので、私は同行のシャムの友人に話題の轉換を求めた。

『例のアウチヤの象狩りはどうですな。此の象狩りだけは、萬障を排してやつて見たいと思ふのだが……』

シャムの友人はげん顔に薄笑ひを浮べた。彼は今日まで此のバンコックを離れたことのない男なのである。『アウチヤの象狩ですつて、此處から北へ百キロ米もあるぢやありませんか？』



そこで私は、かねがね此の有名な象狩りの光景などを寫眞雜誌で見ていること。つひ二三年前にも、象狩りの寫眞を集めた素晴らしい冊子が發行されたこと。何百といふ野象が馴らされた象に誘導されて草原からはるばるアユウチャまで連れこまれ、かねて用意の狩場へ入れられてしまふことなどを知つてゐる限り細々と語つてきかせたのである。『さあ、いよいよ野性の象群が狩場へ現はれると、高い棧敷に待ち構へた王様が、その中でも一番美しい象をお選みになるんだつて話ぢやありませんか。御存じでせう君だつて？』

耳を傾けてゐたシャムの友人が呵々と笑つた。そして、やつと分つたといふ顔つきでかう答へたのである。『だがさういふ象狩りのあつたことはもう昔の話です。一番最後のがたしか千九百六年だつたと思ひますよ……』

千九百六年、ときいて私は呆れた。あの寫眞雜誌の編輯者は、折角の浪漫趣味を失ひたくないために、わざと年代を明記しなかつたに相違ない。

## 蛇 園

まだつい二十年ばかり前までは、シャムは獵師の理想郷だつたが今日ではもう、名物の犀さいは絶滅されたし、あの獰猛な鱉も蒸汽船の喧騒やかましきに僻易したか影も見せない。野生の象は僅かに、南方シヤ

ムの山岳地帯と上部の北ビルマとの國境方面に若干残つてゐるだけだ。虎もやはり、汽罐車の號笛や自動車の爆音に氣壓けいあつされて、段々に遠い密林ジャングル濕地帯へ引込んで終ひ、あとに残つてゐるのはたゞ蛇、蛇、蛇だ。

今日のシャムは蛇の國である。首府バンコックの庭や園まで蛇の巢だ。その中には夜になるとかすかに笛を吹くやうな音をたてる種類もあり、大都會のまん中でそんな音響を耳にすることも珍らしくない。もう大分前の話だが、蛇に噛まれた患者でバンコックのパスツウル研究所で治療を受けたものが八百名に達した事實もある。(ルイ・パスツウル、一八九五年に死んだフランスの細菌學者。狂犬病の豫防注射を發明したフランス醫界の國寶的存在である) 八百名といふ數字は驚くべき現象である。蛇といふものは元來臆病な蟲で、ほんのさゝやかな物音にも逃げ出すのだから、さういふやつに八百名の人間が噛まれたといふことは、取も直さずバンコックに棲む蛇がどんなに多いかといふ事實を裏書きするに十分であらう。尤も、噛まれた者は大部分、郊外のパッデイ農村の百姓だつたが、それにしては蛇の多いことは大したものなのである。

蛇に噛まれた患者を治療するための血清を作るには、直接蛇の血液を利用することは今日では誰も知つてゐるが、その血清を取るために蛇その物を培養し飼育してゐるところは、今日世界中でたゞ二箇所しかない。其の一はブラジルに在り、其の二が此のバンコックに在る。此の後の方が今云つたパスツウル研究所なのである。



私の申出でを二つ返辭で引受けて案内に立つてくれた親切な蛇學者は、まだ若い栗色のシャム人だつた。——蛇の飼育箱は、セメントで固めた蜜蜂の籠にちよつと似てゐる。小さな美しい庭の中で、土を一米半ばかり掘つてある。細長い濠があり、すべつこいセメントの壁をめぐらして外へ出られないやうにしてある。

先づ取つきは王様コブラ、人間を襲撃するやつはこの蛇だけである。私は大いに敬意を拂つて恐る恐る檻を覗いて見たが、生憎と御他行中と見え影もない。飼育係りの者が、杖で檻の入口の穴を突いて見た。一度二度三度——三度目に、パッと電光のやうに躍り出た。まるで弦を放れた箭の如く、まつすぐに芝生を這つて行く。全長はかつきり二米もあらう。芝生から濠へさつとすべり落ち、美しい鎌首をもたげて氣持よささうに泳いでゐる。

此の蛇は現在のところこれ一匹ださうだ。王様蛇に噛まれると絶対に救からない。めつたに捕へられない理由は説明されるまでもなかつた。

お隣りを覗くと、此檻は満員の盛況だ。普通にいふコブラで、こいつに噛まれても四時間から六時間以内に死ぬさうである。前のコブラが王様なら、こいつは卑俗な賤民でもあらうか。インドを旅行した際、到る處で見た拔殻は、では此のコブラのだつたかと氣がついた。番人がその檻の一つを持ち上げて、によると絡みあつてゐる塊りを芝生の上へぶち撒いた。絡みあつた身體をほぐし合ひチロチロと舌をなびかせ、小さな眼玉を憎さげに光らせて、鎌首をキツと擡げる。とたん

に頸の邊が恐ろしげに膨らんでまるつこい顔になつた。暫らくそのまゝの姿勢で凝つとしてゐたがやがてだんだん毒氣が抜けてきた。蛇どもは、杖を持つてゐる番人が分つたらしい、従つて無作法に眠りを覺まされた理由のみこめたらしい。またそろ／＼とお互に絡み合つたり、二三尾はのろると芝生を匍ひだして朝の寢覺の沐浴に濠の方へ降りて行つた。此の中の一尾だつたらうか、小さな灌木の下で、蛙を半分呑みかけたまゝ這ひ廻つてゐるのがある。此のコブラの別荘をかこんでゐる濠には蛙が澤山ゐるが、蛇とは大變親密らしかつた。中には蛇の長い身體をメリイゴオランドに利用してゐるやつも尠くない。いきなり蛇の背中へピョイと乗つて、得意然と水面を運ばれてゐる。恐らく吞氣者の蛙たちは、いつか此の遊動木が自分をのんでしまふ時が來ることを、夢にも知らないであらう。

番人の一人が、一尾の蛇をさすまたのやうな棒でぎゆつと抑へつけたと見る間に、ひらりと宙に持上げて、頸のあたりを力強く握りしめた。それから片方の手で頸の邊をしめつけると、毒牙の中の毒がポタリと落ちる。滴は硝子皿で受けるのである。一匹のコブラでは一滴しか出なかつたが、二番目のやつでは五滴から十滴ぐらゐも出た。毒液は無色澄明でちよつと油のやうである。毒を絞られたコブラは軽く芝生へ抛り出されると、何か簡単な手當を施され、のろのろと這つて行く。

此の毒液を馬に注射するのだが、その量は驚くなかれ五十人の人間を殺すに十分なのである。この注射は再三反覆される。その間に馬の体内では抗毒素が發生して來る。で、いよいよいよいよと云ふ



時期を待つて、その馬の血をざつと二立<sup>リットル</sup>から四立も絞る。血清は此の中から作られるのだ。どんな強い馬でも、この荒療治をやられると大抵二ヶ月で参るといふが、さうなると直ぐに牧場へ放して休養させるが、すつかり恢復<sup>ホウフク</sup>するまでには一二年はかかるさうである。

なる程、さう云はれれば、さつきから向うの原で幾頭も散歩してゐた。みんな平和さうにつき近くまでやつて来て草を食べてゐる。彼等もやはり、濠の蛙と同様自分の運命を知らないのであるであらう。また、<sup>カキ</sup>塙から好奇の眼を光らして覗きこんでゐるシヤム人たちにも同じことが云へる。彼等もやはり、やがて之等と同じ長蟲に噛まれる日があることを知らないのだ。とにかく萬事につけて平和なのんびりした國柄である。

さて、今度はコブラの毒を絞る光景を撮影しようと思つて半身を踞めると、コブラ群がはつとしたやうに立ち直つた。蛙や番人や白い手術着の研究所員たちならよく見覚えがあるだらうが、私のやうなのは始めてだと見えて、例の首元をふくらませ、チロチロ舌を翻へしながら威嚇するやうに私の方を睨んでゐる。私が彼を見つめてゐるのに負けない氣か何かで、彼も私を睨み返してゐるのだ。私は圖々しく、番人の眞似をして蛇の這ひ廻る間を行つたり來たりした。もうすつかり、コブラに對する敬意を忘れてしまつたのである。

コブラの檻の近くにもう一つ、<sup>マヒシ</sup>蝮蛇を飼育してゐる檻があつたが、そこまで覗く興味は私には無かつた。蝮蛇も二米位の長いやつで胴は三角で肌は黒と黄だつた。見るからにうす氣味の悪い生物

である。番人が、その黒と黄のんだら染めの長いやつを二本、尻尾をつかんでぶらさげ、撮影させてくれた。蝮蛇は憎々しく長い身體をくねらせて鎌首を擡げ、番人の手に噛みつかうとする。だが此の番人は既に三回も噛まれてその度に注射したとかで、『もう免疫ですよ』と澄ましてゐる。

此の蛇園にはもう一つ、大蛇<sup>オイトン</sup>といふ蛇がある。まだ子供で三米位しかないが、將來は七米位までに成長するやつだ。大蛇は周知の如く毒蛇ではないから、これは云はゞ此の研究所の蛇園の飾り物なのであらう。

さて、かやうな毒蛇に噛まれると、いろいろ悲惨な病徴を惹起すが、最後に現はれるものは必ず死と決つてゐる。コブラの毒は脳神経を胃し、心臓と肺臓を麻痺させる。蝮蛇にやられると壞血病になる。それから到る處に繁殖してゐる普通の水蛇に噛まれると、鼻血が出たり口中に出血を見たりする由だ。

だが、血清の効果は實に素晴らしいのである。『時々、此の研究所へ、死にかけた本當に蟲の息の農夫が擔ぎこまれるんですよ。』と、案内してくれた若い醫師が話した。『それへこれを注射すると、とたんに心臓の活動が始まつて數日後にはすつかり回復します。たゞ死んでから擔ぎこまれたのでは手の下しやうがありません。時々さういふ例があつて困るんですがね。さうでさへなければ此の血清の效驗は絶對なんですよ……』

シヤムには全地に亘つて同じやうな注射機關が設けられてゐる。尤も、人間砲彈でも利用しなく



ては間に合はないやうな遠隔の僻地だと無いかも知れないが、そんな土地でも、噛み砕いた草木の葉などで療治してくれる漢法醫がゐて、けつかう役に立つらしいし、實際にも、救かつた實例が相當あるといふ話だつた。

水牛狩りや虎狩りに、國境を越えて佛領交趾支那へ行つてきた、或るデンマアク人に聞いた話だが、一夜、土地の住民が蛇に噛まれた苦力を一人、彼の宿つてゐる山小舎へ、擔ぎこんださうである。もつと詳しく云ふと、或るフランス人の鐵道技師が、此の苦力を供につれてやはり附近の山で狩獵をやつてゐたのである。そして射撃した獲物を取らせに、密林濕地の中へ苦力をはひらせたその際に、蛇にやられたのだつた。一方、そのフランス人は獵に熱注したあまりだらう、蟲の息になつてゐる苦力を置き去りにして何處かへ行つてしまつたらしい。デンマアク人は止むを得ず苦力を引受け、いろ／＼と手當をして見た。傷口を切開して血を吸ひ出してもみた。が、さういふ一切の努力も水泡に終つて、苦力は二時間ばかりもがき苦しんだ揚句、見るも無殘な死をとげたさうである。

ついでにもう一つ、これは私自身の體驗した蛇話を書き添へよう。今度の亞細亞の旅行では、ずるぶん高山や幽谷なども通つてゐるが、蛇に出會つた例はめつたになかつた。たゞベルシャ（今のイラン）を旅行したとき、この毒蛇に、姿は見なかつたが、襲撃されかけたことがある位だ。それから此の國へ入つてから、一度は戎克でメナム河を降つた時小さな蝮蛇に覗はれたのと、二度は上

海の港内で乗つてゐた屋根舟の中に、長いやつが三匹もゐて驚ろいた記憶と、此の二回位なものであらう。前の場合は、細い小さいやつだつたが、毒蛇であることは疑ひなかつた。ちよつと私が動いたとたん穴の中へ隠れてしまつた。後の場合は、毒蛇ではなく、水夫たちが權で捕へ、凱歌をあげながら簡単に叩き殺したやうに記憶してゐる。

### シヤムの死觀

友人の滞在してゐる家の主婦が死んだのである。但し今日や昨日のことではない。もう三ヶ月も前の話だ。ところがその屍體がいまだに私の友人のゐるその家に在るのである。

友人が耐りかねて主人に訊ねた。『奥様はもう直きお葬ひでせうな？』

『さあ、あと二ヶ月も経ちましたらね。』とそのシヤム人は笑つて答へた。『あいつがまだ此の家にゐると思ふとなかなかいゝもんですよ。』

死んだ主婦は、一番上等の座敷に置いてある。銀絲の飾り玉を下げた四角な棺の中に入れられてピラミット型の段々のやうな上に安置されてゐるのである。彼女の寫眞、朗らかに微笑んでゐる等身大の肖像が、黄色の布に捲かれて此のピラミッドの傍の畫架にかゝつてゐる。訪問客はみな、これを見たら直ぐに故人の容姿を思ひだすに違ひない。此家の主人は裕福だと見えて、白布をはつた



ピラミッド型の段々に、適當な飾りつけが豊富にしてある。花を挿した支那焼きの花瓶、時計、燭臺、花鉢、石油ランプ等から、故人が自慢の物だつたと思はれる歐羅巴風の玩具や置物などがいろいろと並べてあるのだ。全體の感じがちよつと、私の故郷の年の市などに見られるあて物屋の屋臺に似てゐた。棺の上の壁には、金紙で拵へた花輪が吊され、舵をぶつちがへにした型の救命囊も並べてあるが、これは確かに、此家の主人が後援してゐるボート俱樂部からの贈物に違ひなかつた。天井からも吊鐘型の花懸燈アムベールがさがつてゐる。半分は紙の造花、半分は本物の花だが、組み合わせ方が巧妙な上に、ヒヤシンスのやうな匂ひがぶんぶんするのでちよつと、そんなからくりには氣がつかない程だつた。

に、こ、こして、これつばかりも悲しみや苦惱の痕を止めない主人は、こんな立派な棺ひつぎを見せてくれた上に、煙草まで勤めて御緩ごゆつくり召上れと云ふ。勿論、棺の中の主婦にも異存はない筈である。床には絨氈が敷つめられ、片隅に美しい清潔な座蒲團が二三枚重ねてあつた。これは三日目ごとに讀經をあげに来る僧侶用である。讀經用の部厚な絹表紙の經文も、上の銀絲の織物でくるんだ棺の上に結びつけてある。これは、死者と僧侶との結びつきの緊密であるやうにとの呪まじひみたいなのだ。反對側の方には、此處にも座蒲團や茶道具などが端然と置いてある。何しろ僧侶たちは朝から夕方までゐるのだから、食事やお茶の支度も用意して置く必要があるのだ。

更にまた、毎週一回、音楽隊か芝居の俳優團が必ずやつて来て、故人の靈を慰めるのが重要な

目的だが、その席には一門の親戚も招かれ友人たちも御馳走によばれるのである。かういふ情景を見下して、棺の横の寫眞は朗かに、嬉しげに微笑んでゐるのだ。多分此の主婦は、棺の中で、『まあ宅うちの方があたしよりよつぽどきちんとやつてるわ。』なんて呟いてゐることであらう。

主人は、別に臭氣がこもつてゐるわけでもないのに、天井の通風機のスキッチをいれた。尤もこれが暑い夏期だつたら或ひは何うか分らないが。——『實はもう婆羅門さんには、よい日を選んで焼いて下さるやうに願ひしてゐるんでしてね。』

シャムの人は、ちよつとした儀禮をやるにも、婆羅門の星占ひに相談するのである。結婚、火葬から國王の戴冠式その他の重大な國家的行事の一切が、先づ前もつて星占ひの測算による適當な日を待つて行はれる。萬一、大空の星の氣配けいばいに何等かの疑はしい状況が見えると、既に決定された期日も容赦なく、一週日なり一ヶ月なり延期になるのだつた。従つて當然此の場合、行事の内容によつては相當大きな損失を招くこともありがちである。

シャムが佛敎國になつてから既に數百年も経つたのに、婆羅門の勢力はまだ相變らず盛んなものである。高等教育を受けた階級の計畫したことさへ、豫め婆羅門の星占ひを伺がつてからでなければ實行は不可能だつた。こんな話がある。やはり私の友人から聞いた事實談だが、某といふ徹底的な歐風教育を受けた學者のシャム人が、歐洲通ひの獨逸汽船に乗船の約束をしておいたのである。ところが偶たまま此の友人のところへ、今云つた獨逸汽船が香港で不慮の災難に遭つたため、豫定の期



日に出帆し得ないといふ知らせがあつた。そこでさつそくその手紙を持つて學者の家へ報告に行く  
と、意外なことに、當の本人は一向慌てる容子もなく、おちつき拂つて下のやうに答へたさうだ。  
『いや、つい二三日前だが、婆羅門さんが見えて、此の獨逸汽船に乗ることは見合せると仰しやつ  
た。それで實は私も取敢へず此の出發は當分見合せることに致しました』――

今日はヌラケット寺院で大規模な葬儀が行はれる筈だ。陸軍少佐一名同じく大尉三名、都合四人  
の將校の遺骸を焼くのである。私は別に招待を受けなかつたが出席して見ると、何の拘はりもなく  
歡迎された。そして、他の會葬者と同様に手巾と小冊子の詩集を貰つた。

何百人とも知れぬ會葬者が、自動車、馬車、人力車などで續々と駆けつける。紺の絹製半ズボン  
に白い短衣を着た官公吏も多勢ゐたが、大抵は昔風の純白の喪服を着用してゐた。軍服の將校達、  
黄色の法衣を纏うた澤山の僧侶。婦人の衣裳は申合せたやうに全部純白である。遺族の人々だけが  
一室に集つて、一般の會葬者は、内苑の庭椅子に腰かけてゐる。ちよつと何かの野外集會の感じだ  
つた。

木琴、銅羅、太鼓、クラリネット等による大規模なシャムの管絃樂團が、殆んど間斷なく演奏を  
つゞけてゐる。軟かな韻律が、しつくりと流れ去る。曲は、どうやら劇場やその他で演奏されるの  
と同じやうだ。國歌が演奏されると、同一齊に起立する。これは、何かの事情でシャムに漂着し

た或る獨逸の音樂家の作曲したものである。火葬の際にもやはり時折り歐羅巴風の樂隊だつたが、  
何んとしても時々調子の狂つた個所のあるのはやむを得ないと思つた。例へば、嚴肅なるべき葬儀  
の席上で、此の樂隊は平氣で、『狐よ、お前は鷲鳥を盗つたね。』などといふ、歌謡を演奏するの  
である。

茶やソオダ水が給され、會葬者たちは、喫煙し、雜談し、時にはどつと哄笑する聲もきこえた。  
會場の空は嚴肅ではあるが決して悲しみに沈んだものではない。いやむしろ平和な明朗な空氣だつ  
た。日光はさんさんと降りそゞぎ、灌木も林も今を盛りと咲き匂つてゐる此の葬儀場は、それだけ  
死の世界からは遠いやうであつた。たゞそちこちにゐる會葬者の中の誰彼が、美しい天蓋をかぶせ  
た棺の上の故人の寫眞を、思出深さうに眺めてゐるのが幾分それらしいものを感じさせるだけだつ  
た。棺の上の寫眞は、何れも立派な、典型的の武人らしかつた。

天蓋には、美しく趣向を凝らして麻布、毛氈、花などが飾りつけてあり、ちよつと見た眼には象  
牙を削つたのかと思ふ位だつた。紺青の敷物の上に立つた此の天蓋は、然し本當の象牙ではない。  
僅か半時間で、皮を剥いたバナナの幹を巧妙に削つたものだつた。

やがて、黄色の法衣を翻へして多勢の僧が祭壇の階段を昇つて並び、各自に祈禱を捧げて贈物を  
頂戴した。たいていは法衣用の黄ろい反物である。最後に四人の、これはまたひどく可愛い坊さ  
んが出てきた。四歳から八歳位の男の子で、いづれも頭をクリクリに剃上げてゐる。故人の愛兒た



ちだつた。服喪の期間中は、寺に預けられてゐるのである。

棺の被覆おほふくがとられ、本當の棺が假りの箱から引出された。いよいよ火葬の儀が始まるのである。會葬者一同が、さつきの僧侶たちと同じやうに棺臺きんたいの前の階段きざはしへ密集する。階段に置かれた籠かごの中から、細くきれいに割つた木片きざれを取り、各自に蠟燭の火をうつして棺の下へ投げる。そして寸時ちよつと拜んで生前のお詫びをする人もあらうが、大抵は頭をさげるだけで、中には古式どほり跪まづく者もあつた。續いて婦人の會葬者が登場する。みな純白の喪服で、脛から足は栗色の肌を露出してゐる。檳榔子を噛むせゐで齒はせまつ、黒だ。この間にも、樂隊の演奏は續いてをり、最後に子供たちの告別の拜で終りである。

會葬者の全部が、死者への最後の禮を果し得ないうちに、すでに投ぜられた數百の燃え木によつて四つの棺は、長い炎に見る見る包まれて行く。それを防止するため、時々、火勢を弱めたり、焰を叩き落したりする。中には、一番効果のある水をかける人もあつた。

會葬者の大部分が引退つた後も、棺の前に額づいてゐるのは身内や親戚關係の人々であらう。將校が一人、押し合ひへし合ひする貧しい人達の群れに、投げ銭をしてゐる。銅銭ばかりでなく檳榔べいろう子の實みも交つてゐる。いつの間にか寺の屋根が、影を長く庭上に曳き始めた。火葬するに最も適した時刻である。烟花はなびの藥筒が爆裂し、爆竹はくちやくが火を噴く。そんなところはまつたく支那式である。

一般會葬者の投げた燃え木の木片きざれや蠟燭などが、棺の下の穴へ纏めて投げ込まれ、焰は勢よく炎

上し始めた。棺の蓋ふたが取外されたので、開放された棺の中から噴煙が濛々と渦を捲きあげる。四つの棺には一人一人、火の番がついてゐて絶えず火勢を管理してゐる。

燃焼時間はかれこれ一、二時間も續いたらうか、濃厚な煙の塊りが寺の内苑をいつばいに立ちこめた。

若い將校が一人、ソオダ水をすゝめながら私に、この煙ではたまらないからあちらへ移轉してはどうかと、懇懇に勸告した。實際に、その頃から私の席へも、骨の焼ける臭氣が流れて來たのである。かういふ匂ひは、バンコックの市街でも、ひつそりと暮れ落ちる宵闇の中でよく嗅がされたものである。これはメナム河の對岸の舊バンコックにある大火葬場から流れ上つて來る煙だつた。

やがて、槍のやうな棒を擔いだ寺男が一人、噴煙をくゞつて登場した。その棒で棺をつき刺し、こづき廻して、火がよくまはるやうにするのである。私は、棺の一つを覗いてびつくりした。中に入つてゐるのは遺骸ではなく、すでに黒焦げになつてゐる麻布に包まれた細長い包み物だつたのである。乾ききつて萎縮した筋肉の殘滓は既に火葬の前日にきれいに削ぎ落されてゐたのだ。

一束にして包まれた骨である、小さな、何物とも見分けのつかないこの一束ねの骨は、もはや人間の遺骨とは思へないものだつた。

一時間後には此の一包みの骨が灰に成つた。叮嚀にかき集められ骨壺へ納められる。此の壺には時々見事な彫刻なぞの施されてゐるのを見受けるが、シャム國內なら、どこの店でも買へるやう



だ。大きさは手頃な花瓶位のところである。

以上述べた葬儀次第は、先づ中流以上の階級のもので、これが諸侯貴族階級だと儀式は数日から数週に及ぶことさへ珍らしくない。棺を安置する祭壇も、特に藝術味の豊かな装飾が施されるのでその費用なども、例へば先代の國王の火葬の際には約六十萬マルク(日本の三十萬圓弱)以上と傳へられる。現に、私がシャムを訪ねた當時も、宮廷に大工がはひつて、新しいお堂を建てゝゐるが、これは國王のお妃の母君の遺骸の火葬場であつた。數ヶ月も前から建築に着手された此の立派なお堂は、可成り儉約して建てられたさうだが、それでも二十萬マルクはかゝつたといふ。恐らくこれがシャムに行はれる國葬の最後の豪華版になるのであらう。

現に私も、宮廷専用の恒久的な火葬場設立の企劃があることを或る人から聞いてゐる。

だが見たまへ、同じ火葬でもこんな單純質素な形式もあるのだ。四人の將校の棺が、焰に包まれてゐる祭壇からちよつと離れた所で、老人が小さな棺を据えてゐる。全然一人で何もかもやつてゐる。まあ、私もそこへ行つて見たので會葬者は合計二人といふわけだが、老人は一抱へほどの薪を引きすつて來ると、小さな山に組立て、氣の毒なほど小さい棺をその上に据えた。黙々として一言も發しないのである。

暫らく待つうち、寺の中から坊さんが<sup>そくき</sup>と出て來て棺の前に兩手を合掌し經文の句を誦した。

その間にも薪はパチパチと爆ぜて燃えあがり、忽ちにして小さな棺は噴煙と火焰の中に見失はれたのである。

たのである。

## 北へ行く

密林<sup>ジャングル</sup>濕地帯の中で火が燃えてゐる。大昔からの原始林の影を黒々と浮べて、幽靈火<sup>ホウレイカ</sup>のやうに燃えてゐる。山火事のやうだ。山林の上方に火の環が見え、熱氣が焰のやうに煽られてゐる。そこら中で燃えてゐるらしい。これは農民たちの仕業だつた。密林濕地帯や原始林を開墾しようとしてゐるのである。空氣ががひどく暑いのはこのためだつた。

鐵道の堤近くにも火の手が迫り、列車の窓から見ると、赤々と燃えた立木の煽りで顔が焦げさうである。かうやつて年々、軌道の兩側の原始林が約十米<sup>メートル</sup>ほどの幅で焼かれ開墾されて行くのだ。

だから、どうかすると列車は火焰のまつ只中を走らねばならない場合がある。原始林や密林<sup>ジャングル</sup>濕地帯との戦闘は殆んど連日のやうに繰返されてゐるのである。もしこれを放置しておかうものなら、猛烈な熱帯地の繁殖力によつて、枕木も軌道も、停車驛までも二年か三年の中に完全に蠶食されてしまふ。一群の寺やお堂がそれ等の森林の中に埋もれてゐる例は到る處に見受けられる。佛塔<sup>ブツ</sup>などの上に一抱へもある大木が亭々と繁つてゐたりするのは、樹根が二階建ての石壁を貫いて内部から成長した結果だ。



今我々は、バンコック發の寢臺も食堂もある立派な客車で、シャム北邊の寺院町ラムパン及びシエンマイまで一晝夜で走つたのである。以前なら二三月もかゝつた行程だ。勿論當時だつて屋形船や戎克船はあるが、それを利用出来るのは船を泛べるだけの水利がある地方だけだつた。

シャムの鐵道工事は優秀であるが、この設計や工事を指導したのは獨逸の技師である。まさに驚ろくべき實蹟だ。些かでも信頼し得る地圖一枚なしに、これだけの鐵道を建設したのである。先發の測量隊員は、此邊の高い山に分け入り、大きな樹の梢によち登つて測量したり、時にはまた原始林の中を一步一步ときり拓いて行かねばならぬ場合も尠くなかつたであらう。

車中で、一人のイギリス人の技師と出會つたが、彼は自分と同業の獨逸人技師の業績について讚嘆を惜しまなかつた。その話によると、シャムの勞働者は勿論、北境に住むラオス族やカムス族にいたるまで、此の熱氣に泡だつ密林濕地帯での苦役には避易したさうである。止むを得ず支那人苦力を連れて來たが、これもやはり、熱病を恐れて容易に承知しない。結局こんな條件で契約が出來た。萬一、熱病に仆れたら葬式を出してやること。もし苦役に堪へ抜いたら、囊いづばいの賞與金を與へて故郷へ送り還した上、何か好みの商賣を始めさせること。といふ二つの條件の下に、之等の支那人を使ふことが出來たのだといふ話だつた。

今、我々を乗せて山を越えて走るまつ黒な機關車には見覚えがある。これは以前、サマデン及びサン・モリッツへの、二千三百十五米の高い峠を往復してゐた機關車だつた。

原始林の中にぼつんと立つてゐる、淋しい幾つかの停車場に、黄色い法衣を着た僧侶が待つてゐる。半裸體といふよりも五分の四まで裸體の男たちが、長い辨髪をふり立て、まつ黒な肌に刺青をして歩いてゐる。ちよつと見ると暗碧色の水泳パンツを穿いてゐるやうだが、實はさにあらず、肉體の最も大切な部分を裝飾するための刺青にほかならないのである。森の土のやうにまつ黒な、素裸の子供たちもゐる。シャム人、支那人、ラオス族、カムス族等々、彼等の財産を二つの籠に入れて天びん棒で肩へひつ擔いでゐるものもある。素絹のやうに光澤のある肌と、形のいゝ頭に房々とした髪の毛を塔のやうに結びあげたビルマの女たちもゐる。背景はすべてバナナの畑、ココ椰子と砂糖椰子の林だ。――

眼下は深い深い溪谷。すつかり水の乾上つた谷底に、チイク材の積上げられた間を動いてゐる象の姿が見える。汽笛が鳴り、機關車の轟音が響くと、裸體の密林農夫が、一人また一人、鐵道の堤に飛び上つて珍らしさうに見物してゐる。いかにも原始林に働く人達らしい。

此邊の軌道は、山林や密林濕地の中に高く盛り上げてあるので、同時に、軌道の兩側の狭いところが唯一の通行路にも利用されてゐるのである。

バンコックからシエンマイへ通ずる此の南―北線は、云はゞシャムの脊椎である。これを樞軸として國內各地への連絡路が四通八達してゐるのだ。



デンヤヤ驛から出る枝線は古都ナンへ通じてゐる。終驛のシェンマイから荷馬車道を原始林を縫ふ隘路が、ビルマの山中へ通じてゐる。シェンマイは往昔のラオ王の王城市であり、寺院やお堂なぞが夥たゞしく残つてゐる。今云つた荷馬車道や隘路を辿るには、驢馬、馬、象などを利用するのである。宿屋のやうなものは一軒もない。寺やお堂の中で眠るか、場合によつては佛陀像の前の地上に寝床を拵へねばならない。ゴオタマの直接な庇護の下に、悪靈と迫害者を却ぞける弘明の諸靈にみとられて休むのだから、たしかにこれは大銀行の金庫の中よりも安全であらう。食糧は、竹の筒の中に米を入れて持参すれば足りるし、その調理法も、おかゆのやうに煮ればなかなか美味である。ラムパンとシェンマイとは鐵道經營の宿屋があり、建物も頗る美しいが、支那人が管理してゐるため、みだらけで不潔で、然も臆面もなく暴利をむさぼる。紐育あたりの一流ホテルと同じ位の宿料を請求されるのだから呆れた。

シェンマイには些やかながら映畫館が一つあり、素晴らしい市場街が一つある。町の顔役たちが尻をふりふり闊歩してゐる光景はなかなか粹で愛嬌がある。美しいビルマ娘たちが、大きな日よけ傘の下で休んでゐる。素絹のやうな髪の毛をピラミット型に結び上げて花をさし、青い紙巻の長い巻煙草を口にくはえてゐるところを、さつそくカメラを向けたら、まるで羚羊のやうにやさしく顔をそむけた。此の都では、いつもニヤニヤ笑ひを浮べてゐるあの支那人の勢力が斷然光つてゐる。支那民族の伸展力といふものは、濠洲から蘭領印度の島々までも押へてゐるのだ。もし彼等の背後

に政治的の力といふものがあれば、決して侮どり得ない世界的の一動因力となること疑ひないのである。明るい寛衣をつけた一寸法師のやうな僧侶が巻煙草を口にして散歩してゐる。何れも十歳から十二歳ぐらゐの少年だ。それが支那産の日傘をかざして、煙草を吸ひながら市場の賑やかな街を歩いてゐるのである。

商賣は此處では遊びのやうになつてゐるらしい。一打の鶏卵があれば、市場に出て朝の半日を輕口きいたり値ざられたりして過すに十分のやうだ。砂糖黍をうすく切つて、細い竹の棒へ扇子のやうにきれいにさし並べたのが一本二錢か三錢位。樹皮の紐に貫いた檳榔子の果の一さし、或は檳榔子の葉を何枚か重ねた一束、何れも同様な値段で賣つてゐる。籠へ山盛りのバナナ、寺や家庭の佛壇に供へる細い黄色い蠟燭、支那産の麵類、引伸ばしたガラスのやうなマカロニ。それからさまざまな歐羅巴製の雜貨、安い反物、アルミニウムの器物。

ところがこれが支那人の店になると、何百といふ酒の罎が甚だ魅惑的に並んでゐる。ウキスキイ、ラム、シャンパン、葡萄酒、ビール。歐羅巴の悪魔はシャムの北邊までも侵略してゐるのだ。賣價は甚だ區々である。砂糖黍やココ椰子の實は、と訊くと、支那人の店主はニヤニヤ笑つてゐる。歐羅巴やアメリカが直きに來ますよ。——なるほど、さう云はれれば既に此のシェンマイにも約十二臺ぐらゐの自動車走つてゐるのだつた。

シェンマイは、人家の數よりも寺院やお堂の方が多いのである。到る處で、寺の高い屋根や切妻



が椰子林の間に聳えてゐる。入口の石段には必らず、古びて苔の生えた石の獅子が左右に立つてゐる。厩大な龍が一對、大口を開いて、古びた寺院群への通路を構成してゐる。大きな狐を描いて絡み合つてゐる蛟龍の胴の長さは、おそらく二十米にも達しさうだ。一つ一つの寺やお堂には、それぞれ柱や扉に、古い珍らしい彫刻がしてある。大方はもう傾むきかけてゐるが、その中に一つ、木の香も新しい禮拜堂が聳え、黄金の飾りや五彩きらびやかな瑠璃の満艦飾で周囲を壓倒してゐる。新しいのを建てるのも結構だが、古いやつを頽廢に委せて置くのはどうかと思ふ。或る寺の古びてぼろぼろになりかけた藏書が、運び出されてゐた。實に見事な漆器の箱に古い文書がきちんと詰めてある。バンコックの博物館へ送り出されるところだといふ話である。

或るお堂の中では、何かの佛事が行はれてゐるところだつた。女も男も床に跏まつて、二三人の女は太い葉巻煙草をくゆらしてゐる。佛陀は、女の喫煙を禁じないのである。彼等の持つて來る供物は、美しく編んだ籠に入れた花、煙草、バナナ、果實、蠟燭。金満家らしい男が、紙製のお堂にこれも紙細工の象を入れた素晴らしく大きな立派なお供物を持つて來たが、中に入れられないと見えて外に立往生してゐた。象は、胴を赤と白で塗り分け、まつ赤な眼で、周圍へ集つてゐる子供たちをぢつと見据えてゐる。敬虔な信者が一人、歌ふやうに經文を誦し、黄色の法衣を纏うた僧侶が一人、巻物をくり展げて經文を読みあげてゐた。女たちは葉巻煙草を床に置き、祭壇の前に進んで何事か祈念したり、お供物を展げたりしてゐる。それから點火した蠟燭を、微笑したまふ黄金の佛

陀の前に立て終ると、これで彼等の禮拜は終りとなるのだ。

都會の周圍にも、到る處に半壞の寺院やお堂の廢墟が、密林の梢からつき立つてゐる。四壁に、跌座する諸佛の素晴らしい浮彫をめぐらした、ごく古い寺もあつた。これは石垣の面へ鐵のやうに堅牢な石膏泥を以つて塗上げたものであるが、見事な頭部は大部分壊け去り、浮彫の一部もすつかり消失してゐるのがある。然しそのために、基礎工事がどうなつてゐるかは反つてよく認められた。胸は粘土で張つてあるのである。宗教上の情熱が最も華かだつた時代のことだから、かうした佛像の大量製作が勢ひ工場生産式に流れたらうことは、異とするに足りないであらう。また、古いお堂の中に大きなまつ黒な佛陀が安置してゐるのもあつた。こんな、密林濕地帯の中に放置された佛陀像の前にも、やはり花が供へられ、小さな蠟燭が灯されてゐるのである。

ラムパンでは、大通りのまん中で、マンハイム製のま新しいダイゼルモータアを見つけた。ミューンヒェン生れの獨逸技師が、此の町に電燈の配電所を建てようとしてゐるのである。ヘルメットをのみだに被り、全身ぬれ鼠のやうに汗を流してゐる。配電所の小さな建物はまだ屋根も窓も扉もないのである。だがもう二、三週日もして雨期が始まる頃には、すつかり出來上るであらう。ラムパンの古都が、電燈の光に照し出される日も、もう間近かい。素朴な市民は只管に美しいモータアを眺め讚嘆してゐるが、さしあたり、此の機械がどういふ活動をするのかは知らないらしい眼つき



だつた。

ラムパンから立派な自動車路が一本、約二百五十キロ米のお伽の森のやうな原始林を貫ぬいて北へ、シェンライといふ小さな町まで走つてゐる。此の原始林を貫ぬく自動車路が驚くほど、頻繁に利用されてゐるのだつた。ために數へて見たら、一日で私の行會つたアメリカ會社製の乗合バスの總計が二十七臺、どれもこれも乗客と貨物で満員である。そんなに素晴らしい道路だけに、シヤム北境の小都會シェンセンへ近い終りの四十キロ米の見窄しさが目立つのだつた。元來此の通路は自動車路を目的で開いたものでなく、シヤム國王が北方巡幸のために臨事に拵へたのである。従つて、ペルシヤの荒野やインドの密林濕地帯に較べられるやうな物凄しい個所がそのまゝ残つてゐるところも尠くない。そんなところを、夜中に、一步一步と車を進めるのである。幾度、顛覆の憂目に會ひかゝつたか知れない。然も、やつとさういふ難路を通り抜けてほつとしたとたんに、こん度は濕地帯へ突込んでしまつた。たうとうその距離だけ、とうど燃えさかつてゐる密林濕地帯を通らねばならない羽目になつた。自動車の持主の支那人がすつかり震ひあがつて、ひどく興奮してゐたのに反して、此處までお供してきた私の操縦手のペルシヤ人は、何んと沈着な勇氣のあるやつだつたらう。彼は、自動車といふ文明の利器には斷じて故障の起り得ないといふ信念と鐵壁の如き自分の技術に、滿腔の信頼をかけてこの難路を克服したのだつた。

シヤム北邊の小都會シェンセンには、青銅や石の佛陀の巨像が、群をなして、原始林の叢みの中に林立してゐる。かつて、これ等の一つ一つを風雨の前に庇護してゐたお堂や禮拜堂の建物は、既にいつの日にか崩壊し去つてしまつたのである。爾來千年、此の夥たゞしい佛陀群は、神の如き平靜の中に、アナムの森の、霧たちこめる彼方を眺めてゐる。其處に佛陀の進路があるのだつた。アナムの彼方、廣茫千里の支那大陸を横斷して朝鮮半島へ、更に海を渡つて、日出づる極東の一島帝國へ。

俯瞰すれば涼々と泡だち流れるメコン河、源を西藏の高原に發し、鮮かな迂餘曲折を描きつゝ森林に掩はれた山々を縫つて南へ長く延びてゐる。

小さな我克船が一隻、彼岸に沿うて北へ舵を取つてゐるのが見える。支那へ行くのだ。

## チイク材

此の北境の何處まで深いか測り知れぬ山地は、際涯を知らぬ森林に掩ひつくされて僅かに一條の荷車道が、一面のチイク材をめぐつてうねうねと通じてゐるばかりである。此邊一帯が、英・佛の二三の商社とデンマアクの一商社の獲得してゐる特許權地區だつた。

ラムパンから北へ四十七キロ米の山ではまだ象が働いてゐますよ、と樵夫が教へてくれた。象は



云はゞ定期雇傭の人夫なのであつて、ちやうど今頃がその活動期だが、やがて夏休みを貰ふと遠い牧場へ休養に行く。勤勉な象一頭の価格は一萬五千マルクから二萬マルク位、(約七千五百圓から一萬圓)無論その能率如何によつてそれ以上になることもある。私は前後三回に亘つて、熱帯地の暑氣の中を、北境四十七キロ米のチイク林まで、働らく象を見に行つた。最初は休日で見當らず、二回目は更に五哩も遠方へ行つて留守、三度目に漸やく目的を達したのである。

北境四十七キロ米とある標石の附近から、一條の隘路が原始林へ通じてゐる。うつかりすると見損ひさうな隘路だ。それを歩いて五、六分も進むと、もう密林濕地と原始林とが我々を包圍してしまふ。お蔭で、無慈悲な灼熱の日光からは思ひがけなく避けることが出来たし、我々を取捲く緑色の海中のやうな暗さに、两眼も活々したやうな感じである。といふのが、だしぬけに深い海の底に降立つたやうな氣がしたのだつた。たゞそちこちに洩れる日光が燃ゆる槍刃のやうに、叢を貫いてきらめき、白く輝やいてゐる逞しい丸太を照らしつけてゐるだけだ。密林の外は勿論、殺人的の暑さだつたが、今この内部もまた孵卵暖爐の如きうん氣で、忽ち顔から全身湯瀧を浴びたやうになる。密林濕地帯といふやつは全然通行不可能だ。丈の低い竹その他の叢林が頑張つてゐる中から數本の樹幹がつき立ち、家よりも高い竹の一群が、二十本も三十本も一束になつて密生してゐるのである。中には二三本、折れて碎けてぶら下つてゐるのもあつた。葛に似た寄生植物がそれに匍ひ絡まつて高くのび、毒々しい莖色や赤色の花を、まるでななかまどの實のやうに咲きこぼし、樹々の

枝には蘭科の植物が寄生して實に美しいのだが、一々それに見惚れてゐられないほど、むつとするうん氣なのである。こんな密林濕地をきり開いて行く氣力のあるものは、たゞ象だつた。物音もなければ鳥一羽啼かない。全くの無の世界である。時々ギンギンと激しく打ち合ふ音がするのは、上空を吹く風が竹林の梢を吹き渡るのである。またピシヤリといふ音は、チイクの枯葉が落ちた音である。これは南瓜の葉ほども大きく、これが途方もなく高い枝から落ちて音を立てるのだ。だが密林濕地それ自身は沈黙を守つてゐる。神祕な慄然するやうな沈黙だ。

我々は一列縦隊で、樹の根に躓り易い隘路を互ひに警しめ合ひながら進む。隘路を塞いでゐる樹根はまるで大蛇のやうである。密林に特有の豹や、その他の猛獣がひよつとその邊の叢にひそんで此方を窺つてゐやしまいかと氣が氣でない。容子を氣取つたか、案内の密林人夫がかう云つた。『今頃が虎や豹には一番苦手の季節なんです。御覽のとほり密林濕地がこんなにカサカサに乾いてますから、遠くからでも足音が聞こえるので、やつ等めつたに獲物にありつけません。腹がへつてることせう』——だが、このことはまた逆に考へれば、滅多に現はれないとしても一旦現はれたとしたら、人間を襲はずには止まないごく危険な時期ではないだらうか。

此邊から奥地へかけて、密林濕地にも原始林にも野獸は澤山ある筈だが、一週日歩き廻つてもつひに水飲場所へ通ふ足跡以外には何一つ見當らなかつた。私の案内人は瑞西人だつたが、數哩距つた原始林の中に漆の木の畑を作つてゐると云つた。そしてつい昨夜なども、自動車を走らせてゐる



途中で、飛び出した野猪を一頭ひき殺したさうである。その以前にも一度、民家のすぐ傍で豹に出  
會し、生憎と銃がなかつたので拳銃で射殺したのだが、何しろ相手が手剛いので弾丸を二十一發  
つかつたさうだ。——だがこんなのは例外と云つてよいであらう。此の土地には一種獨特の狩獵法  
がある。獵師は、頭の上に懐中電燈か何かを堅く結びつけて夜の密林濕地帯を行く。すると此の光  
りに誘はれて野獸たちが出て来るから、それを待ち構へて狙撃すればいい。そして夜が明けてから  
昨夜の足跡を辿つて獲物の在所を探ねだすのである。およそ野獸といふやつは、彈丸が的らうと的  
るまいと、最初の一發でばつと遁去るもので、あの水牛でさへ、絶對絶命の窮地に追ひつめられた  
場合でも、めつたに獵師に反撃を加へなぞするものでない。危険はむしろ、傷ついた獲物に近寄つ  
た時に始めて惹起されるものである。——

農夫の一隊と出會した。竹の細い棒と紙で拵らへた不細工ながら誠心のこもつた小さな祭壇を擔  
いでゐる。どこかの寺へ、雨乞ひのお祈りに行くのである。

ふと、密林の奥に可愛い、聲が揚るのをきゝつけた。子供が二人、穴の中へ這ひこんで木の根を  
掘つてゐるのである。ジャングルの神祕なふところの中で、たつた二人きりで平氣で遊んでゐる子  
供たちには、何等の恐怖も不安もないのだ。云はゞ此處が子供たちの家であり、外國の作家が描く  
旅行記の恐い情景などは夢にも知らない彼等の遊び場だつた。

原始林に住む人間は、例へば汽車などの走るのを見ると恐怖感にかられるが、この涯しのないジ

ャングルなどは平氣で、何んの恐れげもなく分け入る。つまり原始林は彼の生地であり、ジャング  
ルのことなら何んでも知りぬいてゐるのだ。ガサツといふ物音から竹林の風にひしめく響きまで、  
何一つ知らないものはないのである。蛇などは、杖一本で追拂ふし、さもなければ簡単に叩き殺し  
て、聲一つ立てるものぢやない。——

新開地の灯が見える。掘立小舎が二つ三つ、牛車と原始的な厩舎。開墾部隊の屯營地だ。住宅ら  
しい作りは、監督の家一戸きりである。北境の住居といふものは、みな、細い竹を支柱とし、部屋  
は大抵地上から三米乃至四米位も高いから、やはり竹の梯子で昇り降りする。そのたびに、家がグ  
ラ／＼揺れるのである。壁は竹の細枝で編んだアンペラ、屋根には草がいつぱい葺き重ねてある。  
竹の支柱を緊縛する繩は木の皮だ。何から何まで原始的だが、涼しくてひどく居心地がいい。水桶  
に茶釜に筵が一枚、——開墾監督の住居の、これが全部だつた。

主人はゐなかつたが、召使ひが一人ゐる。栗色の肌をした少年で、ちよつと見ると女の子のやう  
な物腰だ。まつ黒な髪をぼつてり結んで緬ひ合せ、それが緩んで頭の上でゆさゆさしてゐる。腕も  
胸も脊中も、一面に細い紺色の線が縦横に走つてゐるため、ちよつと編目の細かい絹網か何かをか  
ぶつてゐるやうである。が、實はこれが禁厭の文身なので、悪靈、蛇、野獸、弓矢に鐵砲、コレラ  
その他の疫病、魔法、その他一切の危険を豫防するための禁厭なのである。これなら大丈夫、此の  
少年には何事の危険も起らないだらう。



此の竹小舎の前には、竹梯子と並んで、小さなちやうど鳥小舎位の守護神のお堂がやはり竹の支柱の上に祀つてある。小さな布片がぶらさげられ、板ぎれに一握りほどの米を載せてある。これは土俗でファイと呼ぶ神靈を祀つたものだ。ファイは、木にも岩にも水にも到る處に宿る靈なのである。ファイにも善靈と悪靈と二種あつて、此處に祀つてあるのは、竹小舎を保護するファイであらう。ファイを汚し冒瀆する者に禍ひあれ！北邊一帶に住むラオス族カムス族その他の原住民は、自分の生命にかけてファイ諸靈に獻げた信仰を守りぬくのだ。どこの部落でも、入口には必らず此のファイのお堂が建つてゐる。ファイは云はゞ、佛陀の威光を藉りる狐みたいな存在だが、佛陀はこれを見遣してゐるのだ。

『此の原始林には三十頭の象が働いてゐる』と、文身の土民は教へてくれたが、ではその場所は、といふと彼にはちつとも見當がつかないのだつた。象は始終見かけるのだが、何處から來て何處へ行くのか、そんな心配は此の文身君には全く無要なのである。ひよつとしたら河へ行つたかな？なぞと甚だ心細い返辭だ。

そこへ俄かに、荷車道の曲り角の方に、重い足音が揚つた。象である、熱帯植物の鬱蒼と生ひ茂つた山峽の盆地に、竹林と花盛りの樹々が煙花でもうち揚げたやうに谷を壓してゐる中で、象群は活動してゐるのだつた。

何百本とも知れないチイク材が、牛や象によつて山の崖から此の谷底へ引降されてゐる。象の任

務は重いチイク材の束を乾上つた谷の川床へ引すりこみ、次ぎの満水期にそれが流れ下るやうに配列することだつた。かうして年々十二萬本以上のチイク材が、パクナムポオの監督所を通過して流れ去るのだが、この監督所のあるパクナムポオは、北境に發する一切の溪流が、メナム河に合流する合流點なのである。メナム河に流水と共に流れ入つた各地からのチイク材約十五萬本が、更に下流のサイゴンに達する頃には約四十萬本に増加してサルキン河に流れこみ、流水と共にビルマのムウルメインまで降る。此のチイク材輸出總額がざつと六萬噸、シヤムは年々たんまり一千萬圓の利得をあげてゐるのだ。

象の脊にはマフウトと呼ばれる裸體の馱者が騎乗してゐる。大抵十二歳から十五歳位までの、すらりとした栗色の原始林少年で、日よけの鉢巻をしてゐるほかは殆んど素ツ裸だ。中に一人、膝から臍まですつかり文身をして、ちよつと股引でも穿いてゐるやうに見えるのがゐる。これはラオ族で、俗にラオプングダム(腹黒のラオ)と呼ばれる土人である。

馱者がちよつと尻を上下に動かすと、象はすぐに前進を始める。もし右か左へ迂廻する必要がある時は、踵で二三度、象の大きな耳の穴のうしろを蹴飛ばす。時々、象が云ふことをきかなくなる場合があると、弓形の小刀で、大きなおでこの瘤を叩く。勿論、象にして見れば此んな小つぽけな脊中の荷物位、得意の長い鼻で、一番高い木のでつべんまで抛り上げることは容易だつたに違ひない。が、象は夢にもそんなことは考へないと見え、嬉しさうに眼を細くしながら、あのだぶついた